

花月楼主人の都々逸

菊池 真一

一 花月楼主人とは何者か

花月楼主人なる人物の著作に次の四点がある。袖珍本で、主に歌の文句を集めている。

- 『きはらし』（明治二十二年五月十五日出版。著作者：西村虎二（次郎）。発行者：木田吉太郎。発売：東雲堂）
- 『きはらし 第二篇』（明治二十四年四月十三日出版。編集兼発行者：西村寅二郎。発売所：東雲堂）
- 『きげんよし』（明治二十四年八月一日出版。編輯兼発行者：西村寅二郎。発行所：東雲堂）
- 『なかよし』（明治二十五年五月二十五日発行。編輯者：西村寅次郎。発行所：盛花堂）

表紙には「花月楼主人著」とあるのだが、奥付を見ると、これは「ニシムラ・トラジロウ」の筆名らしい。「虎二郎」「虎次郎」「寅二郎」「寅次郎」いずれの表記が正しいのか不明。

国会図書館のOPACでは、「西村寅二郎」「西村寅次郎」の両方が出てくる。

- 大久保武蔵 鑑松前屋五郎兵衛之実伝（西村寅次郎）自由閣。明 18.9.
- 市町村制（西村寅二郎）木田吉太郎。明 21.9.
- いろは都々逸一千題（西村寅二郎）東雲堂。明 24.2.
- 端唄五百題（西村寅二郎）東雲堂。明 24.2.
- 大津絵ぶし大全（西村寅二郎）東雲堂。明 24.8.
- 教育修身談（西村寅二郎）文廼家主人）東雲堂。明 25.1.
- 日本新軍歌（西村寅二郎）東雲堂。明 26.6.
- 愉快ぶし（西村寅次郎）東雲堂。明 28.2.
- 吹風琴独まなび（西村寅次郎）東雲堂。明 34.7.

本名（？）でも唄本を出しているので、「花月楼主人」とは、「花月楼」の「主人」である平岡廣高ではなく、西村寅次郎（寅二郎）と考えておく。

西村寅次郎は、安政二年（一八五五）生まれで、没年不明。仮に百歳まで生きたとしても著作権は切れている。

ここでは、『きはらし』『きはらし 第二篇』『きげんよし』『なかよし』の四書から都々逸を抜き出し、更に『いろは都々逸一千題』全文を翻刻紹介する。

二 『きはらう』

『きはらし』(市立米沢図書館所蔵・九州大学所蔵・菊池所蔵)

(以下、翻刻・ページ数表示は菊池蔵本による。米沢市立図書館蔵本は若干異なる所がある。九州大学蔵本は落丁・乱丁あり)

都々一之部

- 遅くなるのを待つ身につけて止めた昔しをおもい出す
- おもふひとから盃さゝれのみぬさきから桜らいろ
- いろだいろだとわけ白いとめぬさきからひとのくち
- 帰らしやんせと口ではいへど眼にはやらずの雨もよい
- 明かした中でも苦をかけまいと思や少こしの嘘もつく
- さけも飲まんせ登楼もさんせしかし勤めもおこたらず
- 富士のやまほど苦勞をするがもとは一夜の出来こゝろ」(三)
- 死のおもふた此の剃刀で眉毛おとすと知らなんだ
- 一夜あはぬをうらむも道理二度と一世に用はない
- 二世を契ひし大じなおまへ別れりやこの世に用はない
- はなは世上の愛敬ものよ野暮なひとにも香をおくる
- むめも桜らも私たしはいやよもゝともゝとの間がよい
- あれさおよしよ見られちや悪いはなを折なと書てある
- 梅のにほひを桜らにこめてしだれやなぎにさかせたい
- とめたい思もいが天までとゞき主を返へさぬ今朝の雨
- たまにあふ夜の話しが積もりかへす道なき今朝の雪
- 咲たさくらになぜこまつなぐ駒がいさめばゝながちる
- 離れられられられない訳は言はれられられられぬ」(四)
- さかざきほしさに言のじやないが杯疊の模様じやない
- おもひだすほど忘るゝひまがなくてしばしも苦が絶ぬ
- ねても覚ても起てもいてもわすれられられられぬ
- だます勤めのならひといはれつらやまことも虚になる
- きつと出来たとひとめをいとひ指をあてゝるかん徳利

- アレサお待よがらすですけるたゞさへ人目の多いのに
- 咲たがはなやらさかぬが花が咲くをまつのが花のはな
- よそにみれんの無お前ならとめるみれんもないはなし
- 三千世界はひろしといへどすいたおかたはたゞ一人
- 針のあなから浮き名がもれて今さらぬはれぬ人のくち
- 焦れ死ぬさへわしや厭わぬになんで浮名がつからるか」(五)
- 時世じせつで落葉もするがいまに花咲くはるもくる
- 散とこゝろにがてんはしても花の色香にやついまよふ
- 意気な姿たにやまよいはせぬが花もみもあるきに惚た
- こゝろとこゝろがあいさへすれば性があふが合まいが
- 君をまつよはとたゞくかぜも若やそれかときがねする
- のろい様だが今日このごろは夢にもおまへの事ばかり
- 顔みりや何にもでんでん無視よはへたつのさへしと縮み
- あはぬ昔しとあきらめたれば思ひだしてはついふさぐ
- 思もひがけなくみやはず顔を烟りにしてゆく汽車の窓
- 送くる手がみは二重に封ふじ中はひとへにねがひます
- 知らぬ昔しとあきらめたれどほれたこゝろが承知せぬ」(六)
- 死んで花実が何さくら木も散ればみかへる人はない
- 為をおもへば思案のほかの思案さだめて辛抱する
- 聞いてきかない振よりつらい知ツてしらぬといふ人目
- しりをもちあげて今ゆかますと言ぬばかりに走る車夫
- 火入とりよせまくらにかはせ人の足音かまやせぬ
- 松浦佐世姫石にもなるがわしがなごりはふちとなる
- 苦勞したとて時節がこねばさかるさくらもさきはせぬ
- ぬしと聞たてつまづく火鉢ア、痛かつたとなでさすり
- ほれた顔せづくちへもださず外へさかづきさすつらさ
- さいたさくらにこゝろの駒も狂ふくるわのゆふげしき
- 花に逢れぬ思もひにくれて雁りはやみじをなきわたる」(七)
- ほれた心ろをぬしや白菊でいつか十日の菊となる
- ぬしは今ごろ起てか寝てか思いだしてかわすれてか

- 逢たうれしき写真にとりて逢はぬその日にながめたい
- 晴て夫婦になるまでは好きなひとをきらいといふつらさ
- 富士の高か根に降のも雪よ賤がのきばの雪もゆき
- 泣たわたしの涙だをためてぬしのうはきをながしたい
- 鹿がなかうが紅葉がちろが私のこゝろにあきはこん
- 顔見たばかりで嘶はできず世間の人目ががらすまで
- いふてしまうかいはずにおこか思案なかばのあらひ髪
- 池のあやめも筆まで染て一寸一筆かゆつばた
- 京はドス大坂サヨカ花の東京はサウデスカ(八)
- 待にかひなきこよいの雨でうちにながらそでぬらす
- 蒸気出てゆくけむりがのこる残る煙りがしやくのたね
- 主のなさを身にひきうけていまは十月のころくろう
- 主の来ぬのが病のもとで今じや苦勞を重夜着 可愛亭糸志
- 酒の多はお身の毒スリヤナ(眠)さんせと止る猪口 豊橋小雪
- 樂ありや苦勞と言よな者で逢ば別れも有道理 富山朝蝶
- すゐた姿の庭木の松へたつにからまるつた蔓 全
- 露のなさを只楽しんで恋の闇路をとぶほたる 京都花遊
- ふとした彼子の島田に浮今しや不義理な大井川 島田小卷
- 客を迷はず身でありながら客に迷て苦勞する 四日市三吉
- チンチンかも鍋煮もの夫婦破たお鍋に閉た蓋 東京鯨猫生(九)
- 年も十五の月より主を思そめてはやみとなる 洲崎玉助
- 切て志摩はざ美濃尾張じや意見駿河も甲斐が無 品川若松
- 主は松の木曲つて出も私や蔦ゆへからみつく 古市玉助
- 口で惚ちや当にはならぬならば保険を付さんせ 金沢小鈴
- 浮気な花だよあの朝顔は一夜ともたぬ乱咲 小松夢助
- 千里も一里と通いし夢の醒りや一里が又千里 高岡小糸
- 恋の山みち凸凹なしに儒者も学者も踏まよう 大聖寺和漢●
- 龍田浮名はゑゝ間々よなどゝ云丈尚更氣を紅葉 武生千代吉
- 川と云字にねる源とは泣たなみだのたまり水 広島才三
- ぬしの杯とる手を握りそつとそひねの夢枕 仙台小春

- 人の心も主やしら菊であへば黄菊な事ばかり 長崎丹治(十)
- 意見聴ねば親へは不孝聞ば主へは義理たゝず 名古屋ゆき
- 文句入都々一之部
- 有名無実の夫を持ってば「上るり」「蝦夷長崎や国々へゆかしやんしたそのあとの留守はなほさら女氣の」浮気はしやうちでこがすむね
- 写真ながめて又おきなほり「上るり」「こんな殿御を持たながら」独りねるとはばからしい
- 元は士族で今ではこじき(十一)「上るり」「コレ母さま士ひの子といふ者はひもじいめをするが忠義じや」とはいへ食ずにいられない
- いやがをうでもかうなるからは「上るり」「親にそむいてこがれたとのご夫婦のかためないうちは」わたしやお前のかくしづま
- 逢てうれしいたがいの胸も「上るり」「是が別れのさかづきかとなしき隠す笑い顔」すゑはなみだのたねとなる(十二)
- なぶらさんすかおこつてみせて「はうた」「積るくぜつ其うちにとけし島田のもつれ髪」むすぶえにしや中なほり
- あらマアあきれたはがきのへんじ「はうた」「おたがひにしれぬがはなよ世間のひとにしれりやたがひのみのつまり」わたしやみるのもはらがたつ
- いろにやださぬがこゝろのじまん「はうた」「宇治はちやどころさまさまの中にうはきの大吉山と人の氣にあふ水にあふ」のんでみさんせこの美味を(十三)
- のぼりつめたるこひぢのやまに「ときはづ」「早衣々と引しめるおびかくさるゝたはむれは」おりるはしごもつゝらをり
- まけりやはらたつかちやなほつる「こはいろ」「おとみさんコレおとみよもやわすれやアしめいノオよ三タ三タ」じつにをいないこのしまつ
- つぢうらの念がとゞいて今きくたより「ことば」「ハイゆうびんト」おもはずいたゞくぬしのふみ
- 天眼きやうをばもてるおまへ(十四)「せんだいぶし」「いまさらいやとはどうよくなからすがながよがあきやがうてらのぼうさんかね

のこうがこのわけきかねば」めちがひなぞとはいはせない

○月琴どころかげつきうさへも「胡蝶舞」五々六五々六五上〇尺工尺
工上四〇尺々六工尺上尺上上〇乙五乙五〇五六五上六〇六五六五上
六」今じやひしよくのむげつきう

○きうへいじみたるかんがくよりも「月琴」乙四合四乙四〇工尺上尺
凡工尺上尺上四〇四上尺工尺乙四合合四上合四上尺凡六尺上四〇
合」(十五) 四上四合四工尺九合九合四合」とうじはやりの横文字
○ものみだかいもところのつねよ「あきの宮島まわれは七里浦は七う
ち七多びすよコイコイコイサエーツサエイサエー」こひのでんはきは
いだつし

○とゞめかねたるわかれをかこち「君去春山誰共遊鳥啼落水空流」た
より待身のものおもひ

○あふてうれしきまくらのひゞき「春風桃李花開日秋霜梧桐葉落時」
(十六) ゆめをさました風の音」(十七)

都々一

○ぬしの盃とる手を握りそつとそひ寝の夢まくら

○むねの曇もいつしか晴てあうて嬉しき月のかほ

○こゝろ久方くがいの勤かたいまことをきく井楼」(二百三十八)

○喧嘩はおよしよ互にわるい和睦したのが利口将

○逢ぬからこそ恨もいふがあへば恨みも愚痴と成

○人の心は主やしら菊であへば黄菊なことばかり

○愚痴がこうじてすねては見が明の鳥で仲なほり

○ひけば此方よる糸やなぎ風がじやまして中を裂

○意見聴ねば親へは不孝聞ばぬしへは義理たゞず

○否な猪口でもささゝれた義理で受りや嫌と彼目付

○雪に若竹野わけに木の葉風にやなぎよ松の月

○羽織させかけ背中を叩き来る日尋てかへす多り

○親は誰とも白歯でふくれ出来た其子は紋ちらし

○変な謎だとお隣のぞきやあきたもんだよ白昼」(二百卅九)

○言にや言れず言ずニヤおけず言て言たらおこるだろ

○雨は降出すお客は来ない茶を引娼妓のしぶい顔

○月の国さへ見出す世でも恋のそく量は六かしい

○主と云字を逆まながら読ではかない気をいたす

○儘に成ぬが浮世のならひまゝに成のは米ばかり

○酒もきり上げそれ唐さきは濡て色ます夜のあめ

○思ひ思はれ思はれ思ひ思ふた同士でまたおもひ

○可愛さ余て憎さがなどと言ても矢張にくはない

○禿みどりにいとしいたより聞てうらざと時を待

○重い尻でもさすれば動く紙幣のちからは別な物

○水に沈だ投書のやうじや浮ぶてうしの此せがき」(二百四十)

○けふのせがきに十種かけて謡積る没書にたむけ草

○水に縁ある浮名の恥をとりけす供養が仕て見度

○施雅記するとて気安めばかり矢張没々お取けし

○水の藻屑と沈だ投しよけふのせがきで浮み出す

○投書のせてと幽霊に成て知盛もどきでばけて出

○ちつてみくづと成たる花もうたふ隅田の流踏会

○出か出ないかこんたん迄も遣た上句の此せがき

○義理を立たもみな水のあわ内をそとはの浮気者

○筆もなげぶみきのふの没書けふは嬉く大せがき

○野暮な投書と知ては居れど水葬ときいては情ない」(二百四十一)

○水の真そこにしづんだ没書せがきされても浮やせぬ

○ボツボツ降出すなみだのあめも晴て消ゆく大せがき

○ばけて没書が出るかとおもひ記者がせがきの老婆心

○雅理雅理もう者も能舞子の社宛て浮上つた大施雅記

○送る投書に没書がなけれやらんぶさうぢに困るだろ

○思ひ込だる投書だ物を施雅記に乗せなきや化て出る

○私しの恋路はわだちの魚よみづに逢ねばこがれじに

○親へ孝行主へはみさほたつて苦界の身をあるふ

○ひやりとするよな小言を聞てあつい二人の熱がさめ

○硝子障子は人目の関きよあれさおまちと袖びやうぶ

○変だ妙だどくびをかたげおれの女房がハテへんだ」(二百四十二)
 ○商売がらでも目あてがあれば実とまことは立とほす
 ○うち気物だよひき込んじあん指でおされたかたつむり
 ○思ひおもふたがらすのふうふ外の物ではきれやせぬ
 ○はれて合乗できない中を知てふりだすすぬなあめ
 ○他処へ心をうつされ今じやかゞみに合せる顔もない
 ○こひに上下のへだてを付てねだんよくうる差配にん
 ○すがたやさしきアノ青柳にさした三日月つげのくし
 ○とんだ処へ烟管のあたまくぜつのもつれのやつ当り
 ○なびくぬしとはつゐ白藤のかはらぬ色故身をつくす
 ○嬉しがらせて又ふさがせてかげで笑つて居るにくさ」(二百四十三)
 ○長い烟管のけむりにまかれ家の首尾さへわすれぐさ
 ○夢のうき世といふならいつか覺そな物だよ此まよひ
 ○他所の気がねも夏まのこほり解て嬉くアイスクリーム
 ○情夫がゐるとはお客につゞみうまひ胡弓で二絃きん
 ○コンニヤクくろうの本はといへば猫と狐が有ゆゑに
 ○あまひ言葉でもちやげておいてからい手切の金を取
 ○むすぶ心で弾たる三すぢなびくわたしはいとやなぎ
 ○きれて結んで結んできれて繼めだらけのゑんのいと
 ○おもい焦れしその甲斐ありて晴て添寝をするが富士
 ○一口にいわねど心にそれとおもやいつしか顔にでる
 ○月がそふたと浮名や立ん露の目にはたつはぎのはな」(二百四十四)
 ○水にさくといつかは実をもむすぶ事ある蓮の花
 ○雨にたゞかれ人には踏れそして花さくのべのはな
 ○逢てはなせばくろうの種よ逢なきや焦て猶くろう
 ○そつと妻戸の透間をもれて闇にさしこむ夜半の月
 ○あきが来たのでわしや捨扇風のたよりも更らない
 ○暗いところとする営業は写真師ぢごくに賊よたか
 ○何かするかと寝たふりすれば舌を出したり笑たり
 ○胸に燃たつ思ひの火とば落をす涙だけでけすつらさ

○いつか浮名の音にもひゞく礎まくらで出来たなか
 ○気障のさかづき取手がはづれこぼれ幸いむねの中
 ○命あつてのふたりが中をすてゝ添りやう筈がない」(二百四十五)
 ○寒暖計にも度があるものを過ちやいけけない夜の業
 ○財布の底まではたいたあげくおとゝひ来とは情無
 ○夜半まじまじ灰吹たゞきあくびまじりて念仏いふ
 ○ちらりと格子へ出す顔みつけぬしを吸付たばこ盆
 ○まてば甘露とそりや甘口か待れる程なら気は揉ぬ
 ○苦勞すてばちかうなるからは弾ぬいきぢの上調子
 ○義理やみけんで断念らりよか命とかいな入黒子
 ○恐ろしい程苦勞をするも憎らしいほどほれたつみ
 ○きまりが悪いの恥かしなどゝみえを為中や人も花
 ○親に孝行な鳥がなぜに恋にも忠義をつくさない
 ○腕を枕のかわりにさしてあいたかた手でひき寄る」(二百四十六)
 ○きざな奴だと他人にや言ど胸じやのろけの三下り
 ○心細さに客をばたより浮てしづんで日をおくる
 ○人が水さしや猶おたがい熱くなるのが恋の意地
 ○針路定めてのりだすからは浪かぜいとはぬ恋の海
 ○蚤蚊しらずのとも寝の肌を爪がくひつく痴話の床
 ○粹がこうじてアノ青梅もとゞのつまりは身をおとす
 ○心の根をきりゝとあげて調子にやくるはぬ私胸
 ○ひとりまつ夜は虫の音ふけて檐の燈籠も眠いかほ
 ○主に葵のしよてからほれて闇路いとはずくるま草
 ○たらはぬ私にさばけたお前あぢな中だといはし鯛
 ○惚たこゝろの一念こつて主にや半句もないわたし」(二百四十七)
 ○仇な色香にや迷はせぬがじつとなさげにや竟迷ふ
 ○堅い音じめのこゝろの駒も主の調子にやつい狂ふ
 ○すいた中からおこるよごらん蓋の合ない火けし壺
 ○行にや行れずゆかずにおおけず言て行のも変な物
 ○更て松しまこゝろもちぢにくたく波ぢの月のかほ

○恋とこひとの両花みちにちわとくぜつの長せりふ
 ○かづの人目につくまの鍋もつみと浮名のかさね妻
 ○ふつとめざめて見庭さきにゆめの名ごりが飛胡蝶
 ○ごんとつき出す東台の八時こよひは忍ず池のはた
 ○薫かくせどいつしか浮名もれてすきやの玉かつら
 ○おしつわつよくも片山ざとの鮪やの娘かひく小まつ(二百四十八)
 ○元木のわたしを見あきたせいかぬしは末木の色狂ひ
 ○それと目顔でさしたる猪口もぐつとのみこむ大一座
 ○文をしてさへはや此うわさふうじられない人のくち
 ○宵はうかうか通つた土手を今朝は氣のつくアノやなぎ
 ○丸金貨に四かくな紙幣あれば三十日も苦にやならぬ
 ○のぼるたよりの電信ばしらくや地震がゆりたほす
 ○逢ぬ其夜と投書のみづはこんなばかげたことはない
 ○思ざしだとさかづきさゝれのまぬ先からあかくなる
 ○へちまあまめと小言をいふがうぬは南瓜にいき写し
 ○逢ぬその夜は月夜もやみで逢ばやみでも氣がはれる
 ○すみはさくらにつきがた香炉床にかけたる雪のぢく(二百四十九)
 ○君をまつむし夜ごとに啼て露のなさけにくさまくら
 ○否な奴だが無卦にもされず有卦にかへすも世辞家業
 ○れんじのすゞむし啼やむたびに主が来かと立て見る
 ○花のさかりはあてにはならぬ私やかはらぬ末をまつ
 ○甲斐でながめて枕をかりて寝て見て駿河の不二の山
 ○逢もお金でわかれもお鐘かねにうらみがかずござる
 ○さけのみ鯛あそびもし鯛金もためたいじれつたい
 ○罪もないのに腹だちまぎれいやな煙管とはふりだす
 ○あつい坐敷をこつそりぬけてぬしと添寝の竹婦人
 ○待てど来ぬ夜は月かげよりもぢきにさしこむ胸の癩
 ○速記法にてあなたのはなし書ておきたいことがある(二百五十)
 ○闇夜の柳とこゝとの額は見あげるたびエゾツトする
 ○僕の女房にやかんぶくします昼夜勤務の間はかゝぬ

○萩のたまがはにしきのたもとうつす心の水かゞみ
 ○あいつつき夜に来きやくよりもこゝろ闇路に通ふ人(二百五十一)

奥付一(市立米沢図書館蔵本)

明治二十二年五月十五日印刷

明治二十二年五月十五日出版

明治二十二年六月一日再版

明治二十二年六月十五日三版

明治二十二年八月廿三日四版

明治二十二年九月十日五版

明治二十二年十月十五日六版

明治二十三年七月五日七版

明治二十二年十月二十日八版

発行者 愛知県名古屋市本町通六十八番戸

木田吉太郎

著述者 全県同市下長者町一番戸

西村虎二郎

印刷者 全県同市伝馬町六十番戸

山田良弼

売捌所 名古屋市玉屋町一丁目

東雲堂

奥付二(九州大学蔵本)

明治二十二年五月十五日印刷

明治二十二年五月十五日出版

明治廿六年三月廿五日第廿版

発行者 愛知県名古屋市本町通六丁目

木田吉太郎

著作者 東京市京橋区中橋和泉町四番地

西村虎次郎

印刷者 大阪市北久宝寺町三丁目百十番邸

板倉美枝

発売所 名古屋市本町通六丁目

東雲堂本店

同 東京市京橋区中橋和泉町四番地

東雲堂

同 大阪南久宝寺町四丁目九十九邸

東雲堂

奥付三(菊池蔵本)

明治二十四年八月五日印刷

明治二十四年八月十日発行

明治三十年十一月廿五日第五十一版

編輯兼発行者 日本橋区新右衛門町十七番地

木田吉太郎

印刷者 神田区柳原川岸二十二号地

角張敬四郎

発行所 日本橋区新右衛門町十七番地

集文館

同 通り四丁目七番地

東雲堂

三 『きはらし 第二篇』

『きはらし 第二篇』(国会図書館所蔵)
都々逸の部

- ふたりの智慧をばしぼりの浴衣末はどうにか鳴海湯
- たまさか逢のに短かい夜半は鶏にうらみをつけの櫛
- どうか河骨どうりを付てういたころでおちつかぬ
- もれしうき名に気を奥二階人目へだてのあをすだれ
- 人目といへば気兼ねこひじかやのひとへも夜半の関(百四十八)
- ぬるゝ間もなく早や明けしらみはかない契の夏の露

- 蓮のはなさへ夜明ニヤ開らくナゼかひらかぬぬしのむね
- 独りねる夜のわたしの蚊帳へそつと覗いた月のかほ
- 追ふたほたるニヤ罪とはしれど追ねば斯いた首尾が無
- 宿と云ふのも極りがわるく人の前ではくちのうち
- 世帯じみれば糸づめさへも自然なくなり掃きだこ
- つめたいお前の心と知らず惚て今さらこほりこほり
- 思案むすぼれ例もの癩をひらきましたよ人來どり
- 他人ぎよう儀は人前ばかり部屋へは入ばこちの人
- 思ひ立つ恋もしあるならば蛇籠と化すらん竹婦人
- 月も朧氣しのぶにやたより晴て逢れる中じやない(百四十九)
- のめや唄への人目をぬけてちよつと忍のしたざしき
- 寝るもおきるも自儘ニヤならぬ風に任せたおみなへし
- 世帯じみたか夏やせしたか掛けしたすきに結びたま
- 君がなさけのこもりしかやのうちは他人の風入らず
- 恋に朝夕見る度毎に顔にやつれのますかぢみ
- 風のまにまになびいちや居れど心乱さぬ糸柳
- うそを誠と聞せたむくひ誠も誠と聞かぬゝし
- 知らざ話すがお前に私や命もいらぬと惚て居
- 深い私しの心も汲まずいつも体よくはね釣瓶
- 人に咄ば噂が怖し二人じや文珠の智慧も出ず
- 思ふころを三筋によせて先の心をひいて見(百五十)
- 花の笑顔もうつれば替る露をだき寝の桐一葉
- 縁を組糸細くも末をかけてむすんだ時計ひも
- 帰りの晩いを気に掛時計若やと吝気が廻る針
- うはき磨墨馬々だますかき手は誰だ白的表装
- 啼たからすもアレ見やしやんせ恋の報ひの羽ぬけ鳥
- とけたと見せても冷たいころ少しも情けは夏氷
- 神にほとけにねんじて待た甲斐はうれしや夏の雨
- 寝るもをもとを離しはしない好た似貌のこの団扇
- 主の来る日を籬でまつ身今はかへりをかどでまつ

- がらす障子ははかない物よお貌見ながら儘ならぬ
- 華美を結城はみじんもないよじみに成たる子持縞」(百五十二)
- 鳥渡でるにも延喜を取つて火うち打せるうしる影
- 猫を相手にぬしまつ宵はとけいはりに眼を眺め
- 重ね扇のすへひろがりて菊のかほりのどこまでも
- き儘そだちは一しほかあい初ね聞せる今日の雑誌
- 二人そろいのアノみであさぎふねにゆられに夕すゞみ
- からだの暑い陽気に加減むねのこげるは主のわざ
- 恋の暗ちにそらさへくもりこがるゝ螢のみちしるべ
- 首尾をまつ間のつなぎし船にとけて嘶しも下すゞみ
- 扇のかなめでたのみしおまへ骨と成まで離りやせぬ
- 邪魔して憎いとくべたる蚤があだを恩なる雨の首尾
- 思ひゆく月むねさへはれてこゝろ隅田のゆふすゞみ」(百五十二)
- 蚊やりくゆらし主まつ宵はとかく眼元がうるみがち
- ぬしの病もなをつたからは御礼まいりにはつあわせ
- 駕騫といわれるすゞみのうわさ聞てうれしき新世帯
- 浮きなお前にかぶせて見たい嘘を筑摩のまつりなべ
- 一夜あくるを妾しや松の内早くきゝたい初便
- 逢てわかれて別れて逢て妾しや嬉しい去年今年
- 嬉し初日に氷はとけてマタモ音づる山のたき
- 言葉に輪飾嘘つきはじめキツト裏じろ待わいな
- 女夫そろふて立たる門は主をまつとの心いき
- 猫をじやらして狐を馬鹿しぬしはたぬきのそらねいり
- 泣てうれしく笑ふてつらきなくてたがひにとうとうみ」(百五十三)
- 待ずるたなら儘まにも駿るが阿はず甲斐飛驒美濃おも
- さわぐ座しきで袴をつけてすましたかほなるかん徳利
- 珠のやうなる十六ばんむすめ割らうと目がける人ばかり
- 斯ては果てじとゞける障子未れんであとから又のぞく
- 大和川とはへだてゝ居れどふたりがその中吉の川
- 否な猪口でもさゝれた義理で受りや嫌だと彼目付

- 色目と思つた其の目は藪でお門違の間の悪さ
- 言ぬ花からものいふ花へむけるくるまの長づゝみ
- 入てお呉よ痒くてならぬ妾一人が蚊帳のそと
- 色気はなれば墨絵でさへも濃とうすいが有はいな
- 離れ離れに別れちや居れど水に浮草根は一つ」(百五十四)
- 晴てのみやろとは蝶花形よむすぶ多にしは妹背山
- 花火褒つゝ簾をあげてソツと流で手を洗ふ
- はなしは絶ても今夜は雪が積り積つてかへされぬ
- 羽織着たまゝツイ転び寝の皺が悋気の種となる
- はでな桜のくれないよりもじみなみどりの松が可
- 莞爾わらふて見せたい処を憚る人目に澄ましがほ
- 憎らしいよと横目で睨み可愛といふよな爪りやう
- 二世を契ひし大切なお前別れりや此世に用は無い
- 西も東も知らない者を連て浮気なたびかせぎ
- 二世を堅めたおまへの前でできて気になる三の糸
- ほとんど洋服小意気な客にわちきや洋袴と初会ぼれ」(百五十五)
- 惚たほの字を火の字に書ば熱くなるのも無理はない
- ほれて裸で寝のじや無いよ汚してならない借た衣
- ほそい元手の三筋の糸は長い浮世のつなぎざほ
- 二銭おつ張り郵便きつてこひ路のつかひも大政府
- 握る手さきを払つてひと目憚る笑顔に当るそで
- 惚て呉ずばなま中こんな気がね苦勞はせまいもの
- ホンニ難面アノ稲妻は二の目見ぬうち消てゆく
- ほんに否だよ夜あけの鐘とかりたお金とこの気兼
- 外のお客へ腕の文字を隠すおまへの腕まもり
- 惚たは妾しが重々わるい可愛といったはぬしの罪
- 命あつてのふたりが中をすてゝ添りやう筈がない」(百五十六)
- いろは売ども心のまことどろの中にもはすのはな
- 寧いはふと口まで出ても下すまれうかと又だまる
- いふて仕舞が云はずに置か主の浮気のないしよ事

- 息を吹かけがらすへ何かゝいて二人がわらひ顔
- いつも暗夜か恋てふ路はふんで迷はぬひとはない
- 二度の務もお前の為に不実するとは情けない
- 庭の虫のねなきやむたびに若や来たかと立て見る
- 二階座敷の手摺にもたれまぶはこぬかとまねぎ猫
- 莞爾わらふて指たる猪口を澄して返盃は水臭「い」欠落
- どうで近遠と知てはいれど八景おいたか気が揉る
- 泥水社会とたくさんさうに言へど鯰もおなじなか「(百五十七)
- 土手の八丁は車で来たと口の八丁で間を合はす
- どうせ読れて仕舞た鼻毛いま更抜のは無駄なこと
- どうせ及ばぬ願ひぢやなどゝ云ふ中や思ひが未浅い
- 解てうれしい此したひもを結ぶ思案にわしや瘦る
- どうかしたかと一筆書て遣す隙ありや昼寝する
- 憎い規則が世にないならば疾に身儘になるものを
- はたから見ばゝかけた嘶まよはにや其理がわかるまい
- 早くおまへを鯰にさしてふたりぬらぬら暮したい
- 腹を立ててまた笑わせて嬉しがらせて泣かすのか「(百五十八)
- 色にほだされ取ては見たがいやになつたよ渋い柿
- どうでもおしよと投出す身体其様斯かと引よせる
- 遠ざかるほど逢たい物を日々に疎しと誰が言ふた
- とめたい思が天まで届きぬしを帰さぬ今朝のあめ
- 遠く隔てど切さへせねば心便りの鳴子繩
- 時計廃して日をくもらせて然して朝寝が仕て見度
- 年は寄てもうは気はやまぬいろに期限の律はない
- どうか浮気はモー吉田やと意見夕ぎり主のため
- 遠ざかつても又アイウエ変らぬ誓を夕チツテト
- どうせ二人が何様成るからは真あかして人だのみ
- どうか為かといふで書て遣しや無心を云ふものを「(百五十九)
- いろはさめない一粒鹿の子ぬしとこゝろのあい鼠
- いろは紅葉もこくなるからにハット浮名が龍田川

- 色を教えたアノ鶴鴿にかへて不粹なあげがらす
- いつた一言あとへもひけず闇魔顔して聞くむしん
- 一夜あはぬをうらむも道理二度と一世にない月日
- ぬしの浮気を四方へくばる八ツ目鰻の目がほしい
- ぬしの口ぐせ不図いひかけて咳に紛らす人のまへ
- ぬしの浮気に浮気をすれば妾や苦勞に苦勞する
- 主は浮気が種まき散しや妾しやりん気の芽を出す
- ぬれぬ前こそ露をも厭へぬれて色ます女郎花
- 思ひ染たる未通女の娘恋にみだれし野崎村「(百六十)
- 鴛鴦の衾をかさねて居れば明のからすが引わくる
- 親の意見を聞きや聞たびにぬしの言葉所思ひ出す
- お前ぢや気を揉み女房にや気がね是ぢや命が続かない
- 思ふお人の手にふれよかと思やなりたや此ふみに
- 思つたばかりで届かぬこひの届く器械が求めたい
- 私しが忍んで往のを知らず悪や燃へ出す此蚊やり
- 別れに着せたる羽織の紋も影と日向とあるこひ路
- 妾を見棄て他国で花が咲くか見しやんせ咲やすまい
- 別れに汚したなみだの顔を一寸直して出る座しき
- 妾の病気はお医者ぢや不可ぬ主のお顔を見りや治る「(百六十一)
- 末で添ふのを私や松と竹こゝろひとつをしめ飾り
- 少しや自分で憂目をお三輪あんまり浮気が杉酒屋
- 粹なおまへによく仕込れて野暮をさつぱり洗ひ髪
- 姿見せず啼く一声は恋の暗路の時鳥
- すゞり取出し写真をながめ落るなみだで墨をする
- 紅葉ふみわけ妻こう鹿のこゑも淋しい秋のくれ
- 持た其時や嬉しいけれど持りや持るほど身が持ぬ
- モジモジしやんすな此様なりや儘よ構ちや居れぬ人の口
- 若も容でこゝろが知りや孔子は陽虎に似はせまい
- 持たが病の女郎買遊び天窓はげても止はせぬ
- 炭をつぎつぎ火箸を筆にあつい男のかしら文字「(百六十二)

- すかぬお客と添寝の夜は蚊帳の一重も魚の網
- 酸も甘いもよくしるひとは浮世の辛みも嘗てゐる
- 墨とすゞりは仲よいけれど水をさゝれりや薄くなる
- すねて見せたり跳かへしたり知らぬ顔する雪の竹
- 筋を立てば断ねばならぬ悪ふもつれし風の糸
- 知らぬ振して外目で見れば矢張他目によく知れる
- 自主の春風そよそよふけば文明開化のながさく
- 神武このかた千変万化しかるに依然というのみち
- 四本ばしらの火燧のしたでこひの地取のゆび相撲
- 自由に成るのも束縛するもみんな蛭子のかみの業
- 自由世界に不自由の物は貨幣と命と私しの智慧」(百六十三)
- 水掛論でもしなけりや胸に燃る思ひを消しかねる
- 乱れ髪見りや辛苦が増よ心もつれが有ふかと
- 見捨しやんすな行末までもなどゝ写真へひとり言
- 外飾も行義も構はぬほどにちれて猶さら深くなる
- 未練ものだとお前は云へど切るつもりで惚はせぬ
- 汽車で通へば苦なしに往が矢張をあしが先に立
- さらに議論のたゝないひとを議員に撰むは村会な
- 君は今頃駒下駄はいて声も高尾のそゝりぶし
- 来て居りや眠れず来なけりや狸どうで今夜は現責
- 義理も糸瓜も人目も儘よ川といふ字で寝て見度い
- 顔は見たいし見りや恥かしい扇一重が立田川『ななかよし』の下句は「扇一重がまゝならず」(百六十四)
- 通ふなはての松風よりも身にしみ渡るはあけの鐘
- 風のまにまに靡いちや居れど主はうごかぬぬい柳
- 髪はきつても二世まで掛た深い縁しはきるものか
- かゝる事とは妾や白狐主は手管の釣上手
- 神代このかた変らぬものは水のながれと恋のみち
- 読だ手紙が一々胸にきくはづ其の字は釘の折
- 善悪いふなら言せておきな頓て奇麗にかへすあだ

- 横に出て来る那の蟹でさへ霞とあしとを分て来る
- 甲夜にや粘着乙夜にや凝集明りや分解するわいな
- 宵から苦勞しやうやう情夫を笑わしや鴉が鳴渡る
- 夜昼思ひを妾やかけ時計ドンと逢なきや気が済ぬ」(百六十五)
- 夜明まへまでさす手枕にしびり切らして言ふ無心
- 証すきつねを証してやると証しに罹つて証された
- たてる屏風へ二人が帯を掛りやうれしや子持すぢ
- 抱たばかりで別れて仕舞ひゞた未練が手にのこる
- 達者な芸妓も及ばぬはづよをどり上手な座頭がね
- 算盤玉にもかゝらぬ金を二天作して通ふ
- 袖になみだの露おき初て思ひます穂のはなすゝき
- 空に晴衣小袖も遂に蝶ものがけの出養生
- 然してかうしてかうして而して身代限りはむねにある
- そつと妻戸の透間をもれて閨にさしこむ夜半の月
- 論もよさんせこうなるからは二人他国で新世帯」(百六十六)
- 碌々に寝ない妾をお前は無理に夫ちや身体が続かない
- 可愛がられて又責られて今じや手いけの夏のきく
- 顔に桜をオンノリ出てソナラ貴郎と云つたざり
- 傘の骨にからんで降る春雨はどうせ花散る廓通ひ
- 金の重みがあるのでうかとこひの深みへはまる客
- 唾をつけつけ毛をなであげてグツト突込む筆のさや
- つもの話に終うかうかと明して苦勞の今朝の首尾
- 尽ぬ話しに限ある夜を烏怨むは此方が無理
- 月落からすが鳴うと儘に帰しやせぬぞへ今朝の霜
- 月にてらされあたりを兼てはなればなれの二人連
- つらいお客や主人の氣づる取もおまへの為ばかり」(百六十七)
- 底の見へ透あの薄こほりとけた様でもあるへだて
- 袖に移りし此の梅ヶ香は東風の便りか今朝の春
- 其処に居るかと搜つて見れば枕屏風の影ばかり
- そめた浅黄がこい茶となつて末は手織に子持じま

- 算盤持ずに積りし口説割る思ひで踏に来る
- 願ふの何のと少しの借を文のあとからまたもふみ
- 寝てはかんがへ起ては思案しても伴の気がしれぬ
- 女房もちとは知ての事よ惚るに加減がなるものか
- 猫と成たり狐となつて飽までのろまを喰ひたほす
- 寝間は気軽く別れたけれど着る羽織の手の重さ
- れんじをトントンたゝいて見たがよくも寝たもの若夫婦」(百六十八)
- 恋慕するのを明して云へば馬鹿でもお金のある故か
- つらいつとめを私しにさせてあるふ事かよ色狂ひ
- 露のなさけを只楽しんで恋の闇路をとぶほたる
- 妻恋稲荷にねがをか主の虫の居どころ宜いやうに
- 辛さ忍んで涙の顔を主にかへして笑ひなき
- なみに揺るゝ彼の月影ははなれながらも円くなる
- 鳴す半鐘で不凶眼を覚し主は妾に出をかける
- 男女同権きゝまちがへてぬしも越後かわたくしも
- 泣てだますが稼業のやうに云はんすお方は先が無理
- 内所の異見を横そつ方に聞て意気地を私やたてる
- 苦い顔する借金取も円を見せれば笑ひ出す」(百六十九)
- 濁り水でも澄さへすれば底のまことが見へとほる
- 程でまよはせ度胸でなかせほんにおまへは罪な人
- 惚た同志で気楽な暮し小袖ぐるみであさ寝ぼう
- ほんに可愛あの口もとをにくや午睡に吸ふ藪蚊
- 惚た女房のある其人になんで此様に惚たらふ
- 羅生門より三十日はこわい鬼が金札取に来る
- 洋燈明りを出雲の神が粹を聞せて風で消
- ランプ頭と誹らば謗れ己が居なけりや家が闇
- 乱暴さんすなお役で居て若も公たら居さうろう
- 楽なよふでも私とお主つとめと言字がまた消ぬ
- わたしやおまへに交情絞り妻に鳴海といはれたい」(百七十)

- 私やお前に火事場のまとへ振れながらに熱くなる
- 吾身で分らぬ我身の心ひよんなはづみで此しだら
- 煙草は尽るし火の気は失る来るかづかれの泣寝入
- 只た二ツの笑窪にはまり今ぢや諸方に穴だらけ
- たゝむ夜具から枕が二個飛だ始末をつい見られ
- 梅やさくらは当座の眺め何ふでも山吹いろがよい
- 内に居る時雷り聞て外で陽気な線香焚く
- 浮名たてられいまさら逃りや名誉回ふく出訴する
- うぬぼれ鏡でかほ見たびにほれぬ女の気がしれぬ
- 旨い世界にチンチン鴨の好たすき焼さし向ひ
- 旨いお世辞をいふ便だからわたしは半句も電信機」(百七十二)
- 胸にわきたつ蒸気をぬしのおそひ車にしかけたい
- 無理な首尾して逢ふのが花よ八重も一重の思して
- たもと豊に大門入れどかへりはひき馬あをいかほ
- 玉子守りは転ばぬ用意転ばす奇特は多びす紙
- 便り待のにまた川支へアゝもじれつたい五月あめ
- 異見するとはお前の野暮よ義理も世間もある物か
- 異見聞つゝ畳へ指で好きの頭字書て居る
- 異見するほど尚ほやけ酒を飲で困らす主のくせ
- ゐやなお髯のアノ深切が間夫の浮気と替りやすい
- 言はず語らず語らず言はず実と実とのやみ仕あい
- おしき筆止めまづあらあらと用事許りに候かしく」(百七十二)
- お顔見ながら話しも出来ぬ玻璃障子の内と外
- 思ひ思はれ思はれ思ひ思ふた同士でまたおもひ
- おもふ人筋とけないゆゑに愁ひみすじの家業する
- お顔皆鶴それから先は色よい返事を菊ばたけ
- 思ひきります諦めますと詫るあとから出るのろけ
- 玉の輿よりわしやみそ漉をさげて苦労もぬしの側
- 立引さす気でおほ当ちがひ払ひに衣服を剥取られ
- 鯛やひらめの海魚よりも私しやどぜうが口に適ふ

- 大工たのんで鉋でそつと立たうき名をけづりたや
- 誰か来たそで垣根の外で啼た松虫音を止む
- くもるころもいつしか晴て親に明した妹背中」(百七十三)
- 来るか来るかと待せて置て外へそれたが夏の雨
- 口を開いて笑つて見せて手を出しや針ある栗の毬
- 口のくるまをお客に乗せて恋の重荷を閻夫が引
- 苦勞黒繩子とけたる帯をむすびなをして権の妻
- 国のためだと夜なべを過しや牛の乳屋の為になる
- 西洋造りのオヤ馬鹿らしい算へる天井の板がない
- 背中で泣子をゆり揚ながら男涙にもらい乳
- せめて夢でも見やうと思ひ寝れば半鐘でまた起る
- 背から羽織を着せるに付て叩いた昔しを思ひ出す
- 拙者此地に用事がないが貴殿見たさにまかり越す
- 背中そむけて云度事も我慢して寝る其のつらさ」(百七十四)
- 櫛をさしたり白粉したり然しておきやくを釣し柿
- 暗い妾しと知りつゝ先が夜網打込む面悪さ
- 口に安宅の関所はないが弁慶めかして法螺を吹く
- 汲みつ汲まれつ互ひの胸を結んで嬉しい四手あみ
- 苦説つゝばね互ひに空寝無言と無言のこんくらべ
- 止そに見へても止ない物はぬしの浮気とつゆの雨
- やつれた姿も何処やら床したしか粹者の果だらふ
- 薬罐天窓の恍惚をきけばほんにお臍が茶をわかす
- やさしい育ちの私だけれど彼婦故だよ腕車ひく
- 野暮なをとこは元より承知金のないには二度胸り
- 結ぶ出雲の此のかみ写し妾しや一生のまもり神」(百七十五)
- 胸のつかえにや宝丹よりも主の顔見りや気が晴る
- 室の梅さへ開けば香るかす恋路も人が知る
- 無理を通したおまへの疝を耐へて妾しの癩となる
- 胸に燃たつ思ひの火をば落す涙でけすつらさ
- 向ふ見ずでも主より外に他所を見る眼は妾や持ぬ

- 八釜しいなら静かにおしな前が黙れば妾も止す
- 様子きかねば御腹もたとが是にやだんだん深い訳
- 安目を真に受け鼻毛を伸し代りの出来たも知らないで
- 安い時計と蕩樂むすこ狂ひ易うて手がかる
- やつとはふ子と国会議院たてるやうでも未だ立ぬ
- 焼餅らしいが云はねばならぬ毎晩明ては不用心」(百七十六)
- 雲に入る月の油断をコツソリ忍び檐端つたふて来る蜚
- 雲と泥とのへだてはあれど猫も官吏も身のつとめ
- 暗いところとする営業は写真師どごくに賊よたか
- 苦界のがれし身はつりがねよ君に撞れて権となる
- くれの六時は待わびたれどあけの六時はさて早い
- 嬉し可愛い昼寝の夢がエ、モ邪魔した手のしびれ
- 歌も唄はずおしやくも為ずに花を灌ていゝし地藏
- 動けないほど年季と尻で借を背負ても気はかるい
- 裏をかへしたおきやくの羽織や鼠海黄で猫が好く
- 吸つけ煙草の電気に感じ烟に巻れてあがるきやく
- 酸も甘いも身にありながら色づきや裸になる密柑」(百七十七)
- すがたやさしきあのいと柳かほの桜に手もゝみぢ
- 儘よ儘よが家庫倒し儘にならなくなる身体
- 間夫への盃さとられまいと指て赤らむ気のとがめ
- 儘になるなら彼様したなりで主の家まで送りたい
- 迷ふた妾しがガリガリ亡者難面いお前は鬼ごゝろ
- 乗て世渡るわたしの船へさしておくれよ主のさを
- 惚けて衆人になぶられながら思はず多つぼに入る妾
- 蕩氣どころか今日此ごろは息が通つて居るばかり
- 化粧する気かまだ水臭い上べばかりで惚はせぬ
- 今日強てと工んで見たが顔見りや思はず出笑凹
- 消した妾の此の刺繡は主の名前を入れる為め」(百七十八)
- 吹けよ川風うかれて居れど下は地獄のふなあそび
- 文じやわからぬ心の丈を寝物がたりにして見たい

- 富士のたかねにふるのも雪よしづの檐端の雪も雪
- 文明開化の御代にはなれどやはり苦勞はもとの儘
- 二人コツソリ咄の中を闇にして行く火取り虫
- 花街通ひと土族の商法摺て仕舞はにや眼がさめぬ
- 櫛は縁きりかんざしや遺物指環は当座の縁繋ぎ
- 主のこゝろは西洋紙よあつく見せても切れやすい
- 主と二人の懇親会を中止するのは明のかね
- 夕べ結んだ此の揚巻も今朝は口説のもつれ髪
- 雪の夜寒に待草臥て主と思ふて抱こたつ(百七十九)
- 夕べは持たと振れた客が自分でつめた痣を見せ
- 夢で成りとも鍊漿つけてぬしと相乗りして見たい
- 雪を被つて寝て居る笹を来ては雀がゆり起す
- 燈火の暗く成のは出雲の神か但しや苦勞の仕初か
- 解てニツコリ笑へば帯も縷子と博多のはら合せ
- 賽の河原とぬし待つ夜半はこひしこひしが山をなす
- 三年男をたつたと云へば寝てする事には構やせぬ
- 座敷の仁義に火鉢の義理で飲度酒まで辞義をする
- 先は住吉此身は住ぬ夫に浮名が高燈籠
- 境ひ論なるそのさかづきを藤八ア県にて裁ばんし
- 座敷仕舞て気儘な酒は脱だ着替の皺伸し(百八十)
- 雪も氷も解けそな世辞は水屋の姉いのあまいくち
- 雪の寒苦をやうやうしのぎ梅もはなさく春に逢ふ
- 行にや行かれず行かずや置けずと云て行のも変なもの
- 夕日に照され時雨に降られす多は錦をさるもみじ
- 雪の夕に嘶がつもり首尾の日和で解て逢ふ
- 寒さ凌げぬあばらやながら酔て眠ればたまのどこ
- 鷺か鳥か明らぬうちに春の小鳥がやかましい
- 三弦の駒にひかれてつひ浮々と泥にすみ込む大鯨
- 三世因果の道理でくどき二世のちぎりを為る和尚
- 目に立疲れとすがつた肩におもはず二人が見る鏡

- 目付で知らせて悟れと云へば悟つて居ながら知らぬ顔(百八十一)
- めぐる地球にいかりを下し暫時とめたき今朝の雪
- 牝鹿雄鹿のそのなかなかは立た角をもおる小鹿
- きみは吉野の千本ざくら色香はよけれどきが多い
- 切手と言字は気掛りなれど端書へ白地にや書れ無
- 狐出て行く狸はこのころのこるたぬきは夜具のばん
- 恋の邪魔すりや那の鳥さへ可愛と啼ても悪まれる
- こひは曲者油断はならぬいつか紙入までから『なかよし』では末尾が「までもから」となっている
- 恋と欲とのふた筋かけてわたしや三筋を弾く家業
- 理も非も知らずに結んだ縁と夏の氷は解易い
- 利口と思ふは親爺の欲目わちき風情に馬鹿された
- 水をさしても恋には渋い二人は濃茶のなからしい(百八十二)
- 身一ツなれども写真でお顔見れば其日の憂晴
- 三すぢ弾よりお髻を曳てはやく乗りたい玉のこし
- 晦日に月見時節だけれど女郎の誠にや未だ遇ぬ
- 店にや親指奥には小指そとにや人差しゆびが居る
- 水瓶見たよな娼妓のお尻抱たひ懐中がひえて来る
- ふられた証拠にや朝ぼんやりと廓帰りの白痴づら
- 文もこゝろもとゞいて解て今宵結ぶは二世のゑん
- 更て待夜に見にしむものは蕎麦の風りんかは千鳥
- 文の使に忍んで来れば親爺の異見の音がする
- 文明開化の鎖さぬ御代もなぜか恋路にや関がある
- 船に似た様な芸者の勤め楫をとりとり浮すきやく(百八十三)
- 手枕さしかへ顔見あはせてあとは行司のなゐ角力
- 出先問はれてツイ口籠り散歩とばかりは云ひ兼る
- 手鍋提ても添はねばならぬと言お方は主じやない
- 手持不沙汰で去した訳は繁き人目の別へだて
- 鉄道器械に電信だより負ず劣らぬ国益
- 逢ふて居てさへ届かぬ言葉文で書ればづがない

- あたと浮気のあい乗ぐるま引れて恋路の暗をゆく
- 故園の有様今如何ぞやと言ふて学費をまつて居る
- 氷より堅い心の妾ぢやけれど主の水管に解される
- 今夜お出と言葉の畏にかけておきやくを釣ぎつね
- 心の誠をすして見せて解ける氷の夏の夜半」(百八十四)
- 小鳥の名に似た娼妓の箆箆あけて見さんせ四十雀
- 縁は異なるもの網代の塀にからむ小鳥のつまきどり
- 易を見たらばお前は浮気妾や出雲へ暴れ込む
- 縁のこよりを出雲のたなで万一や鼠がひいたのか
- エ、此様になつたと島田を撫で後能く見ぬ主の顔
- 権利権利と云しやんすれど妾にや其様な義務はない
- 芸妓する身と画工の皿はひとの知らない色がある
- 化粧したのでフト見違へる雪のあしたの桃さくら
- 今日もけうとて噂をしたよなどゝ手管の口ぐるま
- 留守を使つて朋友返し後で舌出す若夫婦
- 留守に洗たく仕て見だされて今でいとまのこのつらさ」(百八十五)
- 留守にや案じる返れば邪魔に悪戯盛りの一人ツ子
- 思ふばかりで言出しかねる何卒先からいへば宜い
- お前に見せよと結たる髪を夜中に乱すも亦お前
- 朧月夜に人目を忍び雁も北ほとソツと行く
- 親も得心せけんもはれてもしと呼ぶのはいつの事
- 思ふ気まゝになる夫までは苦勞艱難根くらべ
- おもふ心の半ぶん言つて酒にかぶせてあかいかほ
- 思ふお方と添たいまゝに八百屋お七は身を焦す
- お顔見ながら咄しも出来ぬ玻璃障子かよしのがは
- 送る文をば二重に封じ中は一重にねがひます
- 一寸覗いて思はせぶりに憎や乙鳥の通りぬけ」(百八十六)
- 散す心がアレマア憎い春の夜中の仇あらし
- 勅を取りあげ顔うちながめ奏もおま判のみたいか
- 一寸時雨に袖ぬらされて暫し仮寝の雨やどり

- 利発なお前にたらわぬ私しトかつて情を掛やんせ
- 理を非に枉ても任せぬ身体添なきや妾の気が済ぬ
- 引たせかゝつた其手を押へぬしの月給はいつ渡る
- ひとの噂にせけんもせまく今の思ひがかくしづま
- 髻で官吏が勤まるならば勤めさせたや臍の下
- 人は見めよりこゝろと言が私しや夫より金がい
- 泣な此方よ向け疑ひ晴れた惚たが因果で無理もいふ
- 何時なりとも引して遣ろと風の神めがぬしゝをる」(百八十七)
- ならば出雲へ銀行立て色の為換がして欲い
- なまじ声をば聞せておいて思はせぶりだよ子規
- 鍋釜茶釜に摺鉢れん木区別あれども添とげる
- 内証とおもへにすかした放屁悪事千里のこの放屁
- 鍋に耳ある徳利に口よ猪口とはなしも出来やせぬ
- 初手は請願中たびや受理よす多は共和の夫婦なか
- 鹿と咄しも聞ない内に又もお前は気お紅葉
- 真にお前はラムネの徳利何為すりやお尻が据るやら
- 実を嫌つて不実をすいて儘にならぬもよく出来た
- 舌が楯とるアノ口ぐるま乗つて二階へひきあげる
- 回向するとして仏の前へ二人向いて小鍋だて」(百八十八)
- 海老で鯛つるア昔しの事よいまじや狐が鯨つる
- 笑顔つくらふ花をば棄てゝ悪やすげなく帰る雁
- 遠慮するのは始めの中よ惚りや互ひに喧嘩する
- 酔て寝たをれ引をこされて遺憾きわまる朝がへり
- 縁を切火も焼ボツくひに又も燃つくほくち箱
- 怖畏ものだよおぼえて置な地震債客りかゝおやぢ
- こゝろの底からさも実らしく嘘じや無よと嘘を吐
- 恋をするなと親達や言が妾しやどうして生れたか
- 恋のいろはを卒業すれば夫からちりぬる親の金
- 心で掛合目の越気でも金気がなくなりや通じ無い
- 逢はば斯まで嬉しい者を何んの異見が耳に入」(百八十九)

- 逢たさ六寸見たさが四寸それがつもりて癩となる
- あへば互にたゞぼふぜんとはなし残してあとくやみ
- あだなつめ弾三筋のいとに引かれて私は水調子
- 逢ふた初めに其捨言葉聞ば苦勞もせまい物
- 有そな様でも無のはお金無さそに見えても有氣兼
- 膝で知らせて眼尻で消て一坐酔せて後の首尾
- 髯と知らせて眼尻で消て一坐酔せて後の首尾
- 髯とむすんだ情約といて間夫と自由が致て見たい
- 一夜の添寝のなさけの露でもまた色ます今朝の露
- 膝へ来た児を熟々ながめ切て退けとはどう欲な
- 芸者止ても又権妻で苦勞するのの主の為め
- 兄弟と知らで契つた二人の中は人にも云れぬ腐れ縁」(百九十)
- 夜毎つれないぬしゆゑ妾しや双べる枕に恥かしい
- 他所で陽気な三味線聞ば内で陰気な小言聞く
- 引くにひかれぬ洋服仕立袖なて別れをするわいな
- 人の出世は知れないものよ襤褸も末にはかみとなる
- 悖妬するなら証拠をお見せ胸に覚えのない妾
- 灸も薬もなにきくものかわたしや逢たひ此やまひ
- 君の住家はいずれの所なぞとそろそろ借り仕たく
- きいた異見は煙りにすれどたつた浮名で胸こがす
- 君に粟津のないつれ恋路妾しや堅田のかたおもひ
- さきへ咄しの道さへつけば無理には止ない雪の朝
- さけのみ鯛あそびもし鯛金もためたいじれつたい」(百九十一)
- ほれた誠を団扇にこめてあふぎ入りたい主のむね
- 星の数ほどお人はあれど月と見るのは主ばかり
- うその中からまことの事を言せて見たさのこの苦勞
- 嘘がありやこそまことが分る杯と言ては嘘をつく
- いろよき紅葉も妻よぶ鹿も恋にうきななたつ田川
- つらいひと目の函谷関は鶏の空音じやこえられぬ
- 妻子の有のを承知で惚て末にや手きれと出る積り

- 月はやさしく寝床へすに遅いおまへの面にくさ
- 柘の櫛にはかゝらぬかみも人の口には戸がたゝぬ
- 元は野にさく芒もいまは世事にくすぶる炭だはら
- 燃る思ひは浮名と共に立や蒸氣の出けぶり」(百九十二)
- もともと浮気でかう成乍ら浮気するなも能できた
- 物質の変化は理学で知れどそもわからぬ主の胸
- 若や夫かと門の戸開りや棒を抱えて立て居る
- 店も土蔵もつい倒されるキアリくずしのあだ調子
- 見まいと思へどついお互に顔見合しては知らぬ顔
- 忍ぶ戸口ででる咳のめばなびく蚊やりがむせさせる
- むりな首尾して逢ふ夏の夜は話しなかばに鶏のこゑ
- おもひおもひてこの新世帯なつのすゞみもふたりづれ
- ほたるがりだに蛍を追ふておもふおかたの居る方へ
- 宵の口説に結んだゆめもとけてすゞしきはつのおび
- 色もこひじもまだしら扇そつとかくしたかたゑくぼ」(百九十三)
- お顔みづ沢たじます思ひひきぞわづらふあやめだけ
- あつい恋中すゞみの舟でぬれてうれしいにわかあめ
- ふるかふるかとうたぐる念もはれて気味よきなつの月
- 懐中かゞみに鬢の毛なをしそしてたがひにもつ団扇
- あだな詠めのはかない椽にいつまで私しを釣しのぶ
- 文句いりどゝ一の部
- 恋の欲目かおまへのなりが「賢女「三千世界をたづねても又とあるまい殿ごぶり」業平さんでもかなやせぬ
- またもお株の十八番か「清もと「あじにすねたる松の癖」」(百九十四)すなほに此方を向しやんせ
- 百夜通ふてサテ情なや「しん内明からす「たとへ此の身はあは雪と共に消るも厭ねど此の世の名ごりに今一度」逢て怨が聞せたい
- 未練らしいが寒くて成ぬ「端うた一中くづし「よつでの垂をおろしても又もなきゆく明がらす襟にかぜしむ衣紋坂」見かへる柳も小手まねき

- すねて背中を向ては居たが「富本松かぜ」「鳥が唄へば別れがいいやで」(百九十五) とほしかねたよ此がまん
- 十時の約そくアレ今じぶん「声色」「遅くなつたを云立にエ、」懐中時計はなんのため
- 嫉妬やくなどいはんすけれど「義太夫おび屋」「妾しも女子のはしじやもの」いはいで事がすむものか
- 綾や錦にくるまる主が「義太夫阿古屋」「昔しの衣々引替へて木綿木綿とおちぶれて」愛想のつきぬが惚た情
- 最はやおまへの来る刻限と」(百九十六)「歌沢」「言つゝ立てれんじ窓障子ほそ目に引明て」のろけながらに待て居た
- 主は海外旅行の身ぶん「野崎村」「あまり逢たきなつかしさ」どうぞ御無事で帰るやう
- じつと見詰てにつこり笑ひ「義太夫千両幟」「向ふ鏡のふた取て写せばうつる顔と顔」わたしの惚たも無理はない
- つひした縁からこゝろを染て「はうた」「寝ては夢起ては現まぼろしの」眼先にちらちらぬしのかほ」(百九十七)
- 人目しのんで恋路の関を「義太夫梅川」「夫は嬉しう御坐んせう去りながら私かとゝさんかゝさんは京の六条じゆずや町」こゝで峠の又苦勞
- 親父さんには放逐されて「詞」「今戸橋から帰らふか山谷橋から帰らふか」何処へゆかうか思案橋
- 十に一ツも真事はないと「清もと」「常から主の仇な氣をしつて居ながら女房になつて」百も承知でまたまよふ
- 真の話しに心も解て」(百九十八)「長唄勸進帳」「実に実には是も心得たり人のなさけの盃を」請て飲込む爛さまし
- 親とおやとのゆるしを受て「さんば」「扱婚礼の吉日は縁を定めの日を撰み」夫じや妻じやといわれたい
- 夕辺の夢見が迷ひの種よ「清元主水」「しかも桜の初日の夜はでな一座の其中でツイ岡惚の浮気から」今ぢや二人が身の迫り
- 痴話が募りてくぜつの果は「一中節吉原八景」「あらしは晴てひと時

- 雨ぬれて逢夜はねて」(百九十九) からさきの」まつた甲斐なきあけがらす
- 思ひきつたとおまへの言葉「阿古や」「問れしときの其苦しき水責火せめは答ふが」返辞するさへなみだ」
- 根もない花だと籠略にするな「清元落人」「散りても跡の花の中何時か故郷にかへる雁」根がありや再び花が咲く
- 雨の夜道も他目をしのび「長うた花車」「つまどたゝかば誰ぞともいはであけてむつごとくに」ななかよし」では「あけて霜夜のむつ」こと」(二百)」七ツにやうたふ家つ鳥
- 主の門まで来は来たものゝ「アダチ」「この垣一重が鉄の戸をたゝくにもたゝかれぬ」忍ぶ恋路のじれつたさ
- 真の夜中に不図目を覚し「言葉」「何か夢でも見たのかへ今時分泣て居る奴があるものか……ダツテ妾は悲しいものを」お前に別れた夢を見た
- 文明開化の自由だなどゝ「清もと」「男ははだか百貫の掛ねんぶつと向ふ見ず」ふへる浮世にする苦勞」(二百一)
- 別れちや見たれどコレ此写真「文字」「見ればみる程クツキリト水ぎはの立好男」おもひ出すさへへ癪のたね
- 思案なかばに空とぶ鳥は「常磐津源太」「アレ雁がねの女夫づれ」連て逃ろの仕うらか
- ぬしと別れのをのきぬぎぬは「清もと」「すがる袂もほころびて色香にほるゝ梅のはなさすがこなたもにくからで」かいるかいるも五六度
- 妾が悪けりやあやまりませう」(二百二)「已唄口舌して「口舌して思はせぶりな空寝入」すねずと此方を向しやんぜ
- おつにからんで持こむ言葉「十段目」「夕顔だなのこなたより」ぬつくと出たる情夫の兄
- 写真手にもちつくづくながめ「十種香」「ゑこうせうとてお容を」是が紀念とひとしづく
- 惚た惚たと口さきばかり「清もと」「世辞でまるめて浮気でこねて小

町桜の詠めにあかぬ彼奴にうつかり眉毛をよまれ」(二百三) またも其手でだますのか

●人目多けりや顔見るばかり「義太夫妹背山「かんじんの寝るときは離れ離れの床の中」手も握らず色目もつかはず何する事なほ出来ぬ
●ぬしは民情視察のおやく「千両幟「江戸長崎や国々へゆかしやんすりや其跡で留守はなほさら女気の独くよくよ物あんじ」かわる人情に成りやせぬか

●恋の諸わけも知らない二人「清元おはん「始てこわいはづかしい跡でうれしい枕して」(二百四)」斯うなるからには未始終

●曇るわたしの恋路もしらず「たゞ信「いたづらに送る月日はおほけれど花見て浮立つ春の艶」晴て邪魔するにくい月

●ナンボあかるい開化の世でも「清元北しう「千里が一里通ひ来る」恋のやみぢにや瓦斯はない

●篠を束ねてつく様な雨に「清もと「垣をとられて丸木橋やオツトあぶない既のこと」ぬれてかよふも恋の路」(二百五)

●咲た花ゆへ又散る苦勞「清元玉川「ア、恋せまい迷ふまい」イツソやもめの氣楽ずみ

●ついした事からコレ見やしやんせ「富元お千代「目元に絞る縮緬の二重廻りの抱へ帯」最早袖にも隠されぬ

●逢たさ見たさは飛立ばかり「一中節「ふけて青田にこがるゝほたるれん子まで来て蚊帳のそとア、何とせふ」兎角うき世はまゝならぬ

●帰る羽織のたもとに縫り」(二百六)「清もと「短い夏の一夜さに忠義のかける間もあるまい」しくじりや妾しが立す」

●年が違をが女房があるが「常盤津「泡ときへゆく信濃屋のおはんは」そんな事をば構やせぬ

詩入の部

●芸妓する身はそらとぶ鳥よ「姉客南海兄洛師。四人骨肉半天涯」どこのいづくで果るやら

●こしの鑑札府庁へをさめ」(二百七)「与君相尚転相親。与君双棲共一身」はやく往たいぬしのそば

●ほれた三字に気をうばわれて「呼狂呼賊任入評」一時わすれた義理の二字

●見おくり見かへり涙となみだ「不知双涙辞親日。正是丹心報国年」あらぬ別れの明がらす

●意気地の張のと云やいふものゝ」(二百八)「娼家美女鬱金香。飛去飛来公子傍」矢はり目につく金どけい

●思ひしづんで火鉢にもたれ「旅館寥々将暮天。」落て氣のつく柘のくし

●風がもて来る二階の葉うた「燭暗数行虞氏涙。夜深四面楚歌声」おもひある身のむねに釘」(二百九)

明治廿四年四月十日印刷

全年全月十三日出版

編輯兼発行者 東京々橋区中橋和泉町四番地

西村寅二郎

印刷者 日本橋区新右衛門町十番地

町田宗七

発売所 東京々橋区中橋和泉町四番地

東雲堂

同 名古屋市本町通六丁目

東雲堂本舗」(奥付)

四 『きげんよし』

『きげんよし』(国会図書館所蔵・菊池所蔵)

都々逸」(百)

○ほかの草木がしほれてのちに松の操がよく知れる

○回る地球にさて住ながら回り兼たる知恵と貨幣

○色目と思つた其の目は藪でお門違の間の悪さ

- 引くにひかれぬ洋服仕立袖ない別れをするわいな
- 人の出世は知れないものよ檻褌も末にはかみとなる
- 月にてらされあたりを兼てはなればなれの二人連
- 隔つ座敷で弾く三味線も君を俟つ夜は忍び駒
- 雪を被つて寝て居る笹を来ては雀がゆり起す
- 鹿と咄しも聞かない内に又もお前は気お紅葉
- 尽す辛苦のまことが見えてやつと泥からさく菖蒲
- 露にや夜毎にシツポリ濡て風にや邪見な女郎花」(百一)
- 好で求めた妾の苦労働る貴郎がおいとしい
- 日ぐれ待合蝙蝠傘が通ふ三筋の糸柳
- 花は上野か眺は隅田月にふぜいはまつち山
- 笑てかなしい座敷にかへて泣て嬉しい情夫の首尾
- つらや義理から笑顔をつくり隠す涙のうきつとめ
- 義理にきらいへ笑顔を残し好へいそいそ泣に行
- 啼鹿の声もかれがれ主まつ虫の最ど憐れを添る鐘
- 水性育ちもよく噛しめて今じやちんちん鴨の味
- 底の見へ透あの薄こほりとけた様でもあるへだて
- 雷の光りで逃込む蚊帳の中で取れた臍の下
- そめた浅黄がこい茶となつて末は手織の子持じま」(百二)
- はなの色香に浮れて空然と妾しや胡蝶の夢ごころ
- 論より証拠だかゞみをごらん主と此子の鼻のなり
- いつも暗夜か恋てふ路はふんで迷はぬひとはない
- じれつたい程気をもみの切赤い心を目で知らす
- 一座の手前で後は向けどならば背中に目がほしい
- 末で添ふのを私や松と竹こころひとつをしめ飾り
- 粋なおまへによく仕込れて野暮をさつぱり洗ひ髪
- どうせ浮名の立うへからは封じぬ端書の文づかひ
- 思ふまいぞへ最思わぬと思へば思はずおもひ出す
- そつと裏から返したけれど履が気になるゆきの朝
- 例のこれさと母指を出され天窓かきかき解たなぞ」(百三)

- 女房もちとは知ての事よ惚るに加減がなるものか
- 羅生門より三十日はこわひ鬼が金札取に来る
- 三井の鐘より三井のお金くれりやわたしも権と鳴
- 晦日に月見る時節だけれど娼妓の誠にやまだ遇ぬ
- 水をさゝれし氷でさえも今じや思を口移し
- 二人コツソリ咄しの中を闇にして行く火取り虫
- 髻とむすんだ情約といて間夫と自由が致して見たい
- 一夜の添寝のなさけの露でまたも色ます今朝の露
- 此処かと手をやれや笑顔で除る癩にこそばい押処
- 色気はなれば墨絵でさへも濃とうすいが有はいな
- 雪の肌をばちらりと見せて解やすいぞへ繻子の帯」(百四)
- 人も誉るし妾しもよいと思つて見とれるぬしの顔
- 思つたばかりで届かぬこひの届く器械が求めたい
- 涙でまことの化粧がはげりや咄た嘘まで禿て来る
- 長い着物を短く着ても心で錦の綾を取る
- 雪を見るには便利だけれど人目にや否だよ硝子窓
- 憎やこぼれてはらはらはらと色気内証のはじけ豆
- 二度の務もお前の為に不実するとは情けない
- 世帯はじめに二人りの笑顔うつして嬉しい塗箆筒
- 遠ざかるのが互ひの為めと言れ言たも宵の内
- 日曜土曜が毎日つゞきほかの五曜がなけりや宜い
- 莞爾わらふて見せたい処を憚る人目に澄ましがほ」(百五)
- 初めの浅瀬もいつしか深く沈む浮寝の都鳥
- 花の千草に色もつ野辺は月さへ見とれて夜を深す
- ぬしが浮気に浮気をすれば妾や苦勞に苦勞する
- 留守に抱く子の寝顔を見れば主に宜う似た瓜ふたつ
- 造り上手でさかせたよりもいつそ野末のみだれ咲
- 積る怨を心に止てお楽しみだと云つたざり
- 時事の報知を日々聞て毎日朝野のものおもひ
- 白い黒いのぎろんに黄ばり赤いかほして青いゝき

- 市史に牡丹ははなれぬ者の中に芍薬つらにくき
- 辛さ忍んで涙の顔を主にかへして笑ひなき
- 四本ばしらの火燧のしたでこひの地取のゆび相撲」(百六)
- 思ひきり戸のかきがねかけて互に人目をしのび泣き
- 梅と桜を両手に持て外にます花あるものか
- 胸が曇ればこずえを払ふ風もあめかとおもふ夜半
- 人目の関所が無いかと思や隔の襖が邪魔になる
- 愚痴と知りつゝ曇りし胸の目には涙の袖しぐれ
- 篠を束ねて突ヨナ雨に余所へ漏さぬ最合傘
- いやな鯰に苦勞をするは蛭子の笑がほに惚たゆへ
- 寝ても起ても立ても居ても歩行時にもぬしのこと
- どうで近遠と知てはいれど八景おいたか気が揉る
- 目で見て惚たは見ざめもするが心で見抜た主だもの
- 通ふ千鳥の辻占便り主に今宵は淡路しま」(百七)
- 夕日に照され時雨に降られすゑは錦をきるもみじ
- 自由自まゝの太平楽もうらむまいぞへ貨幣のわざ
- 雪の夜寒に待草臥て主と思ふて抱こたつ
- 三すぢ弾よりお髯を曳てはやく乗りたい玉のこし
- ひとの噂にせけんもせまく今の思ひがかくしづま
- 実つと誠の種さへ蒔けばはなれまいとの花がさく
- しのぶ間もなくはや東雲をつぐる鳥のなきわかれ
- すゞり取出し写真をながめ落るなみだで墨とする
- 名残を吝んで返した後の閨房の伽する初蛙
- 酒に吞まれて茶に浮かされて辛ひ煙草で目を覚す
- 隠すこゝろは無やうなれど隔があるぞへがらす窓」(百八)
- 只た二ツの笑窪にはまり今ぢや諸方に穴だらけ
- たゝむ夜具から枕が二個飛だ始末をつい見られ
- 互ひに独身なにはゝかろう晴て夫婦になるがよい
- よせと云はれりやまた猶更に折て見たいよ花の枝
- 逢へばいつでも堂だの紅茶お前は真赤ナ嘘ばかり

- 浮は氣は薄くも布団は厚く主と一ツに汲む寝酒
- 心直して吞なほしやんせ私しや味淋で氣が残る
- 招く柳の姿にまよひ笑ひそめたる梅の花
- 人の意見もしかねぬ人が人にいはるゝこのしまつ
- 言の葉巻に吸付られた煙も迷ひの雲のはし
- 胸の雲井に空うそ吹て煙にまぎらす溜涙」(百九)
- にらめる目にさへ愛嬌もつて怖さわするゝ主の顔
- 紅葉ふみわけ妻こふ鹿のこゑも淋しい秋のくれ
- 持た其時や嬉しいけれど持りや持るほど身が持ぬ
- 思ひ過せば猶過すほど主のお酒が氣にかゝる
- 巨燧で酒呑みや磯辺の遊び足で貝掘る事もある
- 梅にや鶯竹にはすゞめわたしやあなたの首尾を松
- 声をきゝつけ出れや郭公アレといふ間も泣わかれ
- ゆうて見やうかゆはずにおこか娘思案の束髪
- 芸者止ても又権妻で苦勞するのの主の為め
- 一寸見つめりや恥かしさうに顔に紅葉の色娘
- ぬしは今頃起てか寝てか思ひ出してかわすれてか」(百十)
- 脱だ羽織を行燈にかけて人目つゝんだしのびあし
- 思ひ染たる未通女の娘恋にみだれし野崎村
- 鴛鴦の衾をかさねて居れば明のからすが引わくる
- 憂い目つらい目悲しい目をも凌いで漸々表向
- 鷺を鳥と云はれた義理か雪の腕の入れぼくら
- 花の姿が目先に移り思ひ出さずに山ざくら
- 嫌ナ奴だと横目に睨みや惚れた何ンぞと思ヤがる
- お金減したやすりの罪か何ンの因果に目が潰れ
- おツにからんで輪に吹く煙草又も邪推の人いちぢめ
- 酔ひば浮かれて外八文字色香で迷はすおいらん酒
- 主は禁酒の衛生主義で私しや経済貯蓄法」(百十一)
- 物に明るいひとほど兎角恋路の闇にはまよい込む
- 晴てのみやろとは蝶花形よむすぶゑにしは妹背山

- 寧そ自体もてがみにふうじ人目の関所を通したい
- 儘よ儘よで線香たてりや家のくらしがたてかねる
- 松といふ字は中よい筈よ公と木とのさし向ひ
- 酒が言はせる私しの愚痴も胸の伊丹の鬱サ晴し
- 燈火の暗く成のは出雲の神か但しや苦勞の仕初か
- 解てニツコリ笑へば帯も縹子と博多のはら合せ
- 莞爾わらふて指たる猪口を澄して返盃は水臭い
- 浮つ沈みつ気もあい鴨の互の苦勞も水の泡
- 楽なよふでも私とお主つとめと言字がまだ消ぬ」(百十二)
- 悋嫉らしいが言ずに居れば末が実に案じられる
- 廊下ばたばた障子をがらりヲヤと莞爾笑ひ顔
- せかずにお待よ時節がくれば咲てみせませす床の梅
- 妾しや主ある一重の桜人に折せる花はない
- 主に惚るの権理もあれば誠実つくすの義務もある
- 一寸と眺めは奇麗だけれど末の頼みにならぬ雪
- 逆もと思ふたお前に来られ夢では無かど気が迷ふ
- 目出度座敷で桜の色を顔に散らして蝶の酌
- みづも漏さぬ中とは見へぬ紙幣が結んだ薄いゑん
- 外へ出るなら傘お持濡りや私の又手かづ
- 骨になる迄さす気で居るに糸の切目の破れ傘」(百十三)
- 主は甲斐絹の蝙蝠傘よ私しや毛縹子で切れやせぬ
- 不意に途中で相々傘濡れて嬉しい村時雨
- 色にほだされ取ては見たがいやになつたよ渋い柿
- 望むお前に振棄られて外に望みのないわたし
- のろい女と笑ば笑へ人は妾しをねたむのだ
- おまへを身受の条約中止するは人目と親の前
- 思ふお方が今行く汽車で目先ながらも儘ならぬ
- 言ぬ花からものいふ花へむけるくるまの長づゝみ
- 解てうれしい此したひもを結ぶ思案にわしや瘦る
- 境ひ論なるそのさかづきを藤八ア県にて裁ばんし

- 座敷仕舞て気儘な酒は脱だ着替の皺伸し」(百十四)
- 逢て嬉しき笑ひもいつか朝はなみだのたねとなる
- 行燈引よせ煙管を伸しアレサお止よ火が消る
- 縁のこよりを出雲のたなで万一や鼠がひいたのか
- わたしの誠の一筋縄でぬしのうはきをしばりたい
- 誰でも苦説は絶へない者か羽袖濡してくらす鴛鴦
- 便りや電信通ふは蒸氣遊歩は合乗じん力しや
- 左りつまとり穿たる下駄はころぶころぶと音がする
- ほとけ顔して三度は居たが重なる無心にもう閻魔
- 月はやさしく寢床へさすに遅いおまへの面にくさ
- 憎いと云たを兎や角云へどまさか可愛と云りやせぬ
- 嫉妬するのも惚てるからさ否なら彼是言ひはせぬ」(百十五)
- 秋の木葉のみなちる中で松のみさをよくしれる
- 欲で馴染だ身が恥しい斯して意気地を立て見りや
- 寄る屋根船もやひの綱も結び止たる縁のはし
- さけものみ鯛あそびもし鯛金もためたいじれつたい
- 貧の病氣は医者さんよりも紙の恵比須がよく癒す
- 儘よ儘よが家庫倒し儘にならなくなる身体
- 間夫への盃さとられまいと指て赤らむ氣のとがめ
- 内に居る時雷り聞て外で陽気な線香焚
- 返事し兼て火鉢の灰へ火箸で分らぬ文字を書く
- 未練ものだとお前は云へど切るつもりで惚はせぬ
- 横に出て来る那の蟹でさへ葎とあしとを分て来る」(百十六)
- べらの蛭子がそろばんおいて外債利足のあんじ顔
- 別れのつらさに謎打かけて解にや返さぬ今朝の雪
- わたしの心と洋燈のホヤは点されるので熱くなる
- 別れに着せたる羽織の紋も影と日向とあるこひ路
- 麦の青葉も背丈がのびて色氣づいたが穂にみゆる
- 結ぶ出雲の此のかみ写し妾しや一生のまもり神
- 二人手をととり人目をしのび萩の声にも気をくばり

- 意見の意の字をぶんせきすれば義理を立よと曰心
- 恋のころものほころび口を母の異見の仕つけばり
- 縁は異なるもの網代の塀にからむ小蔦のつまきどり
- 易を見たらばお前は浮気妾や出雲へ暴れ込む」(百十七)
- 儘にならぬと写真を詠め思はず食切るつま楊枝
- 間夫の手紙の書損なひをきやくへ其儘間にあはせ
- やみとお前に斯う入上て末は如何せう格子さき
- あいと返辞をする緋鹿子のえりへ摺込むあかい顔
- 手枕さしかへ顔見あはせてあとは行司のなる角力
- 客を送つてれんじを持たれ見やる名残りの空泪
- きみは吉野の千本ざくら色香はよけれどきが多い
- 三世因果の道理でくどき二世のちぎりを為る和尚
- 三度の食事は二度でも宜いよ主と一所に暮すなら
- 逢たさ六寸見たさが四寸それがつもりて癩となる
- あへば互にたぐぼうぜんとはなし残してあとくやみ」(百十八)
- ふられた証拠にや朝ぼんやりと廓帰りの白痴づら
- 文もこゝろもとゞいて解て今宵結ぶは二世のゑん
- おもひ初めたも濃紫ようすい浅黄ぢや覚やせぬ
- お互に扣めにすりや端しが付ぬト云て云出す折がない
- 苦勞黒縹子とけたる帯をむすびなをして権の妻
- 国のためだと夜なべを過しや牛の乳屋の為になる
- 浅イふかいの中汲わけて呑んだお酒が顔へ出る
- 酒も器械かりう頭の時計狂ひ出しては愚頭を巻く
- 主の寝酒も灘越す迄は千々に心を伊丹樽
- 君よ近ごろ失敬ながらうは気はわるいとす説諭
- おでんかん酒按摩の声も更てくるわの廻し床」(百十九)
- 正気で責ずと一ト口お呑酒は心の鬼殺し
- 深く思ひに沈みし鴨も誘ふ浮寝の浪枕
- 替る淵瀬に気も村かもめ立つや浮名の浮苦勞
- 誘ふ川風身にしみじみと更て待身になく千鳥

- 濡て嬉しい相々傘にヤツト思ひの通り雨
- 傘のヒントはじきもためした心胸のろくろの繰廻し
- 呑めぬ烟草に思ひをつけて出した烟管の恥かしさ
- 蓑盆には科ないものを思ひ詰つて敲くのか
- 鷺か鳥か明らぬうちに春の小鳥がやかましい
- 三弦の駒にひかれてつひ浮々と泥にすみ込む大鯰
- 湿りがちなる嘶しの種を思ひ出しては巻烟草」(百二十)
- 酒に待ちわびツイ転寝の肱を枕に主の夢
- 蝶は番で何時でもまふが来るも帰るも私しや独り
- 親の手前は芝居に出来てそしてお茶屋で濡る幕
- 茶釜の素湯ほど逆上た二人り悪や他人が水指して
- 私が濃茶の心も知らず主しは薄茶の人ぢらし
- 嬉しい涙のかわかぬ中にお酒で別れの泣き上戸
- 酒に招かれお茶にも呼ばれ寝にもお伽のたばこ盆
- 別れのつらさにモウ一ぷくクツト引き寄す煙草盆
- 縁の綱手をあひのり車楫は権妻口でとる
- 色にせん茶の手活の花は傍で見るとも奇麗事
- 浮世茶にして楽しいものは友にしぐれの霰釜」(百二十一)
- 身には荒菰着やうとまゝよ胸にけんびし男山
- 辛口にも甘味をつけて破て利かせる卵酒
- 尽す誠は正宗なれど酒は心の乱れやき
- 一寸話が残りの酒に未練できたなく跡を引く
- 布子典して一盃酒に腹を切るとはヨイ覚悟
- 屹度ざますよと時計を質に取られて茫然あさ帰り
- 金銀なくなり飛車たが無と香車も頭まを角ばかり
- 痴話がこうじて帰るとすれば隠して出さない蓑入
- 老少不定の身でありながら時節まてとは切れ詞
- おもふ心の半ぶん言つて酒にかぶせてあかいかほ
- 思ふお方と添たいまゝに八百屋お七は身を焦す」(百二十二)
- すゑが何時かと苦勞になるは主のうは気と諸式高

- 神代このかた変らぬものは水のながれと恋のみち
- 鏡に向ひて顎撫でまはし我身ひとりでいゝをとこ
- 忌みはなれた小意気な年増一寸ごらんよ此写しん
- 意見聞きたび身もち直し花も浮気な枝を折る
- 解ぬ口説の朝別れよりすねたゆふべの間がおしい
- 暫し別れに鳴海の浴衣未練なみだの玉しぼり
- 顔に桜をオンノリ出てソナラ貴郎と云つたざり
- 胸に烟りの絶間は無イが少しは苦勞の忘れ草
- 酸も甘いもよくしるひとは浮世の辛みも嘗てゐる
- 墨とすゞりは仲よいけれど水をさゝれりや薄くなる」(百二十三)
- 渋い二人りの濃茶の中に水を指れてなるものか
- 別れのつらさに鳴帯よりも忘れシヤンすな煙草入
- あまりの嬉さたゞ口籠り涙が話のさきにたつ
- 頬杖つくづく癩癩面ナしがみ火鉢で吞む煙草
- 別れに汚したなみだの顔を一寸直して出る座しき
- 少しの事にも目に角たてゝ胸の火打の当こすり
- 酒は悪イと云はれる筈よ樽にも裸と菰冠り
- 思ひ過せばなほ杉酒や飲なジヤなけれどみわ大事
- うれしい鳥影障子を明りや恨んだ鳥できはづかし
- 団扇づかいもお客によりて煽ぎ出すのと招くのと
- どうやら隣はしん猫らしい折にや鼠の音がする」(百二十四)
- いろは紅葉もこくなるからにハツト浮名が龍田川
- はなしは絶ても今夜は雪が積り積つてかへされぬ
- 羽織着たまゝツイ転び寝の皺が愠氣の種となる
- 酒の機嫌で浮雲曲馬口のチャリネに乗る私し
- 星の数ほど男はあれどつきと見るのはぬしひとり
- 逢たい見度を停止にさせて苦勞が禁獄すればよい
- 哥留多とるにも隣の主にうかと惚てる手がさわる
- れいの時刻と庭口開りや洋犬が尾をふり駆て来る
- 化粧する気かまだ水臭い上べばかりで惚はせぬ

- 吹けよ川風うかれて居れど下は地獄のふなあそび
- 文じやわからぬ心の丈を寝物がたりにして見たい」(百二十五)
- 背中そむけて云度事も我慢して寝る其のつらさ
- せたいかためて苦ぜつの夢が醒て眉毛を撫て見る
- 賽の河原とぬし待つ夜半はこひしこひしが山をなす
- フツト写し鏡みの内へ止ておきたい主の顔
- 高い山から谷底までもずつと見とほす検査医しや
- まゝになるなりや野に住小蝶草にねるより女夫連
- 力づくにて切ない者は固く結んだ縁の糸
- 背から羽織を着せるに付て叩いた昔しを思ひ出す
- 寝てなど苦勞を忘よとなれば主が浮気な夢ばかり
- 泣てだますが稼業のやうに云はんすお方は先が無理
- 内所の異見を横そつ方に聞て意気地を私やたてる」(百二十六)
- 主は松の木曲つて出も私や葛ゆへからみつく
- 水に被れが火に燻らりよが儘よ飽迄色擬
- 論より証拠だ是マア御覽羽織の袖がしはだらけ
- 読た手紙が一々胸にきくはづ其の字は釘の折
- 今の音メははつ音の鼓み音を慕ふて来る狐
- 若い同士の根もない喧嘩背中合せや腹合せ
- 目付で知らせて悟れと云へば悟つて居ながら知らぬ顔
- めぐる地球にいかりを下し暫時とめたき今朝の雪
- 夜半の口説になく雁よりも悪くや鳥に明けの鐘
- 主は鶉の目で抜目はないが私しや鳩目で気が付ぬ
- 主に淡路じや心が須磨ぬ啼て明石の浜千鳥」(百二十七)
- をしの衾の重なる不幸つらい浮寝をさつしやんせ
- はやく寝よとの嬉しい声を明にさしひくときの鐘
- 胸に手を当て思案をすれば仇な人ほど実がない
- 芸妓する身と画工の皿はひとの知らない色がある
- 化粧したのでフト見違へる雪のあしたの桃さくら
- お酒眼につけ泣ふりすれば私や眉毛に唾をぬる

○人目忍べば隠せる者と思ふ愚やいわた帯
 ○留守を使つて朋友返し後で舌出す若夫婦
 文句入都々逸
 ○すがたばかりの写真はいやよ「せんりやうのぼり」「むかう鏡のふたとつて写せばうつる顔とかほ」(百二十八)「こゝろのそこまで写したい」
 ○かくしだてすりや猶ます思ひ「おうめ」「あれまたあんな無理いふてそんなそのよふないゝ訳を」《ママ》
 ○恋の欲目かおまへのなりが「賢女」「三千世界をたづねても又とあるまい殿ごぶり」業平さんでもかなやせぬ
 ○またもお株の十八番か「清もと」「あじにすねたる松の癖」すなほに此方を向しやんせ
 ○百夜通ふてサテ情なや「(百二十九)」「しんないあけがらす」「たとへ此の身はあわ雪と共に消るも厭ねど此の世の名ごりに今一度」逢て恨が聞せたい
 ○未練らしいが寒くて成ぬ「はうたいつちうくずし」「よつでの垂をおろしても又もなきゆく明がらす襟にかぜしむ衣紋坂」見かへる柳も小手まねき
 ○すねて背中を向ては居たが「とみもとまつかぜ」「鳥が唄へば別れがいやで」とほしかねたよ此がまん
 ○十時の約そくアレ今じぶん「(百三十)」「声色」「遅くなつたを云立にエ」懐中時計はなんのため
 ○嫉妬やくなどいはんすけれど「ぎたいふおびや」「妾しも女子のはしじやもの」いはいで事がすむものか
 ○綾や錦にくるまる主が「ぎだいふあこや」「昔しの衣々引替へて木綿木綿とおちぶれて」愛想のつきぬが惚た情
 ○最はやおまへの来る刻限と「歌沢」「言つゝ立てれんじ窓障子ほそ目に引明て」のろけながらに待て居た「(百三十一)」
 ○主は海外旅行の身ぶん「野崎村」「あまり逢たき《ななかよし》では「逢たき」なつかしき」どふぞ御無事で帰るやう

○やばにするなよいせんは花で「それもなく音のうぐひすの」一度はなかつたこともある
 ○寝るに寝られぬ苦勞をしとげ「いつちうぶし」「まことは辛抱ひとつぞや」今じやひる寝の話だね
 ○わたしの実意についていきくらべ「紀伊の国はおとなし川の水上にたゝせたもふは船」(百三十二)「玉さんふなだま十二社大明神さて東国にいたりては玉姫いなりかみめぐりか狐の嫁入おにもつをかつぐはごうりきいなりさん」主のうはきにつまゝれた
 ○十に一ツも真事はないと「清もと」「常から主の仇な氣をしつて居ながら女房になつて」百も承知でまたまよふ
 ○真の話しに心も解て「ながうたかんじんてう」「実に実にはも心得たり人のなさけの盃を」請て飲込む爛さまし
 ○親とおやとのゆるしを受て「(百三十三)」「さんば」「扱婚礼の吉日は縁を定めの日を撰み」夫じや妻じやといわれたい
 ○夕辺の夢見が迷ひの種よ「きよもともんど」「しかも桜の初日の夜はでな一座の其中でツイ岡惚の浮気から」今ぢや二人が身の迫り
 ○痴話が募りてくぜつの果は「いつちうぶしよしはらはつけい」「あらしは晴てひと時雨ぬれて逢夜はねてからさきの」まつた甲斐なきあけがらす
 ○思ひきつたとおまへの言葉「(百三十四)」「阿古や」「問れしときの其苦しき水責火ぜめは答ふが」返辞するさへなみだごゑ
 ○根もない花たと籠略にするな「きよもととおちうど」「散りても跡の花の中何時か故郷にかへる雁」根がありや再び花が咲く
 ○雨の夜道も他目をしのび「ながうたはなぐるま」「つまどたゝかば誰ぞともいはであけて霜夜のむつごに」七ツにやうたふ家の鳥
 ○主の門まで来は来たものゝ「アダチ」「この垣一重が鉄の戸をたゝくにもたゝかれぬ」(百三十五)「忍ぶ恋路のじれつたさ」
 ○真の夜中に不図目を覚し「言葉」「何か夢でも見たのかへ今時分泣て居る奴があるものか……ダツテ妾は悲しいものを」お前に別れた夢を見た

○文明開化の自由だなど、「清もと」「男ははだか百貫の掛ねんぶつも向ふ見ず」ふへる浮世にする苦勞

○別れちや見たれどコレ此写真「文字「見れば見る程クツキリト水ぎはの立好男」おもい出すさへ癩のたね」(百三十六)

○思案なかばに空とぶ鳥は「ときはづげんた」アレ雁がねの女夫づれ」連て逃ろの辻うらか

○ぬしと別れのきぬぎぬは「清もと」「すがる袂もほころびて色香にほるゝ梅のはなさすがこなたもにくからで」かいるかいるも五六度

○妾が悪けりやあやまりませう「はうたくぜつして」「口舌して思はせぶりな空寝入」すねずと此方を向しやんせ

○おつにからんで持こむ言葉「(百三十七)」「十段目「夕顔だなのこなたより」ぬつくと出たる情夫の兄

○写真手にもちつくづくながめ「十種香」「葱こうせうとてお姿を」是が紀念とひとしづく

○惚た惚たと口さきばかり「清もと」「世辞でまるめて浮気でこねて小町桜の詠めにあかぬ彼奴にうっかり眉毛をよまれ」またも其手でだますのか

○人目多けりや顔見るばかり「ぎだいふいもせやま」「かんじんの寝るときは離れ離れの床の中」(百三十八) 手も握らず色目もつかはず何する事なほ出来ぬ

○ぬしは民情視察のおやく「千両幟」「江戸長崎や国々へゆかしやんすりや其跡で留守はなほさら女氣の独くよくよ物あんじ」かわる人情に成りやせぬか

○恋の諸わけも知らない二人「きよもととおはん」「始めてこわいはづかしい跡でうれしい枕して」斯うなるからには未始終

○曇るわたしの恋路も知らず「たゞ信」「いたづらに送る月日はおほけれど花見て浮立つ春」(百三十九)の艶」晴て邪魔するににくい月

○ナンボあかるい開化の世でも「きよもととほくしう」「千里が一里通ひ来る」恋のやみぢにや瓦斯はない

○篠を束ねてつく様な雨に「清もと」「垣をとられて丸木橋おオツトあ

ぶない既のこと」ぬれてかよふも恋の路

○咲た花ゆへ又散る苦勞「きよもとたまがは」「ア、恋せまい迷ふまい」イツソやもめの氣楽ずみ」(百四十)

○ついた事からコレ見やしやんせ「とみもとおちよ」「目元に絞る縮緬の二重廻りの抱へ帯」最早袖にも隠されぬ

○逢たさ見たさは飛立ばかり「一中節」「ふけて青田にこがるゝほたるれん子まで来て蚊帳のそとア、何とせふ」兎角うき世はまゝならぬ

○帰る羽織のたもとに縫り「清もと」「短い夏の一夜さに忠義のかける間もあるまい」しくじりや妾しが立すこす

○年が違をが女房があるが「(百四十一)」「常磐津」「泡ときへゆく信濃屋のおはんは」そんな事をば構やせぬ

詩入の部
○芸妓する身はそらとぶ鳥よ「姉客南海兄洛師。四人骨肉半天涯」どこのいづくで果るやら

○こしの鑑札府庁へをさめ「与君相尚転相親。与君双棲共一身」はやく往たいぬしのそば」(百四十二)

○ほれた三字に気をうばわれて「呼狂呼賊任人評」一時わすれた義理の二字

○見おくり見かへり涙となみだ「不知双淚辭親日。正是丹心報国年」あかぬ別れの明がらす

○意気地の張のと云やいふものゝ「娼家美女鬱金香。飛去飛来公子傍」矢はり目につく金どけい」(百四十三)

○思ひしづんで火鉢にもたれ「旅館寥々將暮天。」落て氣のつく柘のくし

○風がもて来る二階の葉うた「燭暗數行虞氏淚。夜深四面楚歌声」おもひある身のむねに釘

漢語百々逸ノ部
○よしや交誼は立すとまゝよぬしの偉烈を他よりとも

○それと事状はまだ聞ねども頭然お前の素振では

○すへのやくそく堅確とつてぬしの仁慮をまつばかり」(百四十四)

○わたしがいふこと主や尾撃していつか応戦やみはせぬ
 ○よしやおまへの国情にせよ無理な応酬できはせぬ
 ○いややおまへの労詞をやめて実な就約しやさんす
 ○愚論俗論モフやめにして真実応接きめてほし
 ○おなごの微力と主や気づよくもふりきりいなんす遺憾さは
 ○あれほど必然した其ことをまたも変革しやさんせ
 ○人眼潜行して逢なかをにくや失策さゝれては
 ○せめて一旦気をいれかへて常の隔心やめさんせ
 ○熟慮して見りやなほさら主のことに感銘するばかり」(百四十五)

明治二十四年七月廿九日印刷
 全年八月一日出版

編集兼発行者 東京々橋区中橋和泉町四番地

西村寅二郎

印刷者 東京々橋区西紺屋町老番地

丸重活版所内

中村四郎

発行所 東京々橋区中橋和泉町四番地

東雲堂

同 名古屋市本町通六丁目

東雲堂本舗」(奥付)

五 『なかよし』

『なかよし』(菊池所蔵)
 都々逸の部 『きはらし』 第二篇』とほとんど同じ)

- ふたりの智慧をばしぼりの浴衣末はどうにか鳴海湯
- たまさか逢のに短かい夜半は鶏にうらみをつげの櫛
- どうか河骨どうりを付てういたころでおちつかぬ

- もれしうき名に気を奥二階人目へだてのあをすだれ
- 人目といへば気兼ねこひじかやのひとへも夜半の閑」(百四十八)
- ぬるゝ間もなく早や明けしらみはかない契の夏の露
- 蓮のはなさへ夜明ニヤ開くナゼかひらかぬぬしのむね
- 独りねる夜のわたしの蚊帳へそつと覗いた月のかほ
- 追ふたほたるニヤ罪とはしれど追ねば斯した首尾が無
- 宿と云ふのも極りがわるく人の前ではくちのうち
- 世帯じみれば糸づめさへも自然なくなり掃きだこ
- つめたいお前の心と知らず惚て今さらこほりこほり
- 思案むすぼれ例もの癩をひらきましたよ人來どり
- 他人ぎよう儀は人前ばかり部屋へは入ばこちの人
- 思ひ立つ恋もしあるならば蛇籠と化すらん竹婦人
- 月も朧氣しのぶにやたより晴て逢れる中じやない」(百四十九)
- のめや唄への人目をぬけてちよつと忍のしたざしき
- 寝るもおきるも自儘ニヤならぬ風に任せたおみなへし
- 世帯じみたか夏やせしたか掛けしたすきに結びたま
- 君がなさけのこもりしかやのうちは他人の風入らず
- 恋に朝夕見る度毎に顔にやつれのますかゞみ
- 風のまにまになびいちや居れど心乱さぬ糸柳
- うそを誠と聞せたむくひ誠も誠と聞かぬゝし
- 知らざ話すがお前に私や命もいらぬと惚て居
- 深い私しの心も汲まずいつも体よくはね釣瓶
- 人に咄ば噂が怖し二人じや文珠の智慧も出ず
- 思ふころを三筋によせて先の心をひいて見」(百五十)
- 花の笑顔もうつれば替る露をだき寝の桐一葉
- 縁を組糸細くも末をかけてむすんだ時計ひも
- 帰りの晚いを気に掛時計若やと吝気が廻る針
- うはき磨墨馬々だますかき手は誰だ白的表装
- 啼たからすもアレ見やしやんせ恋の報ひの羽ぬけ鳥
- とけたと見せても冷たいころ少しも情けは夏水

- 神にほとけにねんじて待た甲斐はうれしや夏の雨
- 寝るもてを離しはしない好た似貌のこの団扇
- 主の来る日を籬でまつ身今はかへりをかどでまつ
- がらす障子ははかない物よお貌見ながら儘ならぬ
- 華美を結城はみじんもないよじみに成たる子持縞」(百五十一)
- 鳥渡でるにも延喜を取つて火うち打せるうしろ影
- 猫を相手にぬしまつ宵はとけいがはりに眼を眺め
- 重ね扇のすへひろがりて菊のかほりのどこまでも
- き儘そだちは一しほかあい初ね聞せる今日の雑誌
- 二人そろいのアノみであさぎふねにゆられに夕すゞみ
- からだの暑い陽氣の加減むねのこげるは主のわざ
- 恋の暗ぢにそらさへくもりこがるゝ螢のみちしるべ
- 首尾をまつ間のつなぎし船にとけて嘶しも下すゞみ
- 扇のかなめでたのみしおまへ骨と成まで離りやせぬ
- 邪魔して憎いとくべたる蚤があだを恩なる雨の首尾
- 思ひゆふ月むねさへはれてこゝろ隅田のゆふすゞみ」(百五十二)
- 蚊やりくゆらし主まつ宵はとかく眼元がうるみがち
- ぬしの病もなをつたからは御礼まいりにはつあわせ
- 鴛鴦といわれるすゞみのうわさ聞てうれしき新世帯
- 浮きなお前にかぶせて見たい嘘を筑摩のまつりなべ
- 一夜あくるを妾しや松の内早くきゝたい初便
- 逢てわかれて別れて逢て妾しや嬉しい去年今年
- 嬉し初日に氷はとけてマタモ音づる山のたき
- 言葉に輪飾嘘つきはじめキツト裏じる待わいな
- 女夫そろふて立たる門は主をまつとの心いき
- 猫をじやらして狐を馬鹿しぬしはたぬきのそらねいり
- 泣てうれしく笑ふてつらきなくてたがひにととうみ」(百五十三)
- 待ずゐたなら儘まにも駿るが阿はず甲斐飛驒美濃おも
- さわぐ座しきで袴をつけてすましたかほなるかん徳利
- 珠のやうなる十六ばんむすめ割らうと目がける人ばかり

- 斯ては果てじとゞきる障子未れんであとから又のぞく
- 大和川とはへだてゝ居れどふたりがその中吉の川
- 否な猪口でもさゝれた義理で受りや嫌だと彼目付
- 色目と思つた其の目は藪でお門違の間の悪さ
- 言ぬ花からものいふ花へむけるくるまの長つゝみ
- 入てお呉よ痒くてならぬ妾一人が蚊帳のそと
- 色気はなれば墨絵でさへも濃とうすが有はいな
- 離れ離れに別れちや居れど水に浮草根は一つ」(百五十四)
- 晴てのみやろとは蝶花形よむすぶるにしは妹背山
- 花火褒つゝ簾をあげてソツと流で手を洗ふ
- はなしは絶ても今夜は雪が積り積つてかへされぬ
- 羽織着たまゝツイ転び寝の皺が愒氣の種となる
- はでな桜のくれないよりもじみなみどりの松が可
- 莞爾わらふて見せたい処を憚る人目に澄ましがほ
- 憎らしいよと横目で睨み可愛といふよな爪りやう
- 二世を契ひし大切なお前別れりや此世に用は無
- 西も東も知らない者を連て浮気なたびかせぎ
- 二世を堅めたおまへの前できれて氣になる三の糸
- ほんども洋服小意気な客にわちきや洋袴と初会「ぼれ」欠落」(百五十五)
- 惚たほの字を火の字に書ば熱くなるのも無理はない
- ほれて裸で寝のじや無いよ汚してならない借た衣
- ほそい元手の三筋の糸は長い浮世のつなぎさほ
- 二銭おつ張り郵便きつてこひ路のつかひも大政府
- 握る手さきを払つてひと目憚かる笑顔に当るそで
- 惚て呉ずばなま中こんな氣がね苦勞はせまいもの
- ホンニ難面アノ稲妻は二の目見ぬうち消てゆく
- ほんに否だよ夜あけの鐘とかりたお金とこの氣兼
- 外のお客へ腕の文字を隠すおまへの腕まもり
- 惚たは妾しが重々わるい可愛といつたはぬしの罪

- 命あつてのふたりが中をすてゝ添りやう筈がない」(百五十六)
- いろは売ども心のまことどろの中にもはすのはな
- 寧いはふと口まで出ても下すまれうかと又だまる
- いふて仕舞が云はずに置か主の浮気のないしよ事
- 息を吹かけがらすへ何かゝいて二人がわらひ顔
- いつも暗夜か恋てふ路はふんで迷はぬひとはない
- 二度の務もお前の為に不実するとは情けない
- 庭の虫のねなきやむたびに若や来たかと立て見る
- 二階座敷の手摺にもたれまぶはこぬかとまねぎ猫
- 莞爾わらふて指たる猪口を澄して返盃は水臭い
- どうで近遠と知てはいれど八景おいたか気が揉る
- 泥水社会とたくさんさうに言へど鯰もおなじなか」(百五十七)
- 土手の八丁は車で来たど口の八丁で間を合はす
- どうせ読れて仕舞た鼻毛いま更抜のは無駄なこと
- どうせ及ばぬ願ひぢやなどゝ云ふ中や思ひが未浅い
- 解てうれしい此したひもを結ぶ思案にわしや瘦る
- どうかしたかと一筆書て遣す隙ありや昼寝する
- 憎い規則が世にないならば疾に身儘になるものを
- はたから見ばゝかげた嘶まよはにや其理がわかるまい
- 早くおまへを鯰にさしてふたりぬらぬら暮したい
- 腹を立ててまた笑わせて嬉しがらせて泣かすのか」(百五十八)
- 色にほだされ取ては見たがいやになつたよ渋い柿
- どうでもおしよと投出す身体其様斯かと引よせる
- 遠ざかるほど逢たい物を日々に疎しと誰が言ふた
- とめたい思が天まで届きぬしを帰さぬ今朝のあめ
- 遠く隔てど切さへせねば心便りの鳴子繩
- 時計廃して日をくもらせて然して朝寝が仕て見度
- 年は寄てもうは気はやまぬいろに期限の律はない
- どうか浮気はモー吉田やと意見夕ぎり主のため
- 遠ざかつても又アイウエヲ変らぬ誓をタチツテト

- どうせ二人が何様成るからは真あかして人だのみ
- どうか為かと一ふで書て遣しや無心を云ふものを」(百五十九)
- いろはさめない一粒鹿の子ぬしとこゝろのあい鼠
- いろは紅葉もこくなるからにハツト浮名が龍田川
- 色を教えたアノ鶴鴿にかへて不粋なあげがらす
- いった一言あとへもひけず闇魔顔して聞くむしん
- 一夜あはぬをうらむも道理二度と一世にない月日
- ぬしの浮気を四方へくばる八ツ目鰻の目がほしい
- ぬしの口ぐせ不図いひかけて咳に紛らす人のまへ
- ぬしの浮気に浮気をすれば妾や苦勞に苦勞する
- 主は浮気が種まき散しや妾しやりん気の芽を出す
- ぬれぬ前こそ露をも厭へぬれて色ます女郎花
- 思ひ染たる未通女の娘恋にみだれし野崎村」(百六十)
- 鴛鴦の衾をかさねて居れば明のからすが引わくる
- 親の意見を聞きや聞たびにぬしの言葉を思ひ出す
- お前ぢや気を揉み女房にや気がね是ぢや命が続かない
- 思ふお人の手にふれよかと思やなりたや此ふみに
- 思つたばかりで届かぬこひの届く器械が求めたい
- 私しが忍んで往のを知らず悪や燃へ出す此蚊やり
- 別れに着せたる羽織の紋も影と日向とあるこひ路
- 妾を見棄て他国で花が咲くか見しやんせ咲やすまい
- 別れに汚したなみだの顔を一寸直して出る座しき
- 妾の病気はお医者ぢや不可ぬ主のお顔を見りや治る」(百六十一)
- 末で添ふのを私や松と竹こゝろひとつをしめ飾り
- 少しや自分で憂目をお三輪あんまり浮気が杉酒屋
- 粋なおまへによく仕込れて野暮をさつぱり洗ひ髪
- 姿見せずに啼く一声は恋の暗路の時鳥
- すゞり取出し写真をながめ落るなみだで墨をする
- 紅葉ふみわけ妻こう鹿のこゑも淋しい秋のくれ
- 持た其時や嬉しいけれど持りや持るほど身が持ぬ

- モジモジしやんすな此様なりや儘よ構ちや居れぬ人の口
- 若も容でこゝろが知りや孔子は陽虎に似はせまい
- 持たが病の女郎買遊び天窓はげても止はせぬ
- 炭をつぎつき火箸を筆にあつい男のかしら文字」(百六十二)
- すかぬお客と添寝の夜は蚊帳の一重も魚の網
- 酸も甘いもよくしるひとは浮世の辛みも嘗てゐる
- 墨とすゞりは仲よいけれど水をさゝれりや薄くなる
- すねて見せたり跳かへしたり知らぬ顔する雪の竹
- 筋を立れば断ねばならぬ悪ふもつれし風の糸
- 知らぬ振して外目で見れば矢張他目によく知れる
- 自主の春風そよそよふけば文明開化のはながさく
- 神武このかた千変万化しかるに依然といろのみち
- 四本ばしらの火燧のしたでこひの地取のゆび相撲
- 自由に成るのも束縛するもみんな蛭子のかみの業
- 自由世界に不自由の物は貨幣と命と私しの智慧」(百六十三)
- 水掛論でもしなけりや胸に燃る思ひを消しかねる
- 乱れ髪見りや辛苦が増よ心もつれが有ふかと
- 見捨しやんすな行末までもなごゝ写真へひとり言
- 外飾も行義も構はぬほどにぢれて猶さら深くなる
- 未練ものだとお前は云へど切るつもりで惚はせぬ
- 汽車で通へば苦なしに往が矢張をあしが先に立
- さらに議論のたゝないひとを議員に撰むは村会な
- 君は今頃駒下駄はいて声も高尾のそゝりぶし
- 来て居りや眠れず来なけりや狸どうで今夜は現責
- 義理も糸瓜も人目も儘よ川といふ字で寝て見度い
- 顔は見たいし見りや恥かしい扇一重がまゝならず
- 『きはらし 第二
- 篇』の下旬は「扇一重が立田川」(百六十四)
- 通ふなはての松風よりも身にしみ渡るはあけの鐘
- 風のまにまに靡いちや居れど主はうごかぬぬい柳
- 髪はきつても二世まで掛た深い縁しはきるものか

- かゝる事とは妾や白狐主は手管の釣上手
- 神代このかた変らぬものは水のながれと恋のみち
- 読だ手紙が一々胸にきくはづ其の字は釘の折
- 善悪いふなら言せておきな頓て奇麗にかへすあだ
- 横に出て来る那の蟹でさへ霞とあしとを分て来る
- 甲夜にや粘着乙夜にや凝集明りや分解するわいな
- 宵から苦勞しやうやう情夫を笑わしや鴨が鳴渡る
- 夜昼思ひを妾やかけ時計ドンと逢なきや気が済ぬ」(百六十五)
- 夜明まへまでさす手枕にしびり切らして言ふ無心
- 誑すきつねを誑してやろと誑しに罹つて誑された
- たてる屏風へ二人が帯を掛りやうれしや子持すぢ
- 抱たばかりで別れて仕舞ひた未練が手にのこる
- 達者な芸妓も及ばぬはづよをどり上手な座頭がね
- 算盤玉にもかゝらぬ金を二天作して通ふ
- 袖になみだの露おき初て思ひます穂のはなすゝき
- 空に晴衣小袖も遂に蝶ものがけの出養生
- 然してかうしてかうして而して身代限りはむねにある
- そつと妻戸の透間を連れて閨にさしこむ夜半の月
- 論もよさんせこうなるからは二人他国で新世帯」(百六十六)
- 碌々に寝ない妾をお前は無理に夫ちや身体が続かない
- 可愛がられて又責られて今じや手いけの夏のきく
- 顔に桜をオンノリ出てソナラ貴郎と云つたざり
- 傘の骨にからんで降る春雨はどうせ花散る廓通ひ
- 金の重みがあるのでうかとこひの深みへはまる客
- 唾をつけつけ毛をなであげてグツト突込む筆のさや
- つもる話に終うかうかと明して苦勞の今朝の首尾
- 尽ぬ話しに限ある夜を鳥怨むは此方が無理
- 月落からすが鳴うと儘に帰しやせぬぞへ今朝の霜
- 月にてらされあたりを兼てはなればなれの二人連
- つらいお客や主人の気づる取もおまへの為ばかり」(百六十七)

- 底の見へ透あの薄こほりとけた様でもあるへだて
- 袖に移りし此の梅ケ香は東風の便りか今朝の春
- 其処に居るかと搜つて見れば枕屏風の影ばかり
- そめた浅黄がこい茶となつて未は手織に子持じま
- 算盤持ずに積りし口説割る思ひで踏に来る
- 願ふの何のと少しの借を文のあとからまたもふみ
- 寝てはかんがへ起ては思案しても伴の気がしれぬ
- 女房もちとは知ての事よ惚るに加減がなるものか
- 猫と成たり狐となつて飽までのろまを喰ひたほす
- 寝間は気軽く別れたけれど着る羽織の手の重さ
- れんじをトントンたゝいて見たがよくも寝たもの若夫婦」(百六十
- 八)
- 恋慕するのを明して云へば馬鹿でもお金のある故か
- つらいつとめを私しにさせてあろふ事かよ色狂ひ
- 露のなさを只楽しんで恋の闇路をとぼほたる
- 妻恋稲荷にねがをか主の虫の居どころ宜いやうに
- 辛さ忍んで涙の顔を主にかへして笑ひなき
- なみに揺るゝ彼の月影ははなれながらも円くなる
- 鳴す半鐘で不図眼を覚し主は妾に出をかける
- 男女同権きゝまちがへてぬしも越後かわたくしも
- 泣てだますが稼業のやうに云はんすお方は先が無理
- 内所の異見を横そつ方に聞て意気地を私やたてる
- 苦い顔する借金取も円を見せれば笑ひ出す」(百六十九)
- 濁り水でも澄さへすれば底のまことが見へとほる
- 程でまよはせ度胸でなかせほんにおまへは罪な人
- 惚た同志で気楽な暮し小袖ぐるみであさ寝ぼう
- ほんに可愛あの口もとをにくや午睡に吸ふ藪蚊
- 惚た女房のある其人になんで此様に惚たらふ
- 羅生門より三十日はこわひ鬼が金札取に来る
- 洋燈明りを出雲の神が粋を聞せて風で消

- ランプ頭と誹らば謗れ己が居なけりや家が闇
- 乱暴さんすなお役で居て若も公たら居さうろう
- 楽なよふでも私とお主つとめと言字がまた消ぬ
- わたしやおまへに交情絞り妻に鳴海といはれたい」(百七十)
- 私やお前に火事場のまとへ振れながらに熱くなる
- 吾身で分らぬ我身の心ひよんなはづみで此しだら
- 煙草は尽るし火の気は失る来るかづかれの泣寝入
- 只た二ツの笑窪にはまり今ぢや諸方に穴だらけ
- たゝむ夜具から枕が二個飛だ始末をつい見られ
- 梅やさくらは当座の眺め何ふでも山吹いろがよい
- 内に居る時雷り聞て外で陽気な線香焚く
- 浮名たてられいまさら逃りや名誉回ふく出訴する
- うぬぼれ鏡でかほ見たびにほれぬ女の気がしれぬ
- 旨い世界にチンチン鴨の好たすき焼さし向ひ
- 旨いお世辞をいふ便だからわたしは半句も電信機」(百七十一)
- 胸にわきたつ蒸気をぬしのおそひ車にしかけたい
- 無理な首尾して逢ふのが花よ八重も一重の思して
- たもと豊に大門入れどかへりはひき馬あをいかほ
- 玉子守りは転ばぬ用意転ばす奇特は多びす紙
- 便り待のにまた川支へアゝもじれつたい五月あめ
- 異見するとはお前の野暮よ義理も世間もある物か
- 異見聞つゝ畳へ指で好きの頭字書て居る
- 異見するほど尚ほやけ酒を飲で困らす主のくせ
- ゐやなお髯のアノ深切が問夫の浮気と替りやすい
- 言はず語らず語らず言はず実と実とのやみ仕あい
- おしき筆止めまづあらあらと用事許りに候かしく」(百七十二)
- お顔見ながら話しも出来ぬ玻璃障子の内と外
- 思ひ思はれ思はれ思ひ思ふた同士でまたおもひ
- おもふ人筋とけないゆゑに愁ひみすじの家業する
- お顔皆鶴それから先は色よい返事を菊ばたけ

- 思ひきります諦めまずと詫るあとから出るのろけ
- 玉の輿よりわしやみそ漉をさげて苦勞もぬしの側
- 立引さす気でおほ当ちがひ払ひに衣服を剥取られ
- 鯛やひらめの海魚よりも私しやどぜうが口に適ふ
- 大工たのんで鉋でそつと立たうき名をけづりたや
- 誰か来たそで垣根の外で啼た松虫音を止む
- くもるこゝろもいつしか晴て親に明した妹背中」(百七十三)
- 来るか来るかと待せて置いて外へそれたが夏の雨
- 口を開いて笑つて見せて手を出しや針ある栗の毬
- 口のくるまをお客に乗せて恋の重荷を問夫が引
- 苦勞黒繩子とけたる帯をむすびなをして権の妻
- 国のためだと夜なべを過しや牛の乳屋の為になる
- 西洋造りのオヤ馬鹿らしい算へる天井の板がない
- 背中で泣子をゆり揚ながら男涙にもらい乳
- せめて夢でも見やうと思ひ寝れば半鐘でまた起る
- 背から羽織を着せるに付て叩いた昔しを思ひ出す
- 拙者此地に用事がないが貴殿見たさにまかり越す
- 背中そむけて云度事も我慢して寝る其のつらさ」(百七十四)
- 櫛をさしたり白粉したり然しておきやくを釣し柿
- 暗い妾しと知りつゝ先が夜網打込む面悪さ
- 口に安宅の関所はないが弁慶めかして法螺を吹く
- 汲みつ汲まれつ互ひの胸を結んで嬉しい四手あみ
- 苦説つゝばね互ひに空寝無言と無言のこんくらべ
- 止そに見へても止まない物はぬしの浮気とつゆの雨
- やつれた姿も何処やら床したしか粹者の果だらふ
- 薬罐天窓の恍話をきけばほんにお臍が茶をわかす
- やさしい育ちの私だけだ彼婦故だよ腕車ひく
- 野暮なをとこは元より承知金のないには二度胸り
- 結ぶ出雲の此のかみ写し妾しや一生のまもり神」(百七十五)
- 胸のつかえにや宝丹よりも主の顔見りや気が晴る

- 室の梅さへ開けば香るかす恋路も人が知る
- 無理を通したおまへの疝を耐へて妾しの癩となる
- 胸に燃たつ思ひの火をば落す涙でけすつらさ
- 向ふ見ずでも主より外に他所を見る眼は妾や持ぬ
- 八釜しいなら静かにおしなお前が黙れば妾も止す
- 様子きかねば御腹もたとが是にやだんだん深い訳
- 安目を真に受け鼻毛を伸し代りの出来たも知らないで
- 安い時計と蕩樂むすこ狂ひ易うて手がかゝる
- やつとはふ子と国会議院たてるやうでも未だ立ぬ
- 焼餅らしいが云はねばならぬ毎晩明ては不用心」(百七十六)
- 雲に入る月の油断をコツソリ忍び檐端つたふて来る蜚
- 雲と泥とのへだてはあれど猫も官吏も身のつとめ
- 暗いところとする営業は写真師ちごくに賊よたか
- 苦界のがれし身はつりがねよ君に撞れて権となる
- くれの六時は待わびたれどあけの六時はさて早い
- 嬉し可愛い昼寝の夢がエ、モ邪魔した手のしびれ
- 歌も唄はずおしやくも為ずに花を灌ていゝし地藏
- 動けないほど年季と尻で借を背負ても気はかるい
- 裏をかへしたおきやくの羽織や鼠海黄で猫が好く
- 吸つけ煙草の電気に感じ烟に巻れてあがるきやく
- 酸も甘いも身にありながら色づきや裸になる密柑」(百七十七)
- すがたやさしきあのいと柳かほの桜に手もゝみぢ
- 儘よ儘よが家庫倒し儘にならなくなる身体
- 問夫への盃さとられまいと指て赤らむ気のとがめ
- 儘になるなら彼様したなりで主の家まで送りたい
- 迷ふた妾しがガリガリ亡者難面いお前は鬼ごゝろ
- 乗て世渡るわたしの船へさしておくれよ主のさを
- 惚けて衆人になぶられながら思はず多つぽに入る妾
- 蕩気どころか今日此ごろは息が通つて居るばかり
- 化粧する気かまだ水臭い上べばかりで惚はせぬ

- 今日強てと工んで見たが顔見りや思はず出笑凹
- 消した妾の此の刺繡は主の名前を入れる為め」(百七十八)
- 吹けよ川風うかれて居れど下は地獄のふなあそび
- 文じやわからぬ心の丈を寝物がたりにして見たい
- 富士のたかねにふるのも雪よしづの檐端の雪も雪
- 文明開化の御代にはなれどやはり苦勞はもとの儘
- 二人コツソリ咄の中を闇にして行く火取り虫
- 花街通ひと士族の商法摺て仕舞はにや眼がさめぬ
- 櫛は縁きりかんざしや遺物指環は当座の縁繋ぎ
- 主のこゝろは西洋紙よあつく見せても切れやすい
- 主と二人の懇親会を中止するのは明のかね
- 夕べ結んだ此の揚巻も今朝は口説のもつれ髪
- 雪の夜寒に待草臥て主と思ふて抱こたつ」(百七十九)
- 夕べは持たと振れた客が自分でつめた痣を見せ
- 夢で成りとも鋏漿つけてぬしと相乗りして見たい
- 雪を被つて寝て居る笹を来ては雀がゆり起す
- 燈火の暗く成のは出雲の神か但しや苦勞の仕初か
- 解てニツコリ笑へば帯も縹子と博多のはら合せ
- 賽の河原とぬし待つ夜半はこひしこひしが山をなす
- 三年男をたつたと云へば寝てする事には構やせぬ
- 座敷の仁義に火鉢の義理で飲度酒まで辞義をする
- 先は住吉此身は住ぬ夫に浮名が高燈籠
- 境ひ論なるそのさかづきを藤八ア県にて裁ばんし
- 座敷仕舞て気儘な酒は脱だ着替の皺伸し」(百八十)
- 雪も氷も解けそな世辞は水屋の姉いのあまいくち
- 雪の寒苦をやうやうしのぎ梅もはなさく春に逢ふ
- 行にや行かれず行かずにや置けずと云て行のも変なもの
- 夕日に照され時雨に降られす多は錦をきるもみじ
- 雪の夕に噺がつもり首尾の日和で解て逢ふ
- 寒さ凌げぬあばらやながら酔て眠ればたまのどこ

- 驚か鳥か明らぬうちに春の小鳥がやかましい
- 三弦の駒にひかれてつひ浮々と泥にすみ込む大鯰
- 三世因果の道理でくどき二世のちぎりをする和尚
- 目に立疲れとすがつた肩におもはず二人が見る鏡
- 目付で知らせて悟れと云へば悟つて居ながら知らぬ顔」(百八十一)
- めぐる地球にいかりを下し暫時とめたき今朝の雪
- 牝鹿雄鹿のそのなかなかは立た角をもおる小鹿
- きみは吉野の千本ざくら色香はよけれどきが多い
- 切手と言字は氣掛りなれど端書へ白地にや書れ無
- 狐出て行く狸はのこるのこるたぬきは夜具のぼん
- 恋の邪魔すりや那の鳥さへ可愛と啼ても悪まれる
- こひは曲者油断はならぬいつか紙入までもから
- 恋と欲とのふた筋かけてわたしや三筋を弾く家業
- 理も非も知らずに結んだ縁と夏の氷は解易い
- 利口と思ふは親爺の欲目わちき風情に馬鹿された
- 水をさしても恋には渋い二人は濃茶のなからしい」(百八十二)
- 身一ツなれども写真でお顔見れば其日の憂晴
- 三すぢ弾よりお髻を曳てはやく乗りたい玉のこし
- 晦日に月見時節だけれど女郎の誠にや未だ遇ぬ
- 店にや親指奥には小指そとにや人差しゆびが居る
- 水瓶見たよな娼妓のお尻抱たひ懐中がひえて来る
- ふられた証拠にや朝ぼんやりと廓帰りの白痴づら
- 文もこゝろもとゞいて解て今宵結ぶは二世のゑん
- 更て待夜に見にしむものは蕎麦の風りんかは千鳥
- 文の使に忍んで来れば親爺の異見の声がある
- 文明開化の鎖さぬ御代もなぜか恋路にや関がある
- 船に似た様な芸者の勤め楫をとりとり浮すきやく」(百八十三)
- 手枕さしかへ顔見あはせてあとは行司のなゐ角力
- 出先問はれてツイ口籠り散歩とばかりは云ひ兼ね
- 手鍋提ても添はねばならぬと言お方は主じやない

- 手持不沙汰で去した訳は繁き人目の別へだて
- 鉄道器械に電信だより負ず劣らぬ国益
- 逢ふて居てさへ届かぬ言葉文で書れはづがない
- あたと浮気のあい乗ぐるま引れて恋路の暗をゆく
- 故園の有様今如何ぞやと言ふて学費をまつて居る
- 氷より堅い心の妾ぢやけれど主の手管に解される
- 今夜お出と言葉の毘にかけておきやくを釣ぎつね
- 心の誠をすして見せて解ける氷の夏の夜半」(百八十四)
- 小鳥の名に似た娼妓の箆筒あけて見さんせ四雀
- 縁は異なるもの網代の塀にからむ小鳥のつまきどり
- 易を見たらばお前は浮気妾や出雲へ暴れ込む
- 縁のこよりを出雲のたなで万一や鼠がひいたのか
- エ、此様になつたと島田を撫で後能く見ぬ主の顔
- 権利権利と云しやんすれど妾にや其様な義務はない
- 芸妓する身と画工の皿はひとの知らない色がある
- 化粧したのでフト見違へる雪のあしたの桃さくら
- 今日もけうとて噂をしたよなど、手管の口ぐるま
- 留守を使つて朋友返し後で舌出す若夫婦
- 留守に洗たく仕て見だされて今でいとまのこのつらさ」(百八十五)
- 留守にや案じる返れば邪魔に悪戯盛りの一人ツ子
- 思ふばかりで言出しかねる何卒先からいへば宜い
- お前に見せよと結たる髪を夜中に乱すも亦お前
- 朧月夜に人目を忍び雁も北ほとソツと行く
- 親も得心せけんもはれてもしと呼ぶのはいつの事
- 思ふ気まゝになる夫までは苦勞難難根くらべ
- おもふ心の半ぶん言つて酒にかぶせてあかいかほ
- 思ふお方と添たいまゝに八百屋お七は身を焦す
- お顔見ながら咄しも出来ぬ玻璃障子かよしのがは
- 送る文をば二重に封じ中は一重にねがひます
- 一寸覗いて思はせぶりに憎や乙鳥の通りぬけ」(百八十六)

- 散す心がアレマア憎い春の夜中の仇あらし
- 勅を取りあげ顔うちながめ奏もおま判のみたいか
- 一寸時雨に袖ぬらされて暫し仮寝の雨やどり
- 利発なお前にたらわぬ私しトかつて情を掛やんせ
- 理を非に枉ても任せぬ身体添なきや妾の気が済ぬ
- 引たせかゝつた其手を押へぬしの月給はいつ渡る
- ひとの噂にせけんもせまく今の思ひがかくしづま
- 髯で官吏が勤まるならば勤めさせたや臍の下
- 人は見めよりこゝろと言が私しや夫より金がいふ
- 泣な此方よ向け疑ひ晴れた惚たが因果で無理もいふ
- 何時なりとも引して遣ると風の神めがぬしゝをる」(百八十七)
- ならば出雲へ銀行立て色の為換がして欲い
- なまじ声をば聞せておいて思はせぶりだよ子規
- 鍋釜茶釜に摺鉢れん木区別あれども添とげる
- 内証とおもへにすかした放屁悪事千里のこの放屁
- 鍋に耳ある徳利に口よ猪口とはなしも出来やせぬ
- 初手は請願中たびや受理よすゑは共和の夫婦なか
- 鹿と咄しも聞かない内に又もお前は気お紅葉
- 真にお前はラムネの徳利何為すりやお尻が据るやら
- 実を嫌つて不実をすいて儘にならぬもよく出来た
- 舌が楯とるアノ口ぐるま乗つて二階へひきあげる
- 回向するとして仏の前へ二人向いて小鍋だて」(百八十八)
- 海老で鯛つるア昔しの事よいまじや狐が鯨つる
- 笑顔つくらふ花をば棄てゝ悪やすげなく帰る雁
- 遠慮するのは始めの中よ惚りや互ひに喧嘩する
- 酔て寝たをれ引をこされて遺憾きわまる朝がへり
- 縁を切火も焼ボツくひに又も燃つくほくち箱
- 怖畏ものだよおぼえて置な地震債客りかゝおやぢ
- こゝろの底からさも実らしく嘘じや無よと嘘を吐
- 恋をするなど親達や言が妾しやどうして生れたか

- 恋のいろはを卒業すれば夫からちりぬる親の金
- 心で掛合目の越気でも金気がなくなりや通じ無い
- 逢はば斯まで嬉しい者を何んの異見が耳に入「(百八十九)
- 逢たさ六寸見たさが四寸それがつもりて癩となる
- あへば互にたゞぼふぜんとはなし残してあとくやみ
- あだなつめ弾三筋のいとに引かれて私は水調子
- 逢ふた初めに其捨言葉聞ば苦勞もせまい物
- 有そな様でも無のはお金無さそに見えても有氣兼
- 膝で知らせて眼尻で消て一坐酔せて後の首尾
- 髻とむすんだ情約といて間夫と自由が致て見たい
- 一夜の添寝のなさけの露でもまた色ます今朝の露
- 膝へ来た児を熟々ながめ切て退けとはどう欲な
- 芸者止ても又権妻で苦勞するのも主の為め
- 兄弟と知らで契つた二人の中は人にも云れぬ腐れ縁「(百九十)
- 夜毎つれないぬしゆゑ妾しや双べる枕に恥かしい
- 他所で陽気な三味線聞ば内で陰気な小言聞く
- 引くにひかれぬ洋服仕立袖なて別れをするわいな
- 人の出世は知れないものよ檻褌も末にはかみとなる
- 悖妬するなら証拠をお見せ胸に覚えのない妾
- 灸も薬もなにきくものかわたしや逢たひ此やまひ
- 君の住家はいずれの所なぞとそろそろ借り仕たく
- きいた異見は煙りにすれどたつた浮名で胸こがす
- 君に粟津のないつれ恋路妾しや堅田のかたおもひ
- さきへ咄しの道さへつけば無理には止ない雪の朝
- さけのみ鯛あそびもし鯛金もためたいじれつたい「(百九十一)
- ほれた誠を団扇にこめてあふぎ入りたい主のむね
- 星の数ほどお人はあれど月と見るのは主ばかり
- うその中からまことの事を言せて見たさのこの苦勞
- 嘘がありやこそまことが分る杯と言ては嘘をつく
- いろよき紅葉も妻よぶ鹿も恋にうきななたつ田川

- つらいひと目の函谷関は鶏の空音じやこえられぬ
- 妻子の有のを承知で惚て末にや手きれと出る積り
- 月はやさしく寝床へすに遅いおまへの面にくさ
- 柘の櫛にはかゝらぬかみも人の口には戸がたゝぬ
- 元は野にさく芒もいまは世事にくすぶる炭だはら
- 燃る思ひは浮名と共に立や蒸氣の出けぶり「(百九十二)
- もともと浮気でかう成乍ら浮気するなも能できた
- 物質の変化は理学で知れどそうもわからぬ主の胸
- 若や夫かと門の戸開りや棒を抱えて立て居る
- 店も土蔵もつい倒されるキアリくずしのあだ調子
- 見まいと思へどついお互に顔見合しては知らぬ顔
- 忍ぶ戸口ででる咳のめばなびく蚊やりがむせさせる
- むりな首尾して逢ふ夏の夜は話しなかにばに鶏のこゑ
- おもひおもひてこの新世帯なつのすゞみもふたりづれ
- ほたるがりだに蛍を追ふておもふおかたの居る方へ
- 宵の口説に結んだゆめもとけてすゞしきはつのおび
- 色もこひじもまだしら扇そつとかくしたかたゑくぼ「(百九十三)
- お顔みづ沢たじます思ひひきぞわづらふあやめだけ
- あつい恋中すゞみの舟でぬれてうれしいにわかあめ
- ふるかふるかとうたぐる念もはれて気味よきなつの月
- 懐中かゞみに鬢の毛なをしそしてたがひにもつ団扇
- あだな詠めのはかない椽にいつまで私しを釣しのぶ
- 文句いりどゞ一の部『きはらし 第二篇』とほとんど同じ
- 恋の欲目かおまへのなりが「賢女「三千世界をたづねても又とある
- まい殿ごぶり」業平さんでもかなやせぬ
- またもお株の十八番か「清もと「あじにすねたる松の癖」「(百九十四) すなほに此方を向しやんせ
- 百夜通ふてサテ情なや「しん内明がらす「たとへ此の身はあは雪と共に消るも厭ねど此の世の名ごりに今一度」逢て怨が聞せたい
- 未練らしいが寒くて成ぬ「端うた一中くづし「よつでの垂をおろし

ても又もなきゆく明がらす襟にかぜしむ衣紋坂」見かへる柳も小手まねき

●すねて背中を向ては居たが「富本松かぜ」「鳥が唄へば別れがいやで」(百九十五)とほしかねたよ此がまん

●十時の約そくアレ今じぶん「声色」「遅くなつたを云立にエ、」懐中時計はなんのため

●嫉妬やくなどいはんすけれど「義太夫おび屋」「妾しも女子のはしじやもの」いはいで事がすむものか

●綾や錦にくるまる主が「義太夫阿古屋」「昔しの衣々引替へて木綿木綿とおちぶれて」愛想のつきぬが惚た情

●最はやおまへの来る刻限と」(百九十六)「歌沢」「言つゝ立てれんじ窓障子ほそ目に引明て」のろけながらに待て居た

●主は海外旅行の身ぶん「野崎村」「あまり逢たさなつかしさ」どうぞ御無事で帰るやう

●じつと見詰てにつこり笑ひ「義太夫千両幟」「向ふ鏡のふた取て写せばうつる顔と顔」わたしの惚たも無理はない

●つひした縁からこゝろを染て「はうた」「寝ては夢起ては現まぼろしの」眼先にちらちらぬしのかほ」(百九十七)

●人目しので恋路の関を「義太夫梅川」「夫は嬉しう御坐んせう去りながら私かとゝさんかゝさんは京の六条じゆずや町」こゝで峠の又苦勞

●親父さんには放逐されて「詞」「今戸橋から帰らふか山谷橋から帰らふか」何処へゆかうか思案橋

●十に一ツも真事はないと「清もと」「常から主の仇な氣をしつて居ながら女房になつて」百も承知でまたまよふ

●真の話しに心も解て」(百九十八)「長唄勸進帳」「実に実には是も心得たり人のなさけの盃を」請て飲込む爛さまし

●親とおやとのゆるしを受て「さんば」「扱婚礼の吉日は縁を定めの日を撰み」夫じや妻じやといわれたい

●夕辺の夢見が迷ひの種よ「清元主水」「しかも桜の初日の夜はでな一

座の其中でツイ岡惚の浮気から」今ぢや一人が身の迫り

●痴話が募りてくぜつのは「中節吉原八景」「あらしは晴てひと時雨ぬれて逢夜はねて」(百九十九)からさきの」まつた甲斐なきあけがらす

●思ひきつたとおまへの言葉「阿古や」「問れしときの其苦しき水責火ぜめは答ふが」返辞するさへなみだごゑ

●根もない花だと籠略にするな「清元落人」「散りても跡の花の中何時か故郷にかへる雁」根がありや再び花が咲く

●雨の夜道も他目をしのび「長うた花車」「つまどたゝかば誰ぞともいはであけて霜夜のむつごと」(二百)七ツにやうたふ家つ鳥

●主の門まで来は来たものゝ「アダチ」「この垣一重が鉄の戸をたゝくにもたゝかれぬ」忍ぶ恋路のじれつたさ

●真の夜中に不図目を覚し「言葉」「何か夢でも見たのかへ今時分泣て居る奴があるものか…ダツテ妾は悲しいものを」お前に別れた夢を見た

●文明開化の自由だなどゝ「清もと」「男ははだか百貫の掛ねんぶつと向ふ見ず」ふへる浮世にする苦勞」(二百一)

●別れちや見たれどコレ写真「文字」「見ればみる程クツキリト水ぎはの立好男」おもひ出すさへへ癪のたね

●思案なかばに空とぶ鳥は「常磐津源太」「アレ雁がねの女夫づれ」連て逃るの辻うらか

●ぬしと別れのをのきぬぎぬは「清もと」「すがる袂もほころびて色香にほるゝ梅のはなさすがこなたもにくからで」かいるかいるも五六度

●妾が悪けりやあやまりませう」(二百二)「巨唄口舌して」「口舌して思はせぶりな空寝入」すねずと此方を向しやんぜ

●おつにからんで持こむ言葉「十段目」「夕顔だなのこなたより」ぬつくと出たる情夫の兄

●写真手にもちつくづくながめ「十種香」「ゑこうせうとてお容を」是が紀念とひとしづく

- 惚た惚たと口さきばかり「清もと」「世辞でまるめて浮気でこねて小町桜の詠めにあかぬ彼奴にうつかり眉毛をよまれ」(二百三)「またも其手でだますのか」
- 人目多けりや顔見るばかり「義太夫妹背山」「かんじんの寝るときは離れ離れの床の中」手も握らず色目もつかはず何する事なほ出来ぬ
- ぬしは民情視察のおやく「千両幟」「江戸長崎や国々へゆかしやんすりや其跡で留守はなほさら女気の独くよくよ物あんじ」かわる人情に成りやせぬか
- 恋の諸わけも知らない二人「清元おはん」「始めてこわいはづかしい跡でうれしい枕して」(二百四)「斯うなるからには未始終」
- 曇るわたしの恋路もしらず「たゞ信」「いたづらに送る月日はおほけれど花見て浮立つ春の艶」晴て邪魔するにくい月
- ナンボあかるい開化の世でも「清元北しう」「千里が一里通ひ来る」恋のやみぢにや瓦斯はない
- 篠を束ねてつく様な雨に「清もと」「垣をとられて丸木橋やオツトあぶない既のこと」ぬれてかよふも恋の路」(二百五)
- 咲た花ゆへ又散る苦勞「清元玉川」「ア、恋せまい迷ふまい」イツソやもめの気楽ずみ
- ついした事からコレ見やしやんせ「富元お千代」「目元に絞る縮緬の二重廻りの抱へ帯」最早袖にも隠されぬ
- 逢たさ見たさは飛立ばかり「一中節」「ふけて青田にこがるゝほたるれん子まで来て蚊帳のそとア、何とせふ」兎角うき世はまゝならぬ
- 帰る羽織のたもとに縫り」(二百六)「清もと」「短い夏の一夜さに忠義のかける間もあるまい」しくじりや妾しが立すゝす
- 年が違をが女房があるが「常盤津」「泡ときへゆく信濃屋のおはんは」そんな事をば構やせぬ
- 詩入の部『きほらし』第二篇』とほとんど同じ)
- 芸妓する身はそらとぶ鳥よ「姉客南海兄洛師。四人骨肉半天涯」どこのいづくで果るやら
- こしの鑑札府庁へをさめ」(二百七)「与君相尚転相親。与君双棲共

一身」はやく往たいぬしのそば」
○ ほれた三字に気をうばわれて「呼狂呼賊任人評」一時わすれた義理の二字

○ 見おくり見かへり涙となみだ「不知双涙辞親日。正是丹心報国年」あかぬ別れの明がらす

○ 意気地の張のと云やいふものゝ」(二百八)「娼家美女鬱金香。飛去飛来公子傍」矢はり目につく金どけい」

○ 思ひしづんで火鉢にもたれ「旅館寥々将暮天。」落て気をつく柘のくし

○ 風がもて来る二階の葉うた「燭暗数行虞氏涙。夜深四面楚歌声」おもひある身のむねに釘」(二百九)

明治三十五年五月廿一日譲受
全全年全月廿五日印刷発行

名歌よし

編輯者 東京市日本橋区通り四丁目十番地

西村寅次郎

発行者 全浅草区左衛門待ち一番地

岡村庄兵衛

印刷兼印刷所 全神田区柳原川岸二十二番地

角張敬四郎

発行所 全浅草区左衛門町一番地

盛花堂」(奥付)

六 『いろは都々逸一千題』

『いろは都々逸一千題』(国会図書館所蔵)
いろは都々逸一千題序

八雲たついづも八重垣つまこめにとうたはれしをはじめにて四季折々の花くらべ見るもの聞くものにつけてひとつこゝろをたねとして三筋の糸にうたひそめ世に長く其枝葉さへ栄ゆるは松葉ども多のひとふしなりけり来るか来るかと浜へ出て見」(序才)る海士が子も木曾路にかけし丸木橋こわしと渡る山賤までも嬉しき恋のかごとには思ふこゝろを云ひかけてとくなぞなぞの辻うらならねどヲヤいゝねへといふ評判を願になん

粹多情士識す

いろは都々逸一千題
いの部

- いろの都こもきて睦まじく鹿も紅葉のにしき連れ
- いやな鯰に苦勞をするは蛭子の笑がほに惚たゆへ
- いろのいたづら移りにけりな手拭ふ布にも小町紅
- 意見聴ねば親へは不孝聴ば主へは義理たゝず
- いつか浮名の音にもひゞく砧まくらで出来たなか
- 幾夜寢覺のさびしき余り写真をだきしめ床の守
- 言ニヤ言レズ言ズニやおけずと言て言たらおこるだろ」(一)
- 否な猪口でもさゝれた義理で受りや嫌だと彼目付
- 色目と思つた其の目は藪でお門違の間の悪さ
- 言ぬ花からものいふ花へむけるくるまの長づゝみ
- 入れてお呉よ痒くてならぬ妾一人が蚊帳のそと
- 色気はなれば墨絵でさへも濃とうすいが有はいな
- いくら泥鰌に滅金しても何所か鯰にや見へ兼る
- いろはさめない一粒鹿の子ぬしとこゝろのあい鼠
- いろは紅葉もこくなるからにハット浮名が龍田川
- 色を教えたアノ鶺鴒にかへて不粹なあけがらす
- いった一言あとへもひけず閻魔顔して聞くむしん
- 一夜あはぬをうらむも道理二度と一世にない月日」(二)
- 今の音々はつ音の鼓み音を慕ふて来る狐
- いやな座敷と嬉しい座敷わたしや泣たり笑つたり

- 色にや成田の其のうへならば私しやまかせ新勝寺
- いろよき紅葉も妻よぶ鹿も恋にうきなたつ田川
- 命あつてのふたりが中をすてゝ添りやう筈がない
- いろは売ども心のまことどろの中にもはすのはな
- 寧いはふと口まで出ても下すまれうかと又だまる
- いふて仕舞か云はずに置か主の浮氣のないしよ事
- 息を吹かけがらすへ何かゝいて二人がわらひ顔
- いつも暗夜か恋てふ路はふんで迷はぬひとはない
- いとし可愛の虚言八百で尻の毛抜たらつきいだせ」(三)
- 色にほだされ取ては見たがいやになつたよ渋い柿

ろの部

- 老人と馬鹿にしやんすな国会御覽十九廿の人はない
 - 論より証拠を取られておひて云訳するとはやぼの人
 - 廊下来るのはたしかに狐たぬきも古と大あぐら
 - 老少不定の身でありながら時節まてとは切れ詞
 - 廊下ばたばた障子をがらりヲヤと莞爾笑ひ顔
 - 論もよさんせこうなるからは二人他国で新世帯
 - 碌々に寝ない妾をお前は無理に夫ちや身体が続かない」(四)
 - 論より証拠だかゞみをごらん主と此子の鼻のなり
- はの部
- 花の千草に色もつ野辺は月さへ見とれて夜を深す
 - 花美で人品風雅で洒落とへんなどこから称かける
 - 鼻ない此身は軒端のむしよ一夜つられて啼あかす
 - 離れ離れに別れちや居れど水に浮草根は一つ
 - 晴てのみやろとは蝶花形よむすぶ多にしは妹背山
 - 花火褒つゝ簾をあげてソツと流で手を洗ふ
 - はなしは絶ても今夜は雪が積り積つてかへされぬ
 - 羽織着たまゝツイ転び寝の皺が愠氣の種となる
 - はでな桜のくれないよりもじみなみどりの松が可」(五)
 - 離れ離れの住居をすれば互ひにうたがふ事ばかり

- 盃とわたしに言わせて置いてあ爛べいでは銚子せぬ
- 腹はふくれる浮名はバツとたれに云ふか此の辛苦
- 話しや支度し人目はあるし我慢する身の其つらさ
- はらに身の無い瓢箪さへも胸に括りはつけておく
- 晴ぬこの身のこゝろを知らず冴る月夜はこひの闇
- はかない赤繩とテンから知て結ぶも不図した出来心
- はたから見ばゝかげた嘶まよはにや其理がわかるまい
- 早くおまへを鯨にさしてふたりぬらぬら暮したい
- 腹を立ててまた笑わせて嬉しがらせて泣かすのか
- 働きがなけりや意気でも美男でも今の娘は惚はせぬ」(六)
- 花にあだする雨風よりもこひの邪魔する憎いひと
- 花のさかりを乙鳥にゆづりいつか古郷へかへる雁
- はなの色香に浮れて空然と妾しや胡蝶の夢ごゝろ
- はやく寝よとの嬉しい声を明にさしひくときの鐘
- 花をあるじ寝に来る鳥は忠度気どりで居るだろう
- 晴て二人がうつした写真むねのくもりは腮のかげ
- 跣足まゐりの身はやつるれど神の力をたよりにて
- 花は世上の愛敬ものよ野暮なひとにも香をおくる
- はなの風なら除ても吹が纏頭の座敷じや除られぬ
- 晴て逢へないおまへの門へ出這入つばめが浦山しにノ部」(七)
- 二銭おつ張り郵便きつてこひ路のつかひも大政府
- 握る手さきを払つてひと目憚かる笑顔に当るそで
- 日曜土曜が毎日つゞきほかの五曜がなけりや宜い
- 莞爾わらふて見せたい処を憚る人目に澄ましがほ
- 憎らしいよと横目で睨み可愛といふよな爪りやう
- 二世を契ひし大切なお前別れりや此世に用は無い
- 西も東も知らない者を連て浮気なたびかせぎ
- 二世を堅めたおまへの前でできて気になる三の糸
- 憎い雨だと小言は云へど好た同士のもあい傘

- にくやひと目の压制主義が恋の自由をさまたげる
- 悪い規則が世にないならば疾に身儘になるものを」(八)
- 女房盛りを白歯でおいで今さらきれるた何のこと
- 憎いと云たを兎や角云へどまさか可愛と云りやせぬ
- 匂ひぶくろに似たうめが香は小袖垣根の袂から
- 苦い濃茶の二人が中も水を差れて甘くなる
- 憎やこぼれてはらはらはらと色気内証のはじけ豆
- 二度の務もお前の為に不夷するとは情けない
- 庭の虫のねなきやむたびに若や来たかと立て見る
- 二階座敷の手摺にもたれまぶはこぬかとまねぎ猫
- 莞爾わらふて指たる猪口を澄して返盃は水臭い
- 苦い顔する借金取も円を見せれば笑ひ出す
- 濁り水でも澄さへすれば底のまことが見へとほる」(九)
- ならめる目にさへ愛嬌もつて怖さわするゝ主の顔
- 悪い秋風まよひの論はあなめあなめのすゝきのほ
- 二世とちぎりし写真をながめ思ひ出して笑がを
- ほノ部
- ホンニ貴郎は気短などゝ云ひつゝ箒を密とたてる
- 惚たかほせず口へも出さずほかへ盃指すつらさ
- 牡丹に唐獅子菜の葉に蝴蝶わたしや離れぬ主の側
- ほども洋服小意気な客にわちきや洋袴と初会ほれ
- 惚たほの字を火の字に書ば熱くなるのも無理はない
- ほれて裸で寝のじや無いよ汚してならない借た衣
- ほそい元手の三筋の糸は長い浮世のつなぎざほ」(十)
- ほれた誠を団扇にこめてあふぎ入れたい主のむね
- 星の数ほどお人はあれど月と見るのは主ばかり
- 程でまよはせ度胸でなかせほんにおまへは罪な人
- 惚た同士で気楽な暮し小袖ぐるみであさ寝ぼう
- ほんに可愛あの口もとをにくや午睡に吸う藪蚊
- 惚た女房のある其人になんで此様に惚たらふ

- 惚て呉ずばなま中こんな気がね苦勞はせまいもの
- ホンニ難面アノ稻妻は二の目見ぬうち消てゆく
- ほんに否だよ夜あけの鐘とかりたお金とこの気兼
- 外のお客へ腕の文字を隠すおまへの腕まもり
- 惚たは妾しが重々わるい可愛といつたはぬしの罪」(十二)
- 惚た哩など芝居のやうに云はれるものなら嬉しかり
- 星の数ほど男はあれどつきと見るのはぬしひとり
- 惚た女の蝙蝠傘は指で押へりや直ぐさせる
- ほとけ顔して三度は居たが重なる無心にもう閻魔
- 細く永くも便りはおしよ中のきれないテレグラフ
- ほかの草木がしほれてのちに松の操がよく知れる
- 惚られて腹が立なら何故此様に程能生て来がよい
- へノ部
- ペラの蛭子がそろばんおいて外債利足のあんじ顔
- 隔つ坐敷で弾く三味線も君を俟つ夜は忍び駒
- 減ない顔だよ見るのはよいが鼻毛を算のは最止な」(十二)
- へつた銚子と手のある娼妓ふつて底意を考がへる
- 変だ妙だと小首をかたげたれの女房がハテヘルだ
- ヘルは身代ふえるは金の利子とたばことさけの税
- ヘンな奴だと思へば尚もシツコク寄添ふ意地悪さ
- 糸瓜野郎が大きくなつて恩ある垣根をおしたほす
- 返事し兼て火鉢の灰へ火箸で分らぬ文字を書く
- へちまあたまと小言を言がうぬは南瓜に生写シ
- とノ部
- 泥水あがりちや世帯はもてぬ朝寝うは気に茶碗酒
- 留て置たし留たら主の為に悪かる家の首尾
- 逆もと思ふたお前に来られ夢では無かと気が迷ふ」(十三)
- どうでもおしよと投出す身体其様斯かと引よせる
- 遠ざかるほど逢たい物を日々に疎しと誰が言ふた
- とめたい思が天まで届きぬしと帰さぬ今朝のあめ

- 遠く隔てど切さへせねば心便りの鳴子縄
- どうで近遠と知てはいれど八景おいたか気が揉る
- 泥水社会とたくさんさうに言へど鯨もおなじなか
- 土手の八丁は車で来たど口の八丁で間を合はず
- どうせ読れて仕舞た鼻毛いま更抜のは無駄なこと
- どうせ及ばぬ願ひぢやなど云ふ中や思ひが未浅い
- 解てうれしい此したひもを結ぶ思案にわしや瘦る
- どうかしたかど一筆書て遣す隙ありや昼寝する」(十四)
- 年も十五の月より主を思ひそめてはやみとなる
- 時計廃して目をくもらせて然して朝寝が仕て見度
- 年は寄てもうは気はやまぬいろに期限の律はない
- どうか浮気はモー吉田やと意見夕ぎり主のため
- 遠ざかつても又アイウエヲ変らぬ誓をタチツテト
- どうせ二人が何様成るからに真あかして人だのみ
- どうか為かど一ふで書て遣しや無心を云ふものを
- 燈火の暗く成のは出雲の神か但しや苦勞の仕初か
- 解てニツコリ笑へば帯も縞子と博多のはら合せ
- 銅ちやん隠居で銀ちやん洋行こゝろ細はお紙さん
- ドーセぢれつたい顔見ぬ内は用もなんだか手に附ぬ」(十五)
- ちノ部
- 一寸と眺めは奇麗だけれど末の頼みにならぬ雪
- ちよつと顔見せまた雲がくれ主は私しにあきの月
- 一寸とした間に逢ふとすれど澄だ水にはおりが無い
- 痴話はいつしか洋燈とゝもに消て時計の音ばかり
- 一寸見つめりや恥かしさうに顔に紅葉の色娘
- 猪口との言葉の揚足とつてすねる銚子に障る爛
- 一寸御覽よ此の児の顔を主に宜く似た色白さ
- 猪口猪口逢夜を一ツにまどめ徳利嚙がして見たい
- 力づくにて切ない者は固く結んだ縁の糸
- チンチンかも鍋煮たもの夫婦破たお鍋にとぢた蓋」(十六)

- 一寸覗いて思はせぶりに憎や乙鳥の通りぬけ
- 散す心かアレマア憎い春の夜中の仇あらし
- 勅を取りあげ顔うちながめ奏もおま判のみたいか
- 一寸時雨に袖ぬらされて暫し仮寝の雨やどり
- 好淫女にべらりとなぞを掛て解かせる繻子のおび
- 一寸御覧よ此の新聞を主の浮気が書てある
- 智恵の袋はおほきい程が邪魔に成らずに身の便利
- 一寸首尾した夜は逢ふ坂の関たつ談して後や前
- 娼妓にや実なし杯云人に見せて遣たいやつの実
- 千代と契りて変らぬ色の松に嬉しき風だより
- りノ部一(十七)
- 理も非も知らずに結んだ縁と夏の氷は解易い
- 利口と思ふは親爺の欲目わちき風情に馬鹿された
- 利発なお前にたらわぬ私しトかつて情を掛やんせ
- 理を非に枉ても任せた身体添なきや妾の気が済ぬ
- 嫉妬するのも惚てるからさ否なら彼是言ひはせぬ
- 嫉妬するなら証拠をお見せ胸に覚えのない妾
- 立派に遣るならお金をお呉れ外に好はないわたし
- 悖妬で妾は云ふではないが主の浮気はなせ止まぬ
- 悖妬らしいが言ずに居れば末が実に案じられる
- 理も非も知らない幼稚子をば他人にわたすはどうかよくなぬノ部一(十八)
- ぬしの浮気に四方へくばる八ツ目鰻の目がほし
- ぬしの口ぐせ不図いひかけて咳に紛らす人のまへ
- ぬしが浮気に浮気をすれば妾や苦勞に苦勞する
- 主は浮気が種まき散しや妾しやりん気の芽を出す
- ぬれぬ前こそ露をも厭へぬれて色ます女郎花
- ぬしは上等わたしは下等ひとが中等で邪魔をする
- 主が月なら妾や困魚と浮て此の世に隅田川
- ぬしはしんなし絵工の筆よ色にさまさま染み易い

- 主と妾は田末の花よぬれて色ますあやめぐさ
- 主の心はあの画さがしよ分りそうでも知れにくい
- 主と妾を鎖で止てともにかせいで暮し度(十九)
- 主のこゝろは西洋紙よあつく見せても切れやすい
- 主と二人の懇親会を中止するのは明のかね
- 主の浮気を聞きたび毎に癩がふとつて身はやせる
- 主を心に私や掛けだすき細い手わざの糸車
- 主は松の木曲つて出も私や蔦ゆへからみつ
- 主に貰ふた小袖の長さ合ぬ思ひが身にあまる
- ぬしは今頃起てか寝てか思ひ出してかわすれてか
- 脱だ羽織を行燈にかけて人目つゝんだしのびあし
- 主に逢ふ瀬を神がけ念じ恋の闇路をふむ百度
- 主のこゝろも知れない中に惚た妾しの気が知れぬ
- 主といふ字に人冠があれば苦勞はせまいもの(二十)
- 主に惚るの権理もあれば誠実つくすの義務もある
- 主の心は蒸気の煙り遠くなるほど薄くなる
- ぬしは二十一わたしは十九四十なかよく暮したい
- るノ部
- 留守と知らずに来て見りや一人何時頃帰るとテツ二聞
- 留守を覗つて盗賊猫が来てはチウチウ盗み食
- 留守とあなどり妾をとらへ馬鹿にするのも程がある
- 留守番するほど妾は嫌よ何国へ行にも二人づれ
- 留守に抱く子の寝顔を見れば主に宜う似た瓜ふたつ
- 留守にト一を密と引入れてかへりや裏からかへしだす
- 留守と言たで行先たづね私しや電話で用をたて(二十一)
- 留守を使つて朋友返し後で舌出す若夫婦
- 留守に洗たく仕て見だされて今でいとまのこのつらさ
- 留守にや案じる返れば邪魔に悪戯盛りの一人ツ子をノ部
- おまへの心に碇をおろし浮気しつかりとゞめたい

- 同じ流にきてすみながら驚は居ねむる鶴はあさる
 - 思ふ気まゝになる夫までは苦勞艱難根くらべ
 - おもふ心の半ぶん言つて酒にかぶせてあかいかほ
 - 思ふお方と添たいまゝに八百屋お七は身を焦す
 - お顔見ながら咄しも出来ぬ玻璃障子かよしのがは
 - 送る文をば二重に封じ中は一重にねがひます」(二十二)
 - 親のいけんと霜夜のさけは五臟六腑へしみわたる
 - 女心はうつろい易い惚たが当にはならぬもの
 - オヤ最八時か夜は短かいとおつにきかせる床急ぎ
 - 重い尻でもさすれば動く紙幣のちからは別な物
 - 思ひ染たる未通女の娘恋にみだれし野崎村
 - 駕鴛の衾をかさねて居れば明のからすが引わくる
 - 親の意見を聞きや聞たびにぬしの言葉を思ひ出す
 - お前ぢや氣を揉み女房にや氣がね是ぢや命が続かない
 - 思ふお人の手にふれよかと思やなりたや此ふみに
 - 思つたばかりで届かぬこひの届く器械が求めたい
 - お為ごかしもモ一聞厭た嫌なら嫌だといふが宜い」(二十三)
 - おなじ金でも夜明のかねと借た金とはいやなもの
 - おそいかへりを待身につけて止めた昔を思ひだす
 - お前が然して胡麻菓子よ云が妾やお臍で茶わ沸す
 - 男といふ字を分析すれば丹田開拓する力
 - 思ふたお方に謎ではないが解せて見せたい胸の内
 - お着せ申た羽織の襟を帰すもつらいよ今朝の雨
 - 送る文をば二重に封じ中は一重にねがひます
- わノ部
- 悪くおもつてお呉でないよ欠の出るのは血の加減
 - 分りや二種の朝顔なれど一ツにからんで花が咲
 - 妾しや素より水色浅黄そめりや濃くなる下ごゝろ」(二十四)
 - わたしやおまへに交情絞りに妻に鳴海といはれたい
 - 私やお前に火事場のまとへ振れながらに熱くなる

- 吾身で分らぬ我身の心ひよんなはづみで此しだら
 - 私しやお前にホノ字とレの字あとの一字は金次第
 - 私しが忍んで往のも知らず悪や燃へ出す此蚊やり
 - 別れに着せたる羽織の紋も影と日向とあるこひ路
 - 妾を見棄て他国で花が咲くか見しやんせ咲やすまい
 - 別れに汚したなみだの顔を一寸直して出る座しき
 - 訳も聞ずに踏だり蹴たり何ぼしがない身じや迎も
 - 妾の病氣はお医者ぢや不可ぬ主のお顔を見りや治る
 - 私しや燕よツイ秋がくりや雁を残してにげて往く」(二十五)
 - 若い同士の根もない喧嘩背中合せや腹合せ
 - 妾しがお尻は汽車軽気きう早いと軽いで人が乗る
 - 妾しとお前は深雪の竹よ朝日さすまで寝て見たい
 - 私しのこゝろは郵便端書あけつばなしで意を通ず
 - 腕力づくなら滅多に負ぬ腕に覚への此の拙者
 - わたしは年若まだ親がゝり思ふおまへは女房もち
 - わしのこゝろは玉転がしよ穴を狙つて苦がやまぬ
 - 妾しや蠟燭心からもえるぬしはらんぷで口がはり
 - 別れのつらさに謎打かけて解にや返さぬ今朝の雪
 - わたしの心と洋燈のホヤは点されるので熱くなる
 - わたしの誠の一筋縄でぬしのうはきをしばりたい」(二十六)
- かノ部
- 香りゆかしきつぼみの梅もやがて開けば散る浮世
 - 顔やすがたは写真にとれどとれぬ二人が胸のうち
 - 可愛お方の来る夜は知れるしめたしごきが空どける
 - 蚊帳で首尾さす雷さまは出雲のかたから成て来る
 - 掛る無尺は簷末にやならぬ当りや彼の子の身請金
 - 壁に耳あり徳利に口よちよくと話しも出来はせぬ
 - 影見たばかりで心で賞て居たなら苦勞はせぬ者を
 - 通ふ千鳥のこゝろも知らずぬしはじらして淡路嶋
 - 門の鳴子の夜風にゆれて若や主かと胸さわぎ

- 堅義の妾しをそうぢらすなら今に焦れて石になる」(二十七)
 - 顔は見たいし見りや恥かしい扇一重が立田川
 - 通ふなはての松風よりも身にしみ渡るはあけの鐘
 - 風のまにまに靡いちや居れど主はうごかぬいと柳
 - 髪はきつても二世まで掛た深い縁しはきるものか
 - かゝる事とは妾や白狐主は手管の釣上手
 - 神代このかた変らぬものは水のながれと恋のみち
 - 鏡に向ひて顛撫でまはし我身ひとりいでいゝをとこ
 - 可愛がられて又責られて今じや手いけの夏のきく
 - 顔に桜をオンノリ出てソナナ貴郎と云つたぎり
 - 傘の骨にからんで降る春雨はどうせ花散る廓通ひ
 - 金の重みがあるのかとこひの深みへはまる客」(二十八)
 - かへる風して羽織を着ればとめる風してペロリ舌
 - 傘の骨の数ほど男はあれどひろげて指のは主一人
 - 影もかたちもきゆれば元の水とさとるぞ雪だるま
 - 隠すこゝろは無やうなれど隔があるぞへがらす窓
- よノ部
- 夜半の手枕つい其まゝにさめてぼんやり主のゆめ
 - 他所で解とは露白糸でくけた博多の男帯
 - 寄と障るとお米のうはさ頓てはつくせう為である
 - 宵は騒ぎに紛れて居れど闌りや気になる明の鐘
 - 欲で馴染だ身が恥しい斯して意気地を立て見りや
 - 寄る屋根船もやひの綱も結び止たる縁のはし」(二十九)
 - 夜毎つれないぬしゆゑ妾しや双べる枕に恥かしい
 - 他所で陽気な三味線聞ば陰気な小言聞く
 - 宵の口舌に夜中のてくだ雪もつもるかこひのやま
 - 読だ手紙が一々胸にきくはづ其の字は釘の折
 - 善悪いふなら言せておきな頓て奇麗にかへすあだ
 - 横に出て来る那の蟹でさへ蔑とあしとを分て来る
 - 甲夜にや粘着乙夜に凝集明りや分解するわいな

- 宵から苦勞しやうしやう情夫を笑わしや鴉が鳴渡る
 - 夜昼思ひを妾やかけ時計ドンと逢なきや気が済ぬ
 - 夜明まへまでさす手枕にしびり切らして言ふ無心
 - よせと云はれりやまた猶更に折て見たいよ花の枝」(三十)
 - 止てお呉と払ツた其の手いつか枕の下に入る
 - 宵の口舌に無理いひ過て今朝の別れが気にかゝる
 - 夜なべ朝おき人あいさうを好すりや舞込む福の神
 - 余所に小松の曳手が出来て内へねの日のない怨鬱
 - 善悪は定めがたいが何処から見てもホンに程よき那のお方
 - 好もつけたに名を紙入と真にあるのは反古ばかり
 - 読だ手紙が一々むねにきくはづその字は釘のをれ
 - 宵は待たせてしんじの月の更てさしこむゝねの癩
- たノ部
- 互ひに独身なにはゞかろう晴て夫婦になるがよい
 - 竹を書たる屏風のうらは慥か中好い雀がた」(三十一)
 - 誑すきつねを誑してやると誑しに罹つて誑された
 - たてる屏風へ二人が帯を掛りやうれしや子持すぢ
 - 抱たばかりで別れて仕舞ひべた未練が手にのこる
 - 達者な芸妓も及ばぬはづよをどり上手な座頭がね
 - 煙草は尽るし火の気は失る来るかづかれの泣寝入
 - 只た二ツの笑窪にはまり今ぢや諸方に穴だらけ
 - たゝむ夜具から枕が二個飛だ始末をつい見られ
 - たもと豊に大門入れどかへりはひき馬あをいかほ
 - 玉子守りは転ばぬ用意転ばす奇特は多びす紙
 - 便り待のにまた川支へアゝもじれつたい五月あめ
 - 達磨仕立のあの洋服じやおあしが有とは思へない」(三十二)
 - 偶に來のに主やつんつんとすげ無仕方が憎らしい
 - たとへ嘘でも切るは不服説得するほど腹が立つ
 - 煙草も印紙を貼上からはわすれ草とは言しやせぬ
 - 誰でも苦説は絶へない者が羽袖濡してくらす鴛鴦

- 便りや電信通ふは蒸気遊歩は合乗じん力しや
- 玉の輿よりわしやみそ漉をさげて苦勞もぬしの側
- 立引さす気でおほ当ちがひ払ひに衣服を剥取られ
- 鯛やひらめの海魚よりも私しやどぜうが口に適ふ
- 大工たのんで鉋でそつと立たうき名をけづりたや
- 誰か来たそで垣根の外で啼た松虫音を止む
- 大胆不敵な世間のをんな断のそばからまたほれる」(三十三)
- 高い山から谷底までもずつと見とほす検査医しや
れノ部
- れんに掛たる短冊読で首尾を占ふ独り言
- れいの時刻と庭口開りや洋犬が尾をふり駈て来る
- 恋慕した迎お金がなけりや自由にやさせない此身体
- 礼儀正しきアノお方さへ恋の話しは寝てなざる
- れんじの外からツイまねかれて逢と思ば人違ひ
- れんじをトントンたゝいて見たがよくも寝たもの若夫婦
- 恋慕するのを明して云へば馬鹿でもお金のある故か
- レンゲで腹きたとへもあるが主は忠義で腹をきる
- れんじにもたれて嘶たことを内のねずみが聞つけた」(三十四)
- 例のこれさと母指を出され天窓かきかき解たなぞ
そノ部
- 袖はひかれず裳はとれずおちかい内にと出す帽子
- 夫と云はれぬ涙を問はれ是で泣たと出す辛子
- 外は奇麗に見えては居てもなかの知れ無あの玉子
- 袖の移香まだ白梅を来てはそよそよ春の風
- 底の分らぬ千尋の海へあだにいはかりはおろされぬ
- 空は晴ても逢なきや曇る義理にへだての硝子窓
- そつと裏から返したけれど履が気になるゆきの朝
- 添ふての苦勞は覚悟だけれど添ぬ先から此の苦勞
- 蕎麦と団子と一度に喰へば柳ぎに蹴鞠の糞が出る」(三十五)
- 算盤玉にもかゝらぬ金を二一天作して通ふ

- 袖になみだの露おき初て思ひます穂のはなすゝき
- 空に晴衣小袖も遂に蝶ものがけの出養生
- 然してかうしてかうて而して身代限りはむねにある
- そつと妻戸の透間をもれて閨にさしこむ夜半の月
- 底の見へ透あゝの薄こほりとけた様でもあるへだて
- 袖に移りし此の梅ヶ香は東風の便りか今朝の春
- 其処に居るかと搜つて見れば枕屏風の影ばかり
- そめた浅黄がこい茶となつて末は手織の子持じま
- 算盤持すに積りし口説割る思ひで踏に来る
- 相談づくなら遠ざ可が問ひ音信はしてお呉」(三十六)
- つノ部
- 月日は矢ばせにたち安けれど主の帰帆はまち遠い
- 月を吝んで夜は更しても日には目のない朝寝坊
- 尽す辛苦のまことが見えてやつと泥からさく菖蒲
- 露にや夜毎にシツポリ濡て風にや邪見な女郎花
- 罪なひとだよ彼の花売は色でおきやくを迷はせる
- 月夜がらすと物言ふ花は空啼よするたび迷はせる
- ツンと澄して反身になれど永く続かぬ主の側
- 月夜がらすと止ては見たが嘘のつけない明のかね
- 造り上手でさかせたよりもいつそ野末のみだれ咲
- 積る怨を心に止てお楽しみだと云つたぎり」(三十七)
- 序があるからゆふべの傘を何所へ返すと粹にやき
- 唾をつけつけ毛をなであげてグツト突込む筆のさや
- つもる話に終うかうかと明して苦勞の今朝の首尾
- 尽ぬ話しに限ある夜を鳥怨むは此方が無理
- 月落からすが鳴うと儘に帰しやせぬぞへ今朝の霜
- 月にてらされあたりを兼ねはなればなれの二人連
- つらいお客や主人の気づる取もおまへの為ばかり
- つらいつとめを私しにさせてあるふ事かよ色狂ひ
- 露のなさを只楽しんで恋の闇路をとぶほたる

- 妻恋稲荷にねがをか主の虫の居どころ宜いやうに
- 辛さ忍んで涙の顔を主にかへして笑ひなき」(三十八)
- つらいひと目の函谷関は鶏の空音じやこえられぬ
- 妻子の有のを承知で惚て末にや手ぎれと出る積り
- 月はやさしく寢床へさすに遅いおまへの面にくさ
- 柘の櫛にはかゝらぬかみも人の口には戸がたゝぬ
- ねノ部
- 猫や狐は底ぬけ徳利つぎこみやつぎこむ程足らぬ
- 寝てなど苦勞を忘よとなれば主が浮気な夢ばかり
- ねづみ鳴するこゑ怪しみて障子のぞけば転びねこ
- 寝たり起たり起たり寝たり一人寝る夜のいじらしさ
- 猫と髭とはななかいはず猫髯自賞と文字に書く
- 根のない事にも枝葉をつけて口説の種をば造り花」(三十九)
- 寝ざめ詫しき此の暁の雁の便りもそらだのめ
- 願ふの何のと少しの借を文のあとからまたもふみ
- 寝てはかんがへ起ては思案しても伴の気がしれぬ
- 女房もちとは知ての事よ惚るに加減がなるものか
- 猫と成たり狐となつて飽までのろまを喰たはず
- 寝間は気軽く別たけれど着る羽織の手の重さ
- 寝ても起ても立ても居ても歩行時にもぬしのこと
- 寝る間もないほどオ、忙しや金の勘定で肩がはる
- 願ひとゞいてヤレ嬉しやと思やおまへのまた水性
- 寝ては考へ起ては塞ぎホンニ苦勞は金ばかり
- 猫転べ転べと云はんすけれど妾の心は多ん次第」(四十)
- 寝ればつんつんすはれば無心立ば後ろで舌を出し
- ねしづまる比徐々這て本望とげたで中と鳴く
- 鼠穴より牝猫の穴か庫の為めには無用心
- なノ部
- 何歟を為るほど勉強すれば何歟がたつほど蔵が建
- 涙ながらに待夜の蚊屋に月もくもらす胸の中

- 鯨だまして権妻となれどまたも地震でもとのねこ
- 名残を呑んで返した後の閨房の伽する初蛙
- 涙でまことの化粧がはげりや咄た嘘まで禿て来る
- 長い着物を短く着ても心で錦の綾を取る
- 泣て別れしなみだを隠し笑ふ初会のきやく座しき」(四十一)
- 泣な此方よ向け疑ひ晴れた惚たが因果で無理もいふ
- 何時なりとも引して遣ると風の神めがぬしゝをる
- ならば出雲へ銀行立て色の為換がして欲しい
- なまじ声をば聞かせておいて思はせぶりだよ子規
- なまじ写真にうつらぬ顔が思ひ切気のためとなる
- 泣々送つて戻つた寢室に残るぬくみで又未れん
- なみに揺るゝ彼の月影ははなれながらも円くなる
- 鳴す半鐘で不図眼を覚し主は妾に出をかける
- 男女同権きゝまちがへてぬしも越後かわたくしも
- 泣てだますが稼業のやうに云はんすお方は先が無理
- 内所の異見を横そつ方に聞て意気地を私やたてる」(四十二)
- 鍋釜茶釜に摺鉢れん木区別あれども添とげる
- 内証とおもへにすかした放屁悪事千里のこの放屁
- 鍋に耳ある徳利に口よ猪口とはなしも出来やせぬ
- 啼鹿の声もかれがれ主まつ虫の最ど憐れを添る鐘
- 名残惜しさにまた見にきたよ雨の夕べのはなの顔
- 泣にや泣れず飛では往ず心すみ画のほとゝぎす
- 長いお髻にみじかいお智恵高い帽子にひくいはな
- らノ部
- 廊下ばたばた障子をがらりオヤとにつこり笑ひ顔
- 雷の光りで逃込む蚊帳の中で取れた臍の下
- 楽は好ぬ苦勞わ承知シカシ浮名をやめしやんせ」(四十三)
- 羅生門より三十日はこわひ鬼が金札取に来る
- 洋燈明りを出雲の神が粹を聞せて風で消
- ランプ頭と誹らば謗れ己が居なけりや家が闇

- 乱暴さんすなお役で居て若も公たら居さうろう
- 楽なよふでも私とお主つとめと言字がまた消ぬ
- 楽も一処はありそな物よこれも苦勞が続のか
- 乱暴しやんすな隣や近所詫を云ふのは妾ばかり

むノ部

- むしも殺さぬ顔つきなれど無心言ふときや鉄面皮
 - 胸のほむらに硝酸かけて見なけりや分らぬ主の色
 - 梅の薫りは寢屋まで通ふ人なら浮名が立である」(四十四)
 - 無理を言のが妾しが無理か無理を云せる主が無理
 - 麦の青葉も背丈がのびて色気ついたが穂にみゆる
 - 結ぶ出雲の此のかみ写し妾しや一生のまもり神
 - 胸のつかえにや宝丹よりも主の顔見りや気が晴る
 - 室の梅さへ開けば香るかかす恋路も人が知る
 - 無理を通したおまへの疳を耐へて妾しの癩となる
 - 胸に燃たつ思ひの火をば落す涙だけでけすつらさ
 - 向ふ見ずでも主より外に他所を見る眼は妾や持ぬ
 - 旨いお世辞をいふ便だからわたしや半句も電信機
 - 胸にわきたつ蒸気をぬしのおそひ車にしかけたい
 - 無理な首尾して逢ふのが花よ八重も一重の思して」(四十五)
 - 胸に手を当て思案をすれば仇な人ほど実がない
 - 胸をさすつて我慢をすれど凶に乗御前の得手勝手
 - 向ひ酒なら一合でお止しトハ云へ飲せざすねるだろ
 - 梅と桜を両手に持て外にます花あるものか
 - 胸が曇ればこずえを払ふ風もあめかとおもふ夜半
 - 無理な口説に泣せて置いて寝とはあんまり虫が宜い
- うノ部
- 鶯に負ぬ色音がたまさかあれば谷の奥にも梅が咲
 - 浮た同士といわるゝ筈だ涼みぶねから出来たなか
 - 浮名の立のは矢よりも早い切れた噂は誰もせぬ
 - 旨い調子に持込やがると思へばうす気味悪くなる」(四十六)

- 梅やさくらは当坐の眺め何ふでも山吹いろがよい
 - 内に居る時雷り聞て外で陽気な線香焚く
 - 浮名たてられいまさら逃りや名譽回ふく出訴する
 - うぬばれ鏡でかほ見たびにほれぬ女の気がしれぬ
 - 旨い世界にチンチン鴨の好たすき焼さし向ひ
 - 嬉し可愛い昼寝の夢がエ、モ邪魔した手のしびれ
 - 歌も唄はずおしやくも為ずに花を灌ていゝし地蔵
 - 動けないほど年季と尻て借を背負ても気はかるい
 - 裏をかへしたおきやくの羽織や鼠海黄で猫が好く
 - 薄い濃ある浮気のこととは三角玻璃でもわけられぬ
 - 梅のにほひを桜にこめて枝垂やなぎにさかせたい」(四十七)
 - うその中からまことの事を言せて見たさのこの苦勞
 - 嘘がありやこそまことが分る杯と言ては嘘をつく
 - うまく郵便詐かならべ亦もよこした無心じやう
 - うれしい鳥影障子を明りや恨んだ鳥できはづかし
 - 浮気自由の権あるぬしを手管のいにて捕縛する
 - 嬉しい首尾した其明る日は仕事出しても手に附ぬ
 - 鶯待木にからすがとまり当のちがつた今朝の首尾
 - 運動はよけれど今日びは止な米の高いのに腹が減
 - 虚言を筑摩の鍋ではないが重なる思ひにます苦勞
 - 虚言の涙で身は洗つても泥のにぢみは取れやせぬ
- みノ部」(四十八)
- 異見大きく程なほさら募りおもひきられぬ恋の意地
 - 忌みはなれた小意気な年増一寸ごらんよ此写しん
 - 意見聞くとび身をもち直し花も浮気な枝を折る
 - 井戸のかわずと譏らばそれれ花も散りこむ月も見る
 - 寧ろ自体もてがみにふうじ人目の関所を通したい
 - 異見するとはお前の野暮よ義理も世間もある物か
 - 異見聞つゝ壘へ指で好きの頭字書て居る
 - 異見するほど尚ほやけ酒を飲で困らす主のくせ

●みやなお髯のアノ深切が間夫の浮気と替りやよい
●言はず語らず語らず言はず実と実とのみ仕あひ
のノ部」(四十九)

- 載てもちやげて腰動して旦那いきます人力車
- 飲ぬさきから顔あからめて一寸あなたと思ひざし
- 望むお前に振棄られて外に望みのないわたし
- のろい女と笑ば笑へ人は妾しをねたむのだ
- のぼる日影もゆたかな空にけぶる柳のなかづゝみ
- 野辺の尾花に手招きよされて月は顔だすちぎれ雲
- 登りつめたる階子に代て煎じつめたる此の世帯
- 乗て世渡るわたしの船へさしておくれよ主のさを
- 惚けて衆人になぶられながら思はずゑつぽに入る妾
- 蕩気どころか今日此ごろは息が通つて居るばかり
- 惚けじまいのモー惚けじまいドンナお方も手にや附ぬ」(五十)
- 蚤が虱となつてもどうぞ食て見たいよぬしの肌
- のろい女と笑ば笑へ人は妾しをねたむのだ
- 檐に釣れた妾や風鈴よ鳴もならぬもかせ次第
- 上る日影もゆたかな空にけぶる柳のなが堤

おノ部

- 岡ぼれしてさへ浮名が立に恋じや出るはず新聞紙
- おもひ初めたも濃紫ようすい浅黄ぢや覚やせぬ
- お互に扣めにすりや端しが付ぬト云て云出す折がない
- おか焼するのか月夜の烏あけもせぬのに憎らしい
- 斧をのがれて今年のはるも人に見らるゝやま桜
- 逢て居てさへとゞかぬ言葉文にかゝれる筈がない」(五十二)
- おしき筆止めまづあらあらと用事許りに候かしく
- お顔見ながら話しも出来ぬ玻璃障子の内と外
- 思ひ思はれ思はれ思ひ思ふた同士でまたおもひ
- おもふ人筋とけないゆゑに愁ひみすじの家業する
- お顔皆鶴それから先は色よい返事を菊ばたけ

- 思ひきります諦めますと詫るあとから出るのろけ
- 折々亭主がお世話になると遠火で焦さぬやき上手
- 思ふばかりで言出しかねる何卒先からいへば宜い
- お前に見せよと結たる髪を夜中に乱すも亦お前
- 朧月夜に人目を忍び雁も北へとソツと行く
- 親も得心せけんもはれてもしと呼ぶのはいつの事」(五十二)
- およばぬ恋路と諦めながら蟻のおもひも天とやら
- 親の裁ばん不服を言はずそしてたてたい主し的情
- 逢ふに玉おり心は須磨の浦にくよくよ松のいろ
- をつちや悪いと気随なひとに降よ止れよはなの雨
- 折つたお園のおぼこの花に疵はお庭の普請小屋
- 思ひ染たる未通女の娘恋にみだれし野崎村
- お髯のもつてる蛭子の紙幣を娘に釣せて取らせ鯛
- 思ひざしだと顔覗せて飲ぬ先からポツとする

くノ部

- 花街通ひと士族の商法摺て仕舞はにや眼がさめぬ
- 櫛は縁きりかんざしや遺物指環は当座の縁繋ぎ」(五十三)
- 愚痴がこぼるゝおもはず知ず堪へ袋のきれめから
- 口でけなしてこゝろで惚て人目しので見る写真
- 口にや一筋心にや三筋つらい調子を合す三味
- 化学術でも分析出来ぬゝしとわたしの親和りき
- くもるこゝろもいつしか晴て親に明した妹背中
- 来るか来るかと待せて置いて外へそれたか夏の雨
- 口を開いて笑つて見せて手を出しや針ある栗の毬
- 口のくるまをお客に乗せて恋の重荷を間夫が引
- 苦勞黒縹子とけたる帯をむすびなをして権の妻
- 国のためだと夜なべを過しや牛の乳屋の為になる
- 愚痴も言ふまい嫉妬も為まい人の好く人持果ほう」(五十四)
- 口にや湯水に遣ふと出てほんに出すのは舌もいや
- 櫛をさしたり白粉したり然しておきやくを釣し柿

● 暗い妾しと知りつゝ先が夜網打込む面悪さ

● 口に安宅の関所はないが弁慶めかして法螺を吹く

● 汲みつ汲まれつ互ひの胸を結んで嬉しひ四手あみ

● 口説つゝばね互ひに空寝無言と無言のこんくらべ

● 雲に入る月の油断をコツソリ忍び檐端つたふて来る螢

● 雲と泥とのへだてはあれど猫も官吏も身のつとめ

● 暗いところにする営業は写真師ぢごくに賊よたか

● 苦界のがれし身はつりがねよ君ち撞れて権となる

● くれの六時は待わびたれどあけの六時はさて早い」(五十五)

● 糞を食へと怒つたはてにもみだす訴訟は区さい判
やノ部

● やみとお前に斯う入上て末は如何せう格子さき

● 夜学夜学と勉強やうするは人の教へぬいろの文字

● 野暮なおきやくに限つてあるは金と情氣と床急ぎ

● 洋服姿は似て居るけれど能見りや袖ない検査医者

● 山家そだちの私の身でも粹と云はれた初密柑

● 陽気浮気するこひならば是ほど辛苦をする者か

● 焼は又かと小言を云はれ焼なきや妾の氣がすまぬ

● 櫓太鼓にふと目をさまし明日はどの手で投てやろ

● 八重の山吹はではさげど末は実のない事ばかり」(五十六)

● 止そに見へても止ない物はぬしの浮氣とつゆの雨

● やつれた姿も何処やら床したしか粹者の果だらふ

● 薬罐天窓の恍話をきけばほんにお臍が茶をわかす

● やさしい育ちの私だけれど彼婦故だよ腕車ひく

● 野暮なをとこは元より承知金のないには二度胸り

● 八釜しいなら静かにおしなお前が黙れば妾も止す

● 様子きかねば御腹もたとが是にやだんだん深い訳

● 安目を真に受け鼻毛を伸し代りの出来たも知らないで

● 安い時計と蕩樂むすこ狂ひ易うて手がかゝる

● やつとはふ子と国会議院たてるやうでも未だ立ぬ

● 焼餅らしいが云はねばならぬ毎晩明ては不用心」(五十七)
まノ部

● 儘にならぬと写真を詠め思はず食切るつま楊枝

● 間夫の手紙の書損なひをきやくへ其儘間にあはせ

● 真面目な顔して算盤持ど目前にチラツク廓の花

● 巻紙のへるに付ても我身を思ふ早く年期を明暮に

● 纏ひ附たら離れはしない藤の蔓より紙幣のつる

● まだ帯や解ねど解たる胸を悟つてお呉と目に言せ

● 窓の戸叩いてあの夜嵐が嬉しい夢までよそへやる

● 間夫と二人の相談づくは客をとらかす舌げいこ

● 真面目な顔して算盤持ど目先に散つく廓のはな

● 間夫を夜明に突出す鐘は例日と違つて耳に立つ」(五十八)

● 儘よ儘よで線香たてりや家のくらしがたてかねる

● 松といふ字は中よい筈よ公と木とのさし向ひ

● 儘にそだちし野菊もいまは姿やさしく花ざかり

● 実明せば嘘だといふし明さにや不実と云ふだろう

● 松の様な片意地ものも雪の肌には折やすい

● 儘になるなら襦袢になつてぬしの肌身を守りたい

● 待てど来ぬ夜はかたぶく月に歎ち顔なる我なみだ

● 儘よ儘よが家庫倒し儘にならなくなる身体

● 間夫への盃さとられまいと指て赤らむ氣のとがめ

● 儘になるなら彼様したなりで主の家まで送りたい
迷ふた妾しがガリガリ亡者難面いお前は鬼ごゝろ」(五十九)

● 間夫と逢ふ夜に恨んだ鐘を髯と寝た夜は待かねる

● まゝになるなりや野に住小蝶草にねるより女夫連

● まつて居たのに彼まア否な格子までとは憎らしい

● 廻し屏風のをし鳥詠めひとり寝るならうちに寝る

けノ部

● 権利権利と云しやんすれど妾にや其様な義務はない

● 芸妓する身と画工の皿はひとの知らない色がある

- 化粧したのでフト見違へる雪のあしたの桃さくら
- 今日もけうとて噂をしたよなどゝ手管の口ぐるま
- 芸妓する身と金側時計何時かお髯の襟に付く
- 今日から気儘な世帯とおもや飯にならない水加減」(六十)
- 化粧する気はまだ水臭い上べばかりで惚はせぬ
- 今日は強てと工んで見たが顔見りや思はず笑い凹
- 消した妾の此の刺繍は主の名前を入れる為め
- 顕微鏡でも見へない物は明日の相場とぬしのむね
- 権利の義務のと云んすけれど色は議論ちや出来はせぬ
- けちとぢやすいのこ(しんにう)かけてやぼといやみのへん冠
- 芸を達者に名を売よりも豆売や身いりのいゝ時節
- 下駄の齒形に未練を残すつらい別れの雪の朝
- 今日は顔をば見に来たばかり痴話や苦説は翌の晩
- けふか明日かの可愛い中も淵が瀬となる世の習ひ
- 今日こそ日頃の願ひが叶ひ世間晴ての夫婦中」(六十二)
- 芸者止ても又権妻で苦勞するのち主の為め
- 兄弟と知らで契つた二人の中は人にも云れぬ腐れ縁
- ふノ部
- 吹けよ川風うかれて居れど下は地獄のふなあそび
- 文じやわからぬ心の丈を寝物がたりにして見たい
- 富士のたかねにふるのも雪よしづの檐端の雪も雪
- 文明開化の御代にはなれどやはり苦勞はもとの儘
- 二人コツソリ咄しの中を闇にして行く火取り虫
- ふとした彼子の島田に浮今じや不義理も大井川
- フツト写し鏡みの内へ止ておきたい主の顔
- 深い奥底あけても主はあみを卸してひく心」(六十二)
- 古釘見たよなふみをば書てぬしの浮気を打つ積り
- 二人手を取り人目をしのび萩の声にも気をくばり
- ふみも寄算人目をかねて一寸目つきのかけ合せ
- ふんと匂はす彼の紅梅に濡れる初音のうぐひす茶

- 富士の山ほど苦勞をするが元は一夜の出来心
- 船のもやいもいつ解そめておまへ次第の流れの身
- 深い思案に暫時のあいだ乗るはなみだの玉のこし
- ふかい浅いのおまへの心どうも測量が出来かねる
- 二人につこり盃洗とつて少ない水をば手にそぐ
- 舟板一まい怖くはないが舌の二まいがおそろしい
- 文明開化に便利なものは汽車に電信活字版」(六十三)
- ふられた証拠にや朝ぼんやりと廓帰りの白痴づら
- 文もこゝろもどゞいて解て今宵結ぶは二世のゑん
- 更て待夜に身にしむものは蕎麦の風りんかは千鳥
- 文の使に忍んで来れば親爺の異見の音がする
- 文明開化の鎖さぬ御代もなぜか恋路にや関がある
- 船に似た様な芸者の勤め楫をとりとり浮すきやく
- こノ部
- 恋の邪魔すりや那の烏さへ可愛と啼ても悪まれる
- こひは曲者油断はならぬいつか紙入までから
- 恋と欲とのふた筋かけてわたしや三筋を弾く家業
- 恋の会議を出雲で開き鐘とからすが廃し度」(六十四)
- 恋のころものほころび口を母の異見の仕つけばり
- こゝろの曇りが昨宵の夢に晴れて嬉しき今朝の雪
- こゑはすれども姿は見えぬ二疋ならんだ馬車の馬
- こひの山路に墜道ひらきひとにいらさず通ひたい
- 恋の重荷をくるまに乘せて胸が火をたく陸蒸気
- 恋し恋しがやまひと成りて余所の人かと見る写真
- 斯なりや遠慮が何あるものか門札かけたる晴た中
- こんも命もつゞかぬ程なけつく苦勞がうさはらし
- 是さ徳利しあんをしなよ猪口とは済ないこの葛藤
- 是で妾へ妾がほれたナゾと鏡台かたづけける
- こひにみだした嶋田の鬚をといて仇名を洗ひがみ」(六十五)
- 故園の有様今若何ぞやと言ふて学費をまつて居る

●氷より堅い心の妾ぢやけれど主の手管に解される
●今夜お出と言葉の畏にかけておきやくを釣きつね
●心の誠をすかして見せて解ける氷の夏の夜半
●小鳥の名に似た娼妓の箏箏あけて見さんせ四十雀
●怖畏ものだよおぼえて置な地震債客りか、おやぢ
●こゝろの底からさも実らしく嘘じや無よと嘘を吐
●恋をするなど親達や言が妾しやどうして生れたか
●恋のいろはを卒業すれば夫からちりぬる親の金
●心で掛合目の越気でも金気がなくなりや通じ無い
えノ部」(六十六)

●縁は異なもの網代の堀にからむ小鳥のつまきどり
●易を見たらばお前は浮気妾や出雲へ暴れ込む
●縁のこよりを出雲のたなで万一や鼠がひいたのか
●エ、此様になつたと嶋田を撫て後は能く見ぬ主の顔
●遠慮するのは始めの中よ惚りや互ひに喧嘩する
●酔て寝たをれ引をこされて遺憾さわまる朝がへり
●縁を切火も焼ボツくひに又も燃つくほくち箱
●越中ぶらさげ越前出して這ひすがたは越後獅子
●縁を結んで毛糸の網の手内職さへぬしの為め
●縁きり榎を根こぎにもつて惚や奴らをぶつばらふ
●縁があるなら幾度もお出があるなら居統を」(六十七)
●縁の綱手をあひのり車楫は権妻口でとる
●回向するとして仏の前へ二人向いて小鍋だて
●海老で鯛つるア昔しの事よいまじや狐が鯨つる
●笑顔つくらふ花をば棄てゝ悪やすげなく帰る雁
てノ部
●蝶は番で何時でもまふが来るも帰るも私しや独り
●手管の綱とはツイ白魚の罹る憂さは恋の綱
●出逢がしらの額とひたへ逢たかつたと目になみだ
●手まくらさしさい顔見合てエ、もにくらし明の鐘

●照すこゝろで居るのがにくい硝子障子のまどの月
●敵の寝いきをこつそり聞てそつと窺ふ蚊屋のしろ」(六十八)
●手枕さしかへ顔見あはせてあと行司のなる角力
●出先問はれてツイ口籠り散歩とばかりは云ひ兼る
●手鍋提ても添はねばならぬと言お方は主じやない
●手持不沙汰で去した訳は繁き人目の別へだて
●鉄道器械に電信日より負ず劣らぬ国の益
●出来た昔を考がへ見ればいやに成れた義理はない
●手前勝手の我まゝ云ふも好た同士の夫婦なか
●鉄砲放そかふんどしよ買か兎に角せがれで為苦勞
●亭主と人目の関所がなけりや晴て浮気が出来るだろ
あノ部

●赤いきれをば冠つて化て客を喰ふ気で居るきつね」(六十九)
●逢はば斯まで嬉しい者を何んの異見が耳に入
●あへば互にたゞぼふぜんとはなし残してあとくやみ
●あだなつめ弾三筋のいとに引かれて私しは水調子
●逢ふた初めに其捨言葉聞ば苦勞もせまい物
●有そな様でも無のはお金無さそに見えても有気兼
●雨の降夜も通ひはすれだたゞの一度もぬれはせぬ
●青い目鏡は伊達には持たぬさがつた目尻の予防法
●合ぬ歯の根を心にしめて忍び逢ふ夜の庭づたひ
●あだな眼元で愷気とじつを七分三分にゝまれる
●アレサじれつたい抜たぢやないか早くおはめよ坊の足袋」(七十)
●あいと返辞をする緋鹿子のえりへ摺込むあかい顔
●逢は互ひに泪の種と思へど逢はずにや居られない
●油揚をばへた喰こんで苦説の神薬にわたしやする
●逢ふと思へば又引分れ乾く間もなきはね釣瓶
●アレサお止よ夫や鑑札だ見られちや隠た年がむだ
●逢にや恨むし逢や又すねて絶ぬ苦勞もこひのくせ
●逢で心を妾や古傘に骨も見へすく恋病ひ

- 逢ふか逢ぬか逢ぬか逢ふか逢てうれしいゑんむすび
- 逢て嬉しき笑ひもいつか朝はなみだのたねとなる
- 行燈引よせ煙管を伸しアレサお止よ火が消る
- 秋の木葉のみなちる中で松のみさをはよくしれる」(七十二)
- 逢ふて居てさへ届かぬ言葉文で書れるはづがない
- あだと浮気のあい乗ぐるま引れて恋路の暗をゆく
- さノ部
- さきへ咄しの道さへつけば無理には止ない雪の朝
- さけのみ鯛あそびもし鯛金もためたいじれつたい
- 寒さ凌げぬあばらやながら酔て眠ればたまのど
- 驚か鳥か明らぬうちに春の小鳥がやかましい
- 三弦の駒にひかれてつひ浮々と泥にすみ込む大鯰
- 三世因果の道理でくどき二世のちぎりを為る和尚
- 三度の食事は二度でも宜いよ主と一所に暮すなら
- 座しき相場をくるはず猫は一寸二を上げ三を下げ」(七十二)
- さえた月影あれ憎らしい気障な雲めが来てかくす
- 酒に云はせた心のたけを受けてこぼすは情ない
- 五月雨の一夜密に格子の先で見れば嬉しい月の顔
- さすが代言権理をのべて義務をはたせと床のぼん
- サツト漣み立つ鴛鴦のちらす水面の月のかげ
- 賽の河原とぬし待つ夜半はこひしこひしが山をなす
- 三年男をたつたと云へば寝てする事には構やせぬ
- 座敷の仁義に火鉢の義理で飲度酒まで辞義をする
- 先は住吉此身は住ぬ夫に浮名が高燈籠
- 境ひ論なるそのさかづきを藤八ア県にて裁ばんし
- 座敷仕舞て気儘な酒は脱だ着替の皺伸し」(七十二)
- 際しりする鈍馬な野郎しりの締りも無いくせに
- 酒は飲遂浮気はし遂儘に長生し遂たい
- 先で思わぬこひ路にまよひ一人で二人の苦勞為る
- 三千世界のからすを殺し然して朝寝がして見たい

- 酒に相かぎ心の錠を開ひてお金の封をきる
- 誘ふ春風こほりは解て嬉しや気まゝにひらく
- きノ部
- きみは吉野の千本ざくら色香はよけれどきが多い
- 切手と言字は気掛りなれど端書へ白地にや書れ無
- 狐出て行く狸はのこるのこるたぬきは夜具のぼん
- 屹度ざますよと時計を質に取られて茫然あさ帰り」(七十四)
- 客を送つてれんじに持たれ見やる名残りの空泪
- 義務が立ぬの世間があるの何の彼のとてよく逃る
- 君よ近ごろ失敬ながらうは気はわるいとす説論
- 起証誓詞を活字ですらせ宛名と月日をあげておく
- 胡瓜きられた身のなり果はたよる手蔓も切てなし
- 義理も大切世間も大事など言やがった畜生め
- 義理といふ字がない物ならば借は貰つた気で暮す
- 清盛さんとは昼夜の違ひ明る夜惜いととどめたい
- 金貨出る出、紙幣はのこるのこる紙幣がやせのたね
- 京も田舎も支那西洋もよわみのあるのは惚たほう
- 金銀なくなり飛車たが無と香車も頭まを角ばかり」(七十五)
- 汽車で通へば苦なしに往が矢張をあしが先に立
- さらに議論のたゝないひとを議員に撰むは村会か
- 君は今頃駒下駄はいて声も高尾のそゝりぶし
- 来て居りや眠れず来なけりや狸どうで今夜は現責
- 義理も糸瓜も人目も儘よ川といふ字で寝て見度い
- 黄でも白でも張紙やいやよ身代がきりにコレラ病
- 灸も薬もなにきくものかわたしや逢たひ此やまひ
- 君の住家はいづれの所なぞとそまそれ借り支たく
- さいた異見は煙りにすれどたつた浮名で胸こがす
- 君に粟津のないつれ恋路妾しや堅田のかたおもひ
- ゆノ部」(七十六)
- 夢のようだと膝すり寄せて話そとおもへば覺る夢

- 夢でも可から持たたいものは金のなる木とよい女房
- 雪の夜寒に待くたびれて主とおもふて抱くこたつ
- 指を切ふと云ふたは手管貨幣が無なりや手を切る
- 夕べ私しを点した客を今朝見りや無残や洋燈部屋
- 夢なれば醒てくれるなしばしの間だ醒て逢れぬ身では無
- 夢で嬉しく逢ふ時さへも恋の邪魔するあけのかね
- ゆき丈そろへて何時着られやう今は下着の隠しづま
- ゆき逢ふ車で見あはず顔はときに取つての妹背山
- 指を切らふとした髪そりを今日は嬉しうそる眉毛
- 指切や疼かる髪きり註違何為やまことが立だらう」(七十七)
- 夕べ結んだ此の揚巻も今朝は口説のもつれ髪
- 雪の夜寒に待草臥て主と思ふて抱こたつ
- 夕べは持たと振れた客が自分でつめた瘧を見せ
- 夢で成りとも鍊漿つけてぬしと相乗りして見たい
- 雪を被つて寝て居る笹を来ては雀がゆり起す
- 雪も氷も解けそな世辞は水屋の姉いのみまくち
- 雪の寒苦をやうやうしのぎ梅もはなさく春に逢ふ
- 行にや行かれず行かずや置けずと云て行のも変なもの
- 夕日に照され時雨に降られす多は錦をきるもみじ
- 雪の夕に嘶がつもり首尾の日和で解て逢ふ
- 雪を見るには便利だけれど人目にや否だよ硝子窓」(七十八)
- 雪の中でも梅さへ開くお前も時節をまたしやんせ
- 雪の肌をばちらりと見せて解やすいぞへ繻子の帯
- 夢のゝろけを旦那に知れてうつゝ半分にくく小言
- めノ部
- 回るゑんかな車の私挽にや引れぬ此因果
- 眼でしらせ腮で請けたる昔に換て鼻で扱ふ今の様
- 回る地球にさて住ながら回り兼たる智恵と貨幣
- 目に立疲れとすがつた肩におもはず二人が見る鏡
- 目附で知らせて悟れと云へば悟つて居ながら知らぬ顔

- めぐる地球にいかりを舌し暫時とめたき今朝の雪
- 牝鹿雄鹿のそのなかなかは立た角をもおる小鹿」(七十九)
- 目出度坐敷で桜の色を顔に散らして蝶の酌
- 目と目で便りを届かせ置てあごとあごとで請こたへ
- 妾と云ふ字を分析すれば女立とわ言である
- みの部
- 民権論者のなみだがたまりや頓て自由の淵となる
- 水をさしても恋には渋い二人は濃茶のなからしい
- 身一ツなれども写真でお顔見れば其日の憂晴
- 三すぢ弾よりお髻を曳てはやく乗りたい玉のこし
- 晦日に月見時節だけれど女郎の誠にや未だ遇ぬ
- 店にや親指奥には小指そとにや人指しゆびが居る
- 水瓶見たよな娼妓のお尻抱たひ懐中がひえて来る」(八十)
- 水に被よが火に燻らりよが儘よ飽迄色擬
- みさを立ぬく貞女でさへも蚊帳へひきこむ窓の月
- 道は開ける蒸気は出来るいとも便利の新日本
- みづも漏さぬ中とは見へぬ紙幣が結んだ薄いゑん
- 水掛論でもしなけりや胸に燃る思ひを消しかねる
- 乱れ髪見りや辛苦が増よ心もつれが有ふかと
- 見捨しやんすな行末までもなどゝ写真へひとり言
- 外飾も行義も構はぬほどにぢれて猶さら深くなる
- 未練ものだとお前は云へど切るつもりで惚はせぬ
- 店も土蔵もつい倒されるキヤリくずしのあだ調子
- 見まいと思へどついお互に顔見合わくしては知らぬ顔」(八十一)
- 水になるのは元より覚悟私しや囀の室氷
- 三井の鐘より三井のお金くれりやはたしも権と鳴
- みゝに口寄せ私語痴話に笑顔でかぶりを立にふる
- 三筋でだんなの気を引く猫は権妻姿の本調子
- 晦日に月見る時節だけれど娼妓の誠にやまだ遇ぬ
- 水をさゝれし氷でさへも今じや思を口移し

●外聞も飾りも何いるものかしんから惚合好た同士
しノ部

●癩のむしさへおまへに惚て逢ぬその夜は起り出す
●しのぶ足もとちんばの下駄を踏たは逢ない辻占か
●死ぬの生るの咄しの半途呑込あくびに出るなみだ」(八十二)

●実つと誠の種さへ蒔けばはなれまいとの花がさく
●しのぶ間もなくはや東雲をつぐる鳥のなきわかれ
●心実見えたるお方と思や今となつては水のあは
●巡査も殆々説論に困じクヤクヤなんぢを如何に仙

●鹿の啼く音になびかぬ紅葉君に操を立田川
●真の夜中に不図目をさましや隣り座しきは小鍋立
●自由自まゝの太平楽もうらむまいぞへ貨幣のわざ
●じれつたい程便りのないは試すこゝろか変つたか

●渋い濃茶の二人がなかも水をさゝれりや薄くなる
●白い黒いのぎろんに黄ばり赤いかほして青いゝき
●獅子に牡丹ははなれぬ者の中を芍薬つらにくさ」(八十三)

●知らぬ振して外目で見れば矢張他目によく知れる
●自主の春風そよそよふけば文明開化のはながさく
●神武このかた千変万化しかるに依然といろのみち
●四本ばしらの火燧のしたでこひの地取のゆび相撲

●自由になるのも束縛するもみんな蛭子のかみの業
●自由世界に不自由の物は貨幣と命と私しの智恵
●初手は請願中たびや受理よす多は共和の夫婦なか
●鹿と咄しも聞かない内に又もお前は気お紅葉

●真にお前はラムネの徳利何為すりやお尻が据るやら
●実を嫌つて不実をすいて儘にならぬもよく出来た
●舌が楯とるアノ口ぐるま乗つて二階へひきあげる」(八十四)

ひノ部
●引たせかゝつた其手を押へぬしの月給はいつ渡る
●ひとの噂にせけんもせまく今の思ひがかくしづま

●髻で官吏が勤まるならば勤めさせたや臍の下
●人は見めよりこゝろと言が私しや夫より金がよい

●膝で知らせて眠尻で消て一坐酔せて後の首尾
●髻とむすんだ情約といて間夫と自由が致て見たい
●一夜の添寝のなさけの露でもまた色ます今朝の露
●膝へ来た児を熟々ながめ切て退けとはどう欲な

●人にや辛くてわたしにばかり甘い女があればよい
●低いはなでもはゞかりながら枕くもらす息が出る」(八十五)

●引くにひかれぬ洋服仕立袖なて別れをするわいな
●人の出世は知れないものよ襤褸も末にはかみとなる
●びくびくさんすなどう成物か立た浮名は消やせぬ
●ひろい世界におまへとわたし狭く楽しむ窓のつき

●日々に新に又日に新なぞと水性の仕あきする
●人にや知れぬ覚悟でいれど自慢で浮れて出る惚け
●貧の病気は医者さんよりも紙の恵比須がよく癒す
●髻にすがつて馬車へは乗れど又も地震で元の猫

●火鉢にもたれて居眠りよすれば薬罐と土瓶の鉢合
●人も誉るし妾しもよいと思つて見とれるぬしの顔」(八十六)

●人の意見もしかねぬ人が人にいはるゝこのしまつ
●人にやそしれど心にや誉て早く身儘にして見たい
●昼は人目を忍んで居れど暮ると密かに来る螢
●左りつまとり穿たる下駄はころぶころぶと音がする

もノ部
●物に明るいひとほど兎角恋路の闇にはまよい込む
●燃る思ひを涙で消して焼ぬふりして待つらさ
●持りや散財振れりややけよどうせ斯成りや空財囊
●持かけられても乗れぬ者は人の女房と口ぐるま
●勿体ないとはツイしりながら無理な願ひの神頼み
●文字の読ない猫社会でも野郎の鼻毛はみんなよむ」(八十七)

- 紅葉ふみわけ妻こう鹿のこゑも淋しい秋のくれ
 - 持た其時や嬉しいけれど持りや持るほど身が持ぬ
 - モジモジしやんすな此様なりや儘よ構ちや居れぬ人の口
 - 若も容でこゝろが知りや孔子は陽虎に似はせまい
 - 持たが病の女郎買遊び天窓はげても止はせぬ
 - 元は野にさく芒もいまは世事にくすぶる炭だはら
 - 燃る思ひは浮名と共に立や蒸氣の抜けぶり」(百九十二)
 - もともと浮気でかう成乍ら浮気するなも能できた
 - 物質の変化は理学で知れどそもわからぬ主の胸
 - 若や夫かと門の戸開りや棒を抱えて立て居る
 - もてないお客と人力ひきは帰る帰ると言ふがくせ」(八十八)
 - 元を糺せば他人と他人洗ひ立すりや主の恥
 - 逢たい見度を停止にさせて苦勞が禁獄すればよい
 - もとは泥水そだちとひとに云れなひやう手すき掛
- せノ部
- 西洋造りはオヤ馬鹿らしい算へる天井の板がない
 - 背中であらぬゆり揚ながら男涙にもらい乳
 - せめて夢でも見やうと思ひ寝れば半鐘でまた起る
 - 背から羽織を着せるに付て叩いた昔しを思ひ出す
 - 拙者此地に用事がないが貴殿見たさにまかり越す
 - 背中そむけて云度事も我慢して寝る其のつらさ
 - せたいかためて苦ぜつの夢が醒て眉毛を撫て見る」(八十九)
 - 是非に今宵は相そめ川に待にまたなく色くらべ
 - 青天白日露ちりほども曇らぬ心が世のかゞみ
- すノ部
- すきにや嫌はれ嫌ひにや好れ今年や苦勞の年廻り
 - 粹な風にはツイ解やすい包むふくさの小むらさき
 - 粹な風情に仇めく二人色香争ふうめごよみ
 - ずゑが何時かと苦勞になるは主のうは氣と諸式高

- 吸つけ煙草の電氣に感じ烟に巻れてあがるきやく
- 酸も甘いも身にありながら色づきや裸になる密柑
- すがたやさしきあのいと柳かほの桜に手もゝみぢ」(九十)
- 末で添ふのを私や松と竹こゝろひとつをしめ飾り
- 少しや自分で憂目をお三輪あんまり浮気が杉酒屋
- 粹なおまへによく仕込れて野暮をさつぱり洗ひ髪
- 姿見せずに啼く一声は恋の暗路の時鳥
- すぐり取出し写真をながめ落るなみだで墨をする
- 炭をつぎつぎ火箸を筆にあつい男のかしら文字
- すかぬお客と添寝の夜は蚊帳の一重も魚の網
- 酸も甘いもよくしるひとは浮世の辛みも嘗てゐる
- 墨とすぐりは仲よいけれど水をさゝれりや薄くなる
- すねて見せたり跳かへしたり知らぬ顔する雪の竹
- 筋を立てれば断ねばならぬ悪ふもつれし風の糸」(九十一)
- 粹か不粹か不粹か粹かかれた目で見ちや分らない
- 好で求めた妾の苦勞助る貴郎がおいとしい
- 好が無理言やこゝろに掛り野暮が無理言や腹が立
- するどい爪をば隠して置て猫撫声とは恐ろしい
- 末をかけたし命もからむどうせまかせた蔦かづら
- すかぬお客の機嫌をとるは実はわたしも主のため
- すてゝこ躍もへラへラ坊もすてゝこへラへラ設ろ
- 文句いりどゝ逸『きはらし 第二篇』『なかよし』とほとんど同じ)
- 恋の欲目かおまへのなりが「賢女「三千世界をたづねても又とあるまい殿ごぶり」業平さんでもかなやせぬ
- またもお株の十八番か「清もと「あじにすねたる松の癖」」すなほに此方を向しやんせ
- 百夜通ふてサテ情なや「しん内明がらす「たとへ此の身はあは雪と共に消るも厭ねど此の世の名ごりに今一度」逢て怨が聞せたい」(九十二)
- 未練らしいが寒くて成ぬ「端うた一中くづし「よつでの垂をおろし

ても又もなきゆく明がらす襟にかぜしむ衣紋坂」見かへる柳も小手まねき

●すねて背中を向ては居たが「富本松かぜ」鳥が唄へば別れがいやで」とほしかねたよ此がまん

●十時の約そくアレ今じぶん「声色」遅くなつたを云立にエ、」懐中時計はなんのため

●嫉妬やくなどいはんすけれど」(九十四)「義太夫おび屋」妾しも女子のはしじやもの」いはいで事がすむものか

●綾や錦にくるまる主が「義太夫阿古屋」昔しの衣々引替へて木綿木綿とおちぶれて」愛想のつきぬが惚た情

●最はやおまへの来る刻限と」歌沢「言つゝ立てれんじ窓障子ほそ目に引明て」のろけながらに待て居た

●主は海外旅行の身ぶん「野崎村」あまり逢たさなつかしさ」どうぞ御無事で帰るやう」(九十五)

●じつと見詰てにつこり笑ひ「義太夫千両幟」向ふ鏡のふた取て写せばうつる顔と顔」わたしの惚たも無理はない

●つひした縁からこゝろを染て「はうた」寝ては夢起ては現まぼろしの」眼先にちらちらぬしのかほ

●人目しので恋路の関を「義太夫梅川」夫は嬉しう御坐んせう去りながら私かとゝさんかゝさんは京の六条じゆずや町」こゝで峠の又苦勞

●親父さんには放逐されて」(九十六)「詞」今戸橋から帰らふか山谷橋から帰らふか」何処へゆかうか思案橋

●十に一ツも真事はないと「清もと」常から主の仇な氣をしつて居ながら女房になつて」百も承知でまたまよふ

●真の話しに心も解て」長唄勸進帳「実に実には是も心得たり人のなさけの盃を」請て飲込む爛さまし

●親とおやとのゆるしを受て「さんば」扱婚礼の吉日は縁を定めの日を撰み」(九十七)「夫じや妻じやといわれたい

●夕辺の夢見が迷ひの種よ「清元主水」しかも桜の初日の夜はでな一

座の其中でツイ岡惚の浮気から」今ぢや一人が身の迫り

●痴話が募りてくぜつのは「中節吉原八景」あらしは晴てひと時雨ぬれて逢夜はねてからさきの」まつた甲斐なきあけがらす

●思ひきつたとおまへの言葉「阿古や」問れしときの其苦しき水責火ぜめは答ふが」(九十八)「返辞するさへなみだ」

●根もない花だと籠略にするな「清元落人」散りても跡の花の中何時か故郷にかへる雁」根がありや再び花が咲く

●雨の夜道も他目をしのび「長うた花車」つまどたゝかば誰ぞともいはであけて霜夜のむつごに」七ツにやうたふ家つ鳥

●主の門まで来は来たものゝ「アダチ」この垣一重が鉄の戸をたゝくにもたゝかれぬ」(九十九)「忍ぶ恋路のじれつたさ

●真の夜中に不図目を覚し「言葉」何か夢でも見たのかへ今時分泣て居る奴があるものか……ダツテ妾は悲しいものを」お前に別れた夢を見た

●文明開化の自由だなどゝ「清もと」男ははだか百貫の掛ねんぶつと向ふ見ず」ふへる浮世にする苦勞

●別れちや見たれどコレ此写真「文字」見ればみる程クツキリト水ぎはの立好男」おもひ出すさへへ癪のたね」(百)

●思案なかばに空とぶ鳥は「常磐津源太」アレ雁がねの女夫づれ」連て逃ろの辻うらか

●ぬしと別れのをのきぬぎぬは「清もと」すがる袂もほころびて色香にほるゝ梅のはなさすがこなたもにくからで」かいるかいるも五六度

●妾が悪けりやあやまりませう「巳唄口舌して」口舌して思はせぶりな空寝入」すねずと此方を向しやんぜ

●おつにからんで持こむ言葉」(百一)「十段目」夕顔だなのこなたより」ぬつくと出たる情夫の兄

●写真手にもちつくづくながめ「十種香」ゑこうせうとてお容を」是が紀念とひとしづく

●惚た惚たと口さきばかり「清もと」世辞でまるめて浮気でこねて小

町桜の詠めにあかぬ彼奴にうつかり眉毛をよまれ」 またも其手でだますのか

●人目多けりや顔見るばかり「義太夫妹背山「かんじんの寝るときは離れ離れの床の中」(百二)」 手も握らず色目もつかはず何する事なほ出来ぬ

●ぬしは民情視察のおやく「千両幟「江戸長崎や国々へゆかしやんすりや其跡で留守はなほさら女気の独くよくよ物あんじ」かわる人情に成りやせぬか

●恋の諸わけも知らない二人「清元おはん「始てこわいはづかしい跡でうれしい枕して」斯うなるからには未始終

●曇るわたしの恋路もしらず「たゞ信「いたづらに送る月日はおほけれど花見て浮」(百三) 立つ春の艶」晴て邪魔するにくい月

●ナンボあかるい開化の世でも「清元北しう「千里が一里通ひ来る」恋のやみぢにや瓦斯はない

●篠を束ねてつく様な雨に「清もと「垣をとられて丸木橋やオツトあぶない既のこと」ぬれてかよふも恋の路

●咲た花ゆへ又散る苦勞「清元玉川「ア、恋せまい迷ふまい」(百四)」イツソやもめの氣樂ずみ

●ついた事からコレ見やしやんせ「富元お千代「目元に絞る縮緬の二重廻りの抱へ帯」最早袖にも隠されぬ

●逢たさ見たさは飛立ばかり「一中節「ふけて青田にこがるゝほたるれん子まで来て蚊帳のそとア、何とせふ」 兎角うき世はまゝならぬ

●帰る羽織のたもとに縫り「清もと「短い夏の一夜さに忠義のかける間もあるまい」(百五)」しくじりや妾しが立すゝす

●年が違をが女房があるが「常盤津「泡ときへゆく信濃屋のおはんは」そんな事をば構やせぬ

●詩入の部『きほらし』 第二篇『なかよし』とほとんど同じ)

○芸妓する身はそらとぶ鳥よ「姉客南海兄洛師。四人骨肉半天涯」どこのいづくで果るやら

○こしの鑑札府庁へをさめ「与君相尚転相親。」(百六) 与君双棲共一

身「はやく往たいぬしのそば」

○ほれた三字に気をうばわれて「呼狂呼賊任人評」一時わすれた義理の二字

○見おくり見かへり涙となみだ「不知双涙辞親日。正是丹心報国年」あかぬ別れの明がらす

○意気地の張のと云やいふものゝ「娼家美女鬱金香。」(百七) 飛去飛来公子傍」矢はり目につく金どけい」

○思ひしづんで火鉢にもたれ「旅館寥々将暮天。」落て氣のつく柘のくし

○風がもて来る二階の葉うた「燭暗数行虞氏涙。夜深四面楚歌声」おもひある身のむねに釘

いろは都々逸一千題終」(百八) 明治廿四年二月十三日印刷

全 二月十八日出版 編集兼発行者 東京々橋区中橋和泉町四番地

印刷者 西村寅二良 町田宗七 日本橋区新右衛門町十番地

発売行 東京々橋区中橋和泉町四番地 東雲堂

同 名古屋市本町通六丁目 東雲堂本舗」(奥付)